

# 白 海 '68



群馬大学工学部  
ワンダーフォーゲル部

5号

# 卷頭言

## 皇海によせて

部長 岡 部 宣 男

部誌「皇海」を君なここに発行する。内容は主に本2年12月から40年11月までの1年間の部員のワンデルングの記録である。我部も今年は歴的に大きくなり去年度よりから部として新たな段階に入っていると思う。その意味で今年1年間の我々の活動は重要な意味をもっていた。この1年間の活動の柱として広範囲なワンデルクがあり、その具体化として収容者があつたわけであるがまた一方では県外に初めて出たという画期的な合宿であった。しかし我々は、この広範囲のワンデルクというものをただ単にワンデルクの手段を増しただけでは止まつてはいけないとと思う。ほんのワンデルクを通じて各々部員の追求するものは何なのか、またその各々の追求とはいかなる関連性をもつているのか、その関連性を見い出すことによって我ワングルの我部の追求するものが明確になつてくると思う。この意味でこの関連性の追求こそ今後の課題となるだろう。

また、公開ワンデルング、秋合宿、三学部合同ワンデルング、スキー合宿などにおいても、いままでにない様々な問題を残したと思う。しかし我々は、こういう問題を一つ一つ乗り越えて進んでいかなくてはならないと思う。そのためには、部員一人一人が、部員であることを自覚し、責任をもつて自ら任務を遂行してこそ初めて、ワンダーフォーケル部として、クラブとしての活動が展開されると思う。とくに部員数が多くなり、同好会的傾向になりやすい現状において、各部員の主体的な行動こそとくに重要ではないだろうか。

こうして1年間の行動をふりかえってみると、一つ一つのワンデルングが様々な教訓を与えてくれる。我々はこの教訓をしっかりと噛みしめて、決して単なる反省にとどめることなく、一步一歩前進しなくてはならないと思う。

最後にこの部誌が部員一人一人の今後の活動の良い布石となるように期待したい。

## 目 次

卷 頭 言	1
冬合宿(スキー合宿、上ノ原)	5
春合宿(伊豆)	5
新人合宿(足尾)	9
夏合宿(東北)	10
蔵王隊	11
栗駒隊	13
八幡平隊	13
朝日・飯豊隊	23
北上隊	27
海岸隊	31
サイクリング隊	35
夏合宿の天気	39
三県部合同ワンデルング	41
公開ワンデルング(尾瀬)	42
分散ワンデルング	44
渡良瀬渓流の山々	44
社山	44
六林班・小法師尾根	44
柏尾峠・穴切	45
赤城南面梨木温泉	45
柏尾峠	46
袈裟丸山	46
尾尾・日光縦走	46
袈裟丸山連峰	48
屏津山・松木谷	50
庚神山・星海山	51
細尾峠・柏尾峠	51
社山	52
袈裟丸山	53
足尾二子山	54

上越県境方面	56
谷川岳縦走	56
巻機山	56
尾瀬	57
白毛門、朝日、蓬峰	58
谷川連峰	59
白毛門、朝日岳	60
尾瀬	60
苗場山、和山、野反湖	61
尾瀬	64
谷川岳・ヒッゴウ沢	65
その他各方面	66
西上州県境縦走	67
戸隠連峰	68
武尊山	69
浅間山	69
北海道旅行	70
北アルプス西部縦走	76
飯豊山	78
小渋川逆行荒川岳—甲斐駒縦走	80
那須	83
白峰三山縦走	83
比良山系口の深谷	86
大峰山系神童子谷	86
四国剣山—三嶺	87
加賀白山	88
氷ノ山スキー	88
鉢伏山—滝川山スキー	89
加賀白山スキー	89
北アルプス西穂高岳—奥穂高岳	90
木曾御岳	91
野沢温泉スキー場	92
平標山スキー	92

蓬峰スキー	95
尾瀬スキー・ワンデルリンク	93
尾瀬・平ヶ岳スキー	75
サイクリング	96
水戸・水郷サイクリング	96
西上州佐久サイクリング	97
 編 集 後 記	98
部 員 住 所 錄	99
O. B. 住 所 錄	102

# 冬 合 宿 (スキー合宿)

月 日 12月24日～12月28日

場 所 利根郡水上町藤原 上ノ原スキー場

メンバ一 川田、草場、久保田、黒田、藤井、横尾

江黒、小沢、脊藤(譲)、原

岡部、上山、小堀、中島(恒)、根岸、広田、堀江、松田

12月24日 ☀

桐生(7:16) ■■ (9:47) 水上(10:10) = (11:10) 上ノ原入口 —— (12:45)

上ノ原山の集合

今年も又、熊谷高校山岳部に出会う。歩き出すと雪が降り出し、かなりの苦戦である。しかし積雪量は少なく、スキー場も各所に地面が露出している。昼食後、滑り初めるが、狭い場所に多数の人間が密集し、かなりの混雑である。午後10時消灯。

12月25日 ①

当番は6時、他の者は7時起床。9時より行動開始。山ノ家の前の斜面は状態が悪く、上の立教大学前まででかける。基礎組と応用組に分かれて訓練する。立教大学の人々も混つて、ここもかなりの混雑である。滑っているうちに畠の面が段々現われてきて、ここも危うくなる。夕食後、教育学部、医学部ワンゲルとの合同コンパを行う。

12月26日 ①

昨日と同様の活動をする。

12月27日 ①

山の家の上の台地まで移つて滑る。数日前はここもひどかったそうだが、今日は何とか滑れる。各斜面とも、よく刈り払われてはいないが、今年からは整備されているはずだ。

12月28日 ② → ☀

さしたる事故もなく、合宿の日程を終了する。今年は積雪量が少なかつたが、帰りだすと、突然大寒波が襲来するありさまとなつた。

# 春 合 宿

地域：伊豆半島

月日：3月7～15日

- メンバー； ① 班 加藤、岡部（C.L.）、埋橋、須藤  
 ② 班 中島好、中島恒（会計）、小堀（器具）、広田（記録）  
 ③ 班 南雲（食料）、根岸、堀江（S.L.、気象）、山田（救護）

#### （計画立案）

この一年間クラブ運営を行う私達にとって、一番大切なのは、私達の和であり、それこそクラブの本質である。そこで今回は新三年生相互の親睦を深めることを目標とした合宿を行うことにした。地域については、合宿目的からも、時期的にも伊豆半島がいいのではないかと即座に決定し、以後の準備が、期末試験の真近かに迫ったあわただしさの中で、進められていった。雨に対する懸念、2月に降った異例の大雪のその後の状態などを考慮して、2日間の予備日を含め、以下の計画立案がなされた。

- 3月 7日 桐生 → 三島 → 修善寺 — 達磨山キャンプ場  
 3月 8日 ふ — 戸田峠 — 達磨山 — 南無妙峠 — 仁科峠 — 猫越峠  
 3月 9日 ふ — 清沢峠 — 白川峠 — 長丸郎山 — 池代 — 大沢温泉  
 3月 10日 ふ — 松崎 — 雲見 — 波勝峠  
 3月 11日 ふ — 伊浜 — 落居 — 子浦  
 3月 12日 ふ — 妻良 — 吉田 — 入間 — 仲木 — 県立有用植物園  
 3月 13日 ふ — 石廊崎 — 下田 → 伊東 → 東京 → 桐生  
 3月 14日 } 予備日  
 3月 15日 }

#### （計画実施）

3月 7日 (木) ①→②

桐生(6:41) → (8:04) 小山(8:19) → 上野(9:48) → 東京(10:10) → (12:43)  
 三島(13:10) → (13:55) 修善寺(14:20) — 達磨山キャンプ場

出発時は忙しいことの連続であった。小堀君の遅刻、東京駅での時間スレスレの乗車。小堀君は一列車遅れて三島で合流することができた。修善寺からのバスは快適で、皆、車窓からの富士の美しさに醉っていた。所が達磨山キャンプ場に着く頃になると、雲行きがおかしくなり、今にも雨がふりそうになってきた。雨にそなえた場所にキヤンフルをはつてから、全員で金冠山の中腹あたりまで散歩にでかける。ガスが濃くなってきたので、早目に下山し、19時には就寝した。明日の行程が長いからだ。

3月 8日 (金) ②→③

ふ(3:40) — TS(6:30) — 戸田峠(7:00) 達磨山々頂(8:20) — (10:30) 船原峠  
 ホテル(12:20) — (13:00) 土肥役場(13:15) — 大藪公民館(13:30)

夜半過ぎ、強風と共に雨がふりだした。しかし朝には上がり風と霧のみ残る。天気予報並びに雲行きの工合から判断して、予定通り出発することにした。所が戸田峠を過ぎるあたりから風は増え強ま

り、おまけに爻ぞれを伴つてふきつけてくるようになつた。頭上からは石がおちてくるし棟からはビンビシミゾレが類を打つた。達磨山々頂頃になると、瞬間風速40kmほどのすごさになり、今にも体が宙にまいはじめそうだつた。皆、必死にコンクリート敷きの山道をはい登つた。山頂すぎて雨は本降りとなり、リーダーは「ポンチヨ着用」を命じた。そして切り崩かれた車道を船原峠へと急いだ。1時間半に渡る風雨との戦いの後、船原峠のホテルに逃げ込んだ。びしょぬれになつた衣服を着替え、今後のことを相談した。結局予定を変更して、このまま土肥にあり、西海岸を歩くことに決定した。雨は止むこともなく、風も勢を衰えることを知らず、嵐の様に吹きあれていた。その間に昼食を取り、すぐにバスで土肥に向かつた。土肥温泉で冷えた体を温め、大蔵の公民館を借りて早目に就寝した。

### 3月9日(土) ○

あ(7:10) — 宇久須(10:00) — 黄金崎(10:35) — 安良里(11:50) — 田子郵便局(13:20) — 造船場ふ(14:30)

快晴であるが依然として風は強く波も荒い。土肥をすぎて向もなく富士が姿を見せ始めた。さっそく記念撮影をする。その後はアスファルトの道を、富士をみながら淡々と歩いた。アスファルトの道が足に当つて痛い。田子町の手前で昼食をとる。付近のミカンを2.3個いただく。田子町ではどこもキャンプ禁止となつていたのでキャンプ場見つけに一苦労。結局造船場のすみの海岸にテントをはらせてもらう。夜、明日帰還する埋橋君の送別会を行う。

### 3月10日(日) ○

あ(5:00) — TS(7:20) — 堂ヶ島(8:30) — 松崎町(10:00) — 岩地(11:30) — 石部(12:10) — 雲見(13:00) — 雲見神社境内ふ(13:10)

風もなく、海もおだやかな、全く快適な一日であつた。堂ヶ島で30分休む。この辺の海の景色は、絵に画いたように美しい。しかし、日延のせいか堂ヶ島には人も多く、群大の学生もみかけられたそうだ。松崎で埋橋君と別れた。松崎後はアスファルト道でないので、ほこりがすごい。しかし予想外に早く雲見に着けたのでよかつた。ここも「キャンプ禁止」であつたが、決辺にテントを張つてしまつた。散歩に裏の雲見神社に登る。すばらしい海の夕焼けが広がつていた。神社といつても、ほこらは200m位の山頂にあるので、登るのに汗をかいた。夕日に輝く富士をスケッチしていた者もいた。

### 3月11日(月) L→○→●

あ(5:30) — TS(7:30) — 波勝崎・子浦分岐点(9:15) — 波勝崎(9:50) — 潮崎・小浦分岐点(11:00) — 伊浜(11:45) — 藤屋(13:35) — 子浦海岸ふ(14:05)

久しぶりの山道歩きで疲れる。しかし、咲き乱れた梅に慰められて快調にとばす。波勝崎は、猿いるという二とだけで目立つて面白い所ではなかつた。伊浜は日本一の花卉栽培地だけあって、ここを歩いていると甘い香りが漂つてくる。花畠から溝向へ、道路補強をしていて、小道のわり合に異様に大きな「人も通さず」の立て看板がしてあるのにもかかわらず、通行許可を申し出たら、もなく許してくれたのには驚いた。さて、今合宿最大のハイライトは、何といっても子浦の思い出

あろう。タラタラ書くと興ざめになるから、書かないことにする。要するに現住民と生きた会話ができたこと、思つてもみなかつた最適のコンバ場で、最適のコレバができたことは、この上ない喜びであつた。夜雨が降り始める。

3月12日(火) ②→①

あ(6:00) — TS(8:30) — 妻良(8:50) — 吉田(10:00) — 入間(12:05) — 仲木・石廊崎分岐点(13:35) — 裏石廊崎(14:15) — 長津呂(15:00) — 県立植物園裏海岸(15:20)

昨日の天気予報から天候が安じられたが、朝あきてみて朝日がさしているのでホッとした。現地の人達との別れを惜んで、8時30分頃迄、海岸で遊んでいた。妻良を過ぎると山道へ入つた。山道といつても、本当に海に沿つての道なので、風当りが強く仲々進まない。入間からXスズ一匹が我々のパーティーに加わる。裏石廊崎あたりからさらにオス犬一匹が加わり、2匹で我々の先頭に行く。桃太郎の鬼退治凱戦の図のようだ。アスファルトで痛めた足をひきずり、どうにかこうにかやつてきたがゴール真近になると元気がでてくる。植物園についてから石廊崎までピストンした。夜は隣りにテントを張っていた東京女子体育大学のパーティーとキャンプファイヤーを行つた。彼女等は、我々のもの計画の逆をゆくとのことだった。

3月13日(水) ①

あ(5:30) — 石廊崎発(10:25) — 伊豆急下田駅前(12:56) — (13:54) 伊東(14:11)  
— 東京(16:57)

5時30分に起床して、希望者のみ日の出をみに石廊崎にゆく。10時迄は、各班の自由行動とした。昼メシは加藤官の庭を借用。帰還する方向がまちまちなので東京駅で分かれだ。

#### 〔反省〕

一応目的は達成できたと思う。コースを変更したことについては、天候並びに今回の合宿目的を考慮し、かつ全員の希望に従つたのだから悔いはない。

8日朝、強風についての出発であるが、これも天気予報並びに天気の状態からいつて止むを得なかつた。これは貴重な経験であつたがしかし2度とくり返したくはないることである。しかし、ポンチヨが雨の中で役立たなかつたことは今後の問題となる所だ。それに霧中での行動は、列が乱れやすいため慎重を期したい。その他、朝の出発前の行動をもつと能率よくすべきである。それから「去年行つてゐる者がある」という頭から、とかく現地への予備知識が不足しがちである。食料については、予備日の食料に問題があつたが、まあまあ食料計画はうまくいった。しかし、ホウチヨウ、マナイタ不足は痛かつた。それから、今回は食料の現地調達が可能であつたので、考慮してほしかつた。

(以上、反省会記録より抜萃)

# 新人合宿

月日 4月28～29日

山域 六林班峠、小法師尾根

目的 新人との親睦と、体力、技術の習得につとめる。

メンバー

①班 広田、中島(S)、高橋、根本、荻野

②班 斎藤カツ、西口、五十嵐、原

③班 岡部(C.L)、草場、加藤ヨシ、宮川、大橋、川野

④班 中島(E) 小林、埋橋、吉野、渡辺、岡田

⑤班 小堀、島居、斎藤、須藤

⑥班 堀江(S.L)、若林、宮村、江黒

⑦班 松田、根岸、山田、浅貝、須田、滝野

⑧班 上山、河野、加藤、大沼、南雲(食料)、伊藤、小次

⑨班

4月28日(日) ○→●

桐生(8:54) — 原向(10:18) — 小滝(11:30) — (11:55) 銀山平(12:20) — カー  
居(13:25) — (14:50) 勝甲山荘下る

天気予報とはうらはらに、今にも雨が降りだしそうな空模様のことを、運休のせいもあつてか迷ふ列車にむられて原向に向かった。案の通り、さっそく雨がふりはじめ、銀山平での昼食は傘をさして、おつな昼食であつた。岡部リーダーが先頭に立って、ピントをかけたせいか、早く庚申山について、まつた。ところが雨はますます勢を増し、全然止む気配がないので、早い所、キャンプを張つてタマをとり、明日の快晴を祈つて早目に床につく。

4月29日(月) ●→○

8(8:10) — の鳥居(8:40) — (9:35) 銀山平(10:10) — 原向(11:20) — (11:27) 桐生

朝になつても雨は止まず、沢の増水やパーティーの人数を考慮して計画中止を決定。テントの浸水(特に冬用テントはひどかつた)の為、さっそく引き上げることにした。途中、道巾一ぱい程もある石が落ちていて、昨日の雨のひどさを物語っていた。桐生につく頃には雨も上がり薄日さえさせていた桐生駅でそのまま解散した。

(反省)

歓迎コンバ、新人合宿とともに雨にだだられて残念だつた。それにしても、28日の夕食の肉が少々腐

つっていたのは、問題の所であった。思ったより気温が暖かく、その上ビニール袋に入れた保管が問題であったようだ。この問題に伴つて、合宿でのタバコ、酒の問題も考えるべきだ。

その他、2年生の集合状態の悪さが目だつた。部員である自覚を持つてほしい。

## 夏 合 宿

〔計画立案から実施まで〕

- 1月 昨年までで、一応県境が整理できたので、今年は県外に足をのばすことに決定。
- 3月10日 3年生春合宿の折、夏合宿の地域として「東北」を選択することに決定。
- 3月14日 春合宿反省会席上、夏合宿地域として「東北」とすることを再確認した。
- 4月10日 6月30日、7月7、14日をリーダー養成兼夏合宿偵察にあてる、7月17~31日を夏合宿とすることに決定。
- 4月30日 「県外への第一歩」という目的の他に「色々なワンデルリンクの試行」さらに「定着地の設定」が添加決定された。  
以上の概念の下に次の2つの方向性が決定された。
- (1) 東北の3大山系、奥羽、出羽、及び北上山系のアタック
  - (2) これまでの「山歩き」というワンデルリンク形式の外に、「川下り」「サイクリング」という新しい形式を持ちこむ。
- 5月8日 「山の花」講習会を行う。(スライド使用)
- 5月18日 オー回ボッカ(妻山往復)を行う。18名参加、25km。(所用時間3時間5分)
- 5月22日 定着地に仙台周辺と決定、定着日は7月29、30日とする。奥羽山系に、その道程が長いため、3パーティーを出すことに決定、さらに、海岸線ワニデルニクパーティーも加えることにした。従い以下8パーティーをくり出すことにし、今後は、各パーティーに分れて計画を推し進めることにした。  
奥羽(1)(2)(3)、出羽(朝日、飯豊)、北上、河下り、サイクリング、海岸線  
(現地解散か否かの問題がおこる)
- 5月25日 オ二回ボッカ(吾妻山)10名参加、30km
- 6月5日 オ三回ボッカ(吾妻山)14名参加、30km
- 6月12日 最終的に、以下の隊を派出することに決定(河下りは、技術性、危険性からみて廃棄となる)。
- (1) 奥羽 八幡平隊
  - (2) " 栗駒隊

- (3) 奥羽 戰 王 隊
- (4) 朝日 飯 豊 隊
- (5) 北 上 隊
- (6) サイクリング隊
- (7) 海岸線隊

各隊の大まかな日程、費用が発表された。2年生の希望をできるだけ取り入れて、  
をすることにした。

- 6月26日 現地解散は、原則として認めないことに決定。
- 7月4日 各隊ごとの具体的な日程登表、及び隊編成の決定。
- 7月2日 夏合宿最後のうちあわせ行われる。計画書の配布、各隊ごとの打合せ。夏合宿の運営、  
調の調整と器具の点検とを怠ぬことを約す。(しかし参加者は全体の  $\frac{1}{3}$  で、  
7月12日 第四回ボッカ、鳴神まで行く予定が、天候不順のため途中で下山する。25km

## 戦 王 隊

7月21日～7月30日 小堀、中島(好)、西口、斎藤

7月21日 ①

桐生(5:55)---(10:00)白石(14:20)---(15:30)硯石---(15:55)硯石キャンプ場より  
盛夏の朝はむし暑い。宇都宮から乗り換えた急行は満員。白石まで立ち通しで疲れる。バスへの接続が悪く4時間近く駅で待つ。本数が少ないので事前に調べておくとよい。キャンプ場はバス停からすぐ近くである。水道の設備がある整備された明るい所だ。夜は合宿への抱負と期待を話し合って合宿への意志一致を行う。

7月22日 ②

歩(5:30)---(8:30)鎌先温泉への分岐---(8:45)不忘山(8:55)---(10:30)屏風  
岳---(11:30)芝草平歩

不忘山への登りはハイピッチだった。出発の時の風は上に行くにつれて増え強くなりがstri出す。  
山頂は強風とガスで寒く身をぢぢめてパンをかじる。下りはヤセ尾根で強風にあおられて立つてられない。木や岩にしがみついて下る。屏風の頂上は立々としてシャクナゲが咲き誇っている。  
風と霧と時々の雨は増えひどくなり体力の消耗も激しくなる。初日のため長い合宿の前途を考えて幕営を決意。池塘のある草地だったが大きさはつかめない。強風のためタガポールがかけてしまふ。  
夜は二本ポールの低いテントで寝る。

7月23日 ③---①

ふ(7:15) — (7:35) 杉ヶ峰 — (8:20) 蔵王エコーライン — (9:40) 刈田岳 — (12:40) 名号峰 — (15:50) 南雁戸山 — (16:40) ふ

天気が相変わらず悪い。様子を見て相談。とにかく雨の中だが少しでも進む事にする。刈田岳には林道が在りすぐ近くに小屋がある。エコーラインを何回か横切つて刈田岳へ出たが霧のため蔵王の景色は足元から消えていた。レストハウスで水を補給しあるべきはずの五色沼(お釜)を右手に連想して熊野岳への岩肌を登る。途中から名号への道へ別れハイピッチでとばす。蔵王からはなれるにつれ天気が回復してきて日が出てくる。汗もはじめて出てくる。名号山頂では愛らしい「駒草」が迎えてくれた。ハイピッチで仲間は疲れてきたがきのうの遅れをとりもどすべく距離をかせぐ。日没まで歩きつづける。幕営地はヤブの中でササ道の上。

7月24日 ①

ふ(7:40) — (8:10) 雁戸山 — (10:10) 笹谷峠(12:25) — (15:00) 神室山 — (16:20) ふ

ササ道ゆえ足場悪くパツキング遅れる。笹谷峠は真夏の暑さだった。峠付近でオートバイをかりて中島が笹谷部落へ石油を買出しにいく。出発のとき石油とまちがえてメタを4㍑ももつてきてしまつたのである。峠からの登りは陽を背中にうけて暑い。幕営地は水場も近くいい所だ。

7月25日 ①

ふ(6:15) — (7:10) 清水峠 — (9:00) 二国峠 — (11:05) 石橋峠 — (12:15) 小東峠 — (16:00) 南面白山 ふ

チヨット寝すごしてあわてての出発。清水峠から沢を下つて水をくんでくる。時間がかかるからテント場より進んでまで清水峠はノンストップで行つた方がよい。二国峠から竜ヶ峰への登りはアプローチが長く暑さと「休みなし」のため疲れる。小東峠までは山の登りおりを強い日射しの中で進む。予想していた小東からの鞍こぎは以外にもすでに新道が開かれていたため楽な歩行。南面白までハイピッチで進む。幕営は山頂を少し下った鞍の中にする。

7月26日 ①

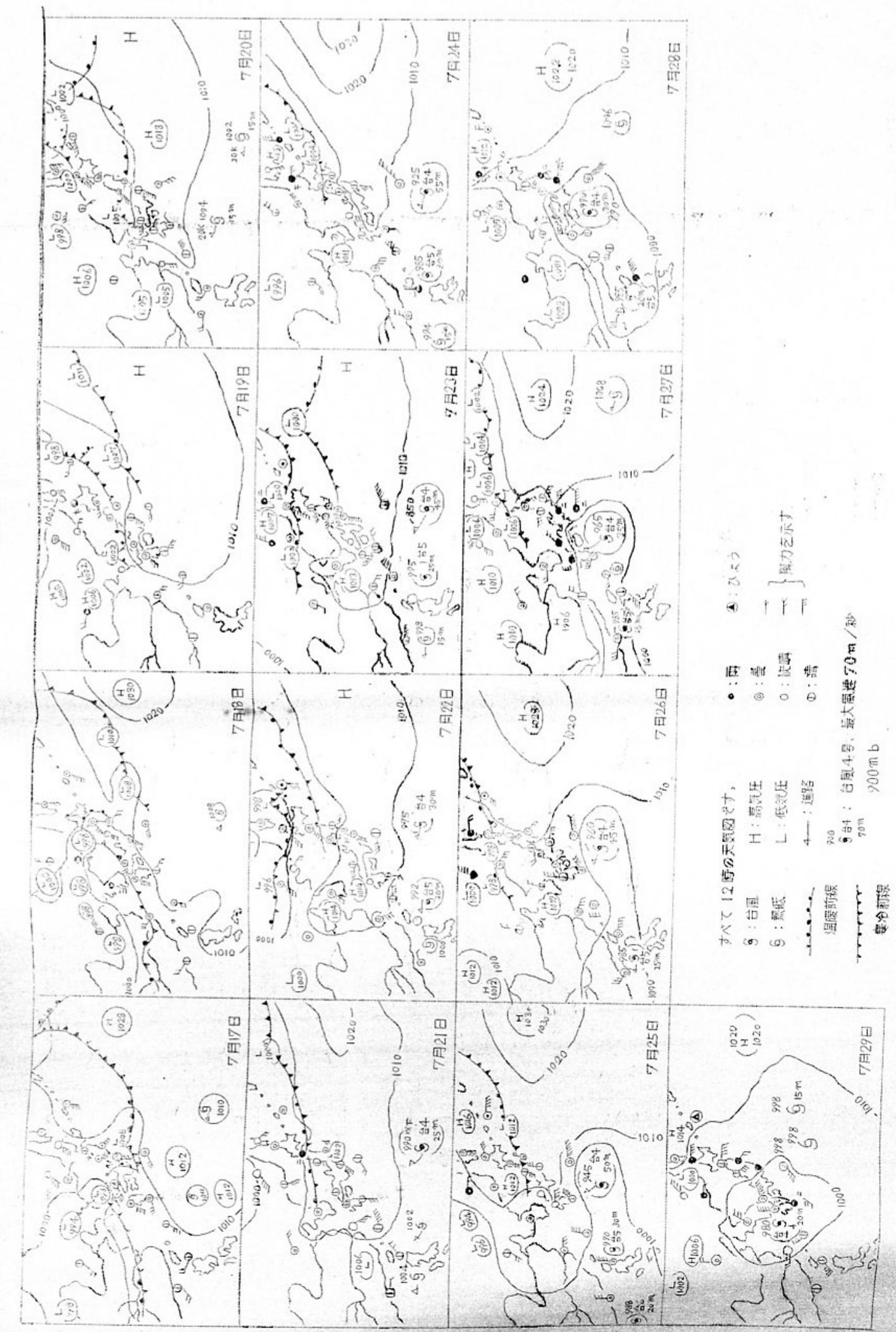
ふ(6:10) — (8:30) 小ピーク手前 — (10:00) 沢へ下り昼食 — (15:00) 昼食 — (16:30) ふ

すばらしい朝、南面白山頂からは雲海の上にポツンと顔をだした山々が朝日に当つて輝いているのが手にとる様に見える。歩行はいよいよ鞍の中に入る。1日中鞍の中をさまよつたがキヨリはかばなかつた。バカ尾根と大きな崖木で自分たちの位置はつかめなかつた。1044ピークの前で道を発見。ここで幕営。

7月27日 ●キ

沈黙

霧深く鞍こぎは困難である。強風がテントにぶつかる。台風が近づいているらしい、齊藤・中島が1



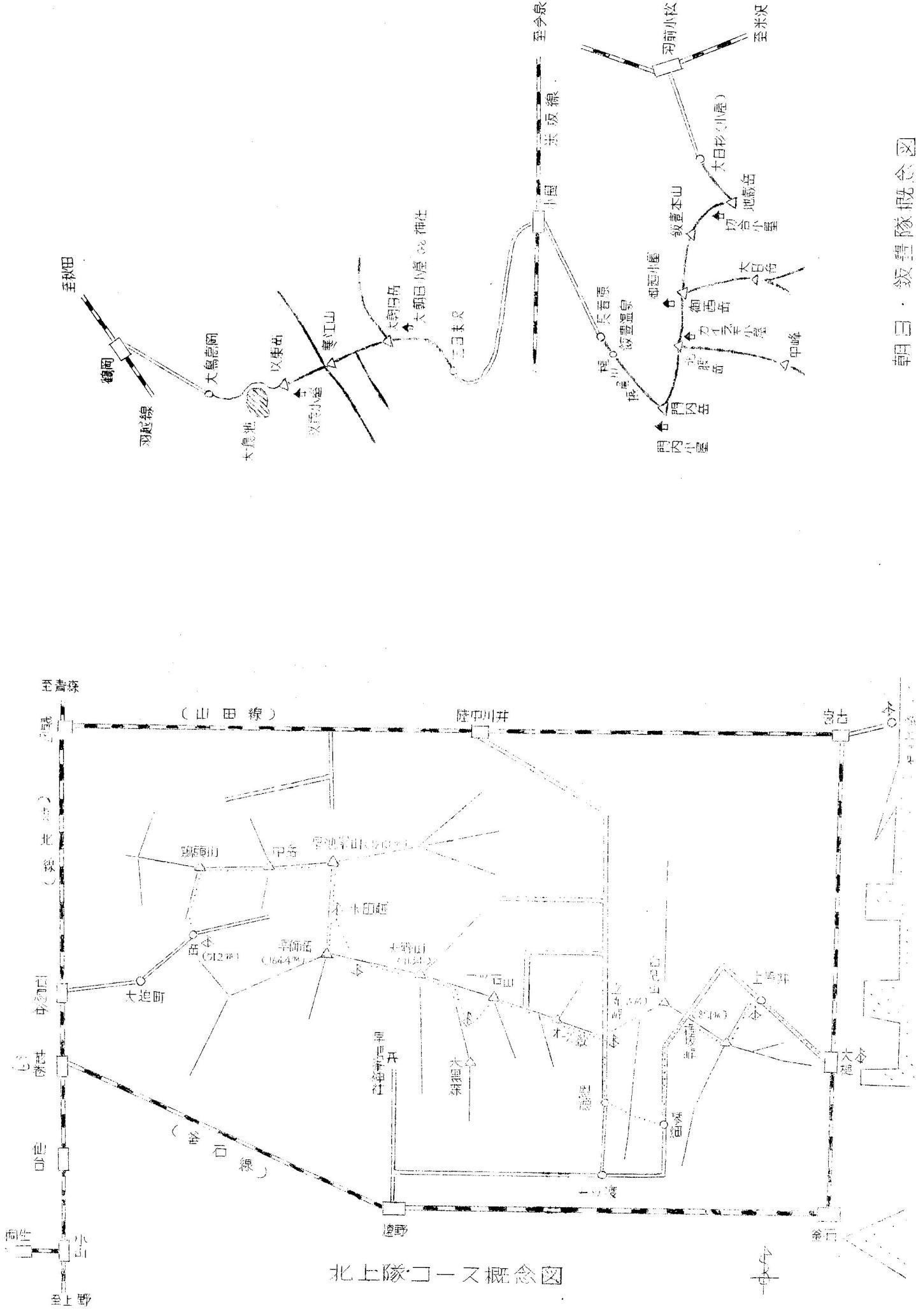
## サイクリング隊概念図

## 宿泊地と宿泊日

〔 我隊の他の山行地も参考のために記入した 〕

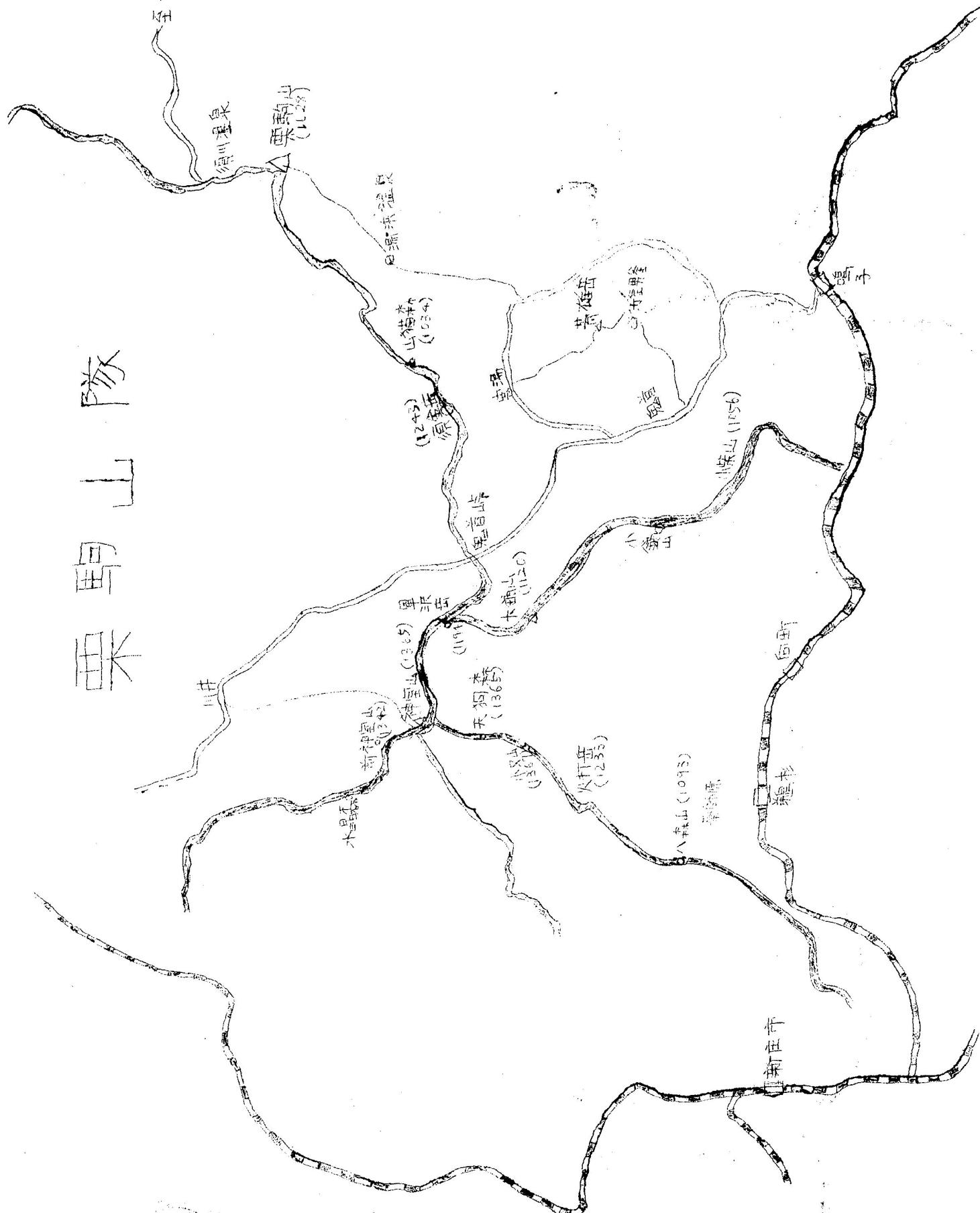


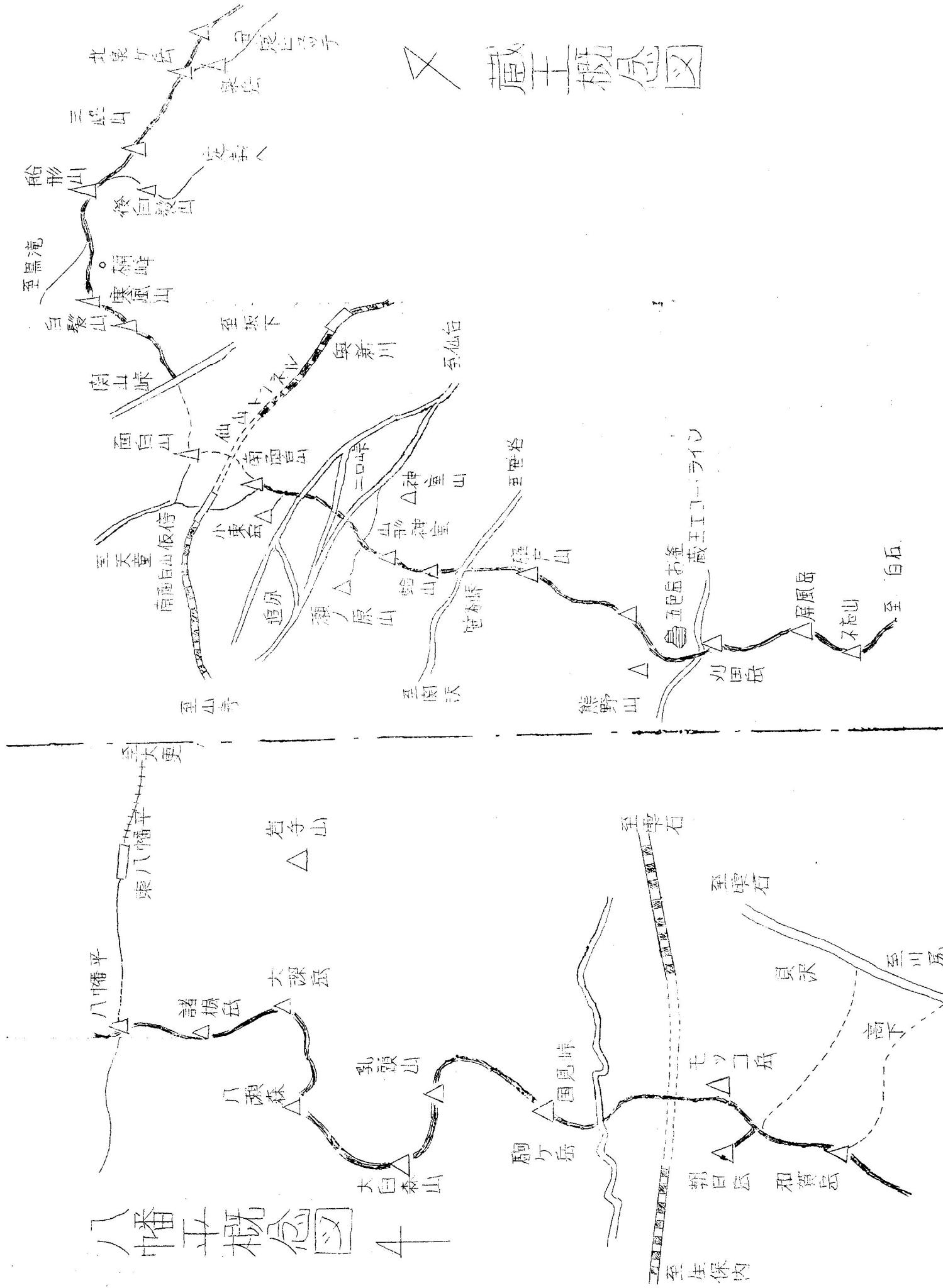
國學概念



五  
四  
三  
二  
一

卷之三





八番平概念

時間の偵察に行って前進はできないと判断。昼食後深を下つてみたが危険な状態なのであきらめ、早く時のすぎた日であつた。

7月28日 ④

る(10:30) — (11:25)昼食 — (14:40)大東岳 — (17:30)本小屋

移動できる天気ではなかつた。台風が近づいていた。1044ピーク前は霧と強風雨で最悪の事態だつた。テントの中はゆうべの浸水で居る所もない。脱出しないと仲間との集着にも間にあわなくななる。ピーク越えも決下りも危険性は非常に大——しかし動かなければならぬ。沢を詰めて山腹に立つ。ものすごい藪だが登るだけなので道をまよう心配はなかつた。頂上に出て下の部落へ急ぐ時、足は心なしか軽かつた。本小屋近くのバス停で落着

7月29日 ④→①

る本小屋(10:40) = 仙台(12:40) = (14:00)泉ヒュッテ

バスにのつて集着点へむかつた。朝の雨も山を下るにつれて晴れてくる。仙台の人混がなぜかわざわざ感じた。泉岳では仲間との邂逅。感激の瞬間である。

(反省)

小人数でしかも買い出しなしの計画であつたので重量が過大となり、それが計画を狂わせた一因と考えられる。又、朝の起床時間に見られるような気のユルミを生じたという点も問題である。

## 栗駒隊

7月16日～7月30日

(実行前)

我々の隊がこのコースを送んだのは資料が豊富であつたからだ。初めは大柴山 — 小金山 — 軍沢岳 — 須金岳 — 栗駒山のコースを検討したが道がないこととデータ不足の為まだ検討もなく今回東北地方が初めてであるということから資料だけでもついている所を送んだ。結果的には、これは良かったと思う。一例を上げるなら小森 — 神室間に全く水場はなく、もしこれがヤマアであつたら、即ちこれが神室 — 栗駒間にあてはまることだつたらとても縦走など出来ない。事実今度の山行でこのコースには須金岳の一部を除いては道のないことが解ったし、またかなりのヤセ尾根であることからも少なくとも神室 — 軍沢間に水はないであろう。

7月16日 ①

桐生(20:25) — (21:37)小山 —

八幡平隊と一緒に小島さんの見送りを受けて出発。

7月17日 ●キ→○

(5:00)仙台(5:10) — (6:30)小牛田(7:19) — (8:31)鳴子(11:36) — (12:26)鶴松(13:00) — 薬師原(13:43) — (14:05)ふ

小牛田で八幡平隊と別れる。我々はここで陸羽東線に乗り換える。車内からはさして大きい山も見えず、木田の多いのが目につき、両毛線に乗っているような気がする。しかし乗客の話を聞くとやはり両毛線とは思えない。鳴子で列車待ちのため3時間あつたので市内見物や買出しをする。町中どこでも鳴子二けしを整造している。実際に巧みに作り出す。鶴松は無人駅であり、そこで土地の人に山の状態を聞こうとしたが水と道の発音が解らなく水ときいても道と答えてしまう。これは薬師原でも同じである。“ムチはずつとつててるダ”という具合である。

7月18日 ○→○→○

ふ(6:45) — (7:07) 300m(7:12) — (8:35) 700m(8:40) — (10:15) 陵線、休場分岐(11:00) — (11:23) 小森山頂ふ

心配していた雨に早速やられる。6時頃ちょっとやんだけで出発することにする。初日なのと急登の為休みの間が短くなる。時々強雨にまわれながら陵線をめざす。休場分岐のあたりで地図上にない三角点を見つけ、まだ付近の地形が地図と一致しない為検索をくり返しながら進む。1,093mの山であるがどうやら等高線は×チャ×チャのようである。又時頃から雨が強くなつてしまつて適当なT.S.がほしくなる。小森山頂にはここから意外に早くつきすぐに幕営の準備をし雨傘をボリタンにとる。小森の山頂は晴れていたらすばらしい眺めであろう。強風をさけて迷んだT.S.の浸水がひどくなつたのでT.S.を変更。始めからさんざんである。夜になつて風雨は強まるばかり。

7月19日 ○→○

朝3時に起き一応出発の出来るようにしておいたが風雨強く沈黙することにする。ノ時のニュースによると東北特有の大雨とのこと。特に最上は210mmを越したそうである。午後雨は上がつたがガスの流れは早い。又雨水をとろうとしたがやんてしまふと水はすが良く結局4度も取れなかつた。

7月20日 ○

ふ(5:30) — (6:40) P.1020mの手前のコホ(6:47) — (7:35) P.1200m(7:1) — (10:42) 火打山(11:00) — (12:16) P.1107m — (13:25) P.1280m(14:00) — (14:45) 鳴子山ふ

出るなり道をまちがえる。地図のちょっとした所にも注意を配らなければならぬ。標示をあてにするととんでもない所に行つてしまふ。ここからは水が一番気が抜けなので常に水の有りそうな所を見つけながら行く。二三度取れそうな所が有つたので下りてみたが結局沢が深かすぎて無理であつた。この尾根は1日1日がちよつと變った程度の山であるのに雪渓がかなり見られる。多分このことも沢を楽しくしている原因であろう。又、ニッコウキスゲやシャクナゲが実に見事に咲いている。特に火打岳は草原状になつておりフウロウの一種とみられる花が美しい。又1280mP.あたりにはかつて

湿原があつたのではないかと思われる。午後にもなると又風が出て来てガスが流れ出す。また給水制限もかなりこだえてきたらしい。しかしみんな元気であり一生懸命仕事をしてくれるので助かる。

7月21日 ●

●(5:30) — (6:40) P.1020mの手前のコル(6:47) — (7:35) P.1020m — (10:42) 火打山(11:00) — (12:16) P.1107m — (13:25) P.1280m(14:00) — (14:41) 小又山本

天候は相変わらずガスついている。西又沢まで2名で水を取りに下る。結局700mも下り沢の深さにあらためて驚かされる。この尾根での水場はとても期待できない。小又山から神室山まではやはり前日と同じ様な尾根が続く。雪渓もかなり大きなものが見られる。花はニッコウキスゲを代表に相変わらず美しい。又、急な神室山への登りにはイワイナヨウの群落がある。神室山頂で軍沢岳方面のヤフはとても無理と結論している間に何とか山岳会の会長とかいう人が背中にシャクナゲを隠しながら下に避難小屋が有ると教えてくれたので明日は秋田駒に下山することにして小屋にとまるところにする。

7月22日 ○→●→○

●(5:30) — (6:05) 1200m(6:10) — (6:35) 1000m(6:40) — (7:00) 西の又沢(7:10) — (9:35) 民家の手前(9:45) — (10:25) 学校の下の橋(10:30) — (11:45) 川井(12:50) — (14:07) 恵庭子前 — 河原木

軍沢岳方面のヤフを断念、駅内に下山することになる。神室山をちょっと下った所にイワイナヨウの草原がある。多分湿原あとであろう。西の又沢への下りはかなり急であり、足を痛めていた者もあつたのでゆづくが降りるつもりでもつい早くなってしまった。皆すっかりひどく笑わせてしまった。川井よりバスで恵庭へ行きそこで貢出しました。土地の人からのさし入れのキャベツ入りスモヤキで腹をふくらます。夜はテントをめずらしがつて来まで来た子供と遊ぶ。

7月23日 ①

●(12:00) — (12:30) キャンプ場(12:35) — (14:00) 牛山越界との分歧(14:10) — (14:20) 野地駒山入口(14:30) — (15:00) 女釜男釜

今まで家への手紙や貢出しの為に沈殿。食事に入つてから初めて太陽を輝む。12時出発。やはり暑い。坂上の晴天気は個人の所有らしく金50円セをおさめないと見られない。バカバカしいから外からのぞく。やはりこの辺も観光客が盛りらしい。荒城岳に入つてからちよび急に人が入っている様子ではないたる所に追がついている。この鳥さんざん手こずられた。この鳥井山塚を目ざして出発したが男釜女釜に予定を変更。知つていれば何でもないコースも実際に初めてがつかつてみると思わず舌先をする。女釜男釜には林業関係の人以外訪れる人もないと見え殆んど自然のままである。夕食を早くすませ早速嵐呂さがしを始める。ようやく適当な所を見つけみんなでかきまぜながら入る。又、この山の南面の水は飲めないそうであり我々は鬼首で教えられた女釜男釜のちょっと上流の水を用いた。

7月24日 ①

あ(5:35) — (7:00) 数(7:05) — (9:50) 荒場からの道(10:00) — (11:37) 荒  
雄山頂(12:10) — (14:38) 沢(14:43) — (15:00) 寒湯

3時間ばかりヤフをこいで荒湯からの道と合流。ここでも等高線はかなりあいまいのようである。ヤフの中でちょっととしたケガ人を出す。どうにか道と合流した時はほつとした。この道はかなり広くよい道である。ヤフから出て来ただけに道の有難さと便利さを感じる。荒雄への最後の登りは疲れる割には高度がとれない。又荒雄の山頂はきわめて展望が悪い。わずかに高く乗駒山が見えるだけである。又、こここの下りは急で実に面白くない山である。T.Sとした寒湯では土地の人からクマの話いやマムシの話を聞く。東北の人は本当に親切で有難い。夕食にはY君のつかまえた魚を野菜イタメに入れて食べる。

7月25日 ①

あ(5:25) — (7:15) 鎌内沢(7:25) — (7:55) — (8:04) 林道終点(10:28) —  
— (11:42) 湯浜温泉

今日の計画が終ればもう心配することはない。昨日聞いたところによると保呂内から行つても鎌内沢から行つても同じということであつたが大事をとつて車道が有るという鎌内沢から行くことにする。鎌内沢の途中からトラックに便乗。この道を湯浜まで続するつもりなのか盛んに人夫が歩いている。ここでクマが出るから気をつけろなどとおどかされ、用意してきた笛を取り出す。ここからの道は道標も有り意外に早く湯浜に着く。ここには旅館が一軒だけである。テント場代100円、入浴代20円とのこと。時間が有るので胸をケガしてゐるI君と足をやつてゐるKの他は適当に沢の滝壺で遊ぶ。若い女性が二名めかしこんで行つたり乗たりしている。泊り客ではなくここの娘らしい。その為ではないが一応道の状態を廟いておく。話しの様子では昨日も午前中に着けそうである。

7月26日 ② → ○

あ(5:23) — (6:25) お沢掛Y.Hとの分岐 — (8:15) お花畠(8:20) — (8:35) お  
花畠の雪渓(9:30) — (9:55) 大雪渓(10:05) — (10:30) 乗駒山頂(11:45) — (12:  
:30) 大雪渓

ゆるやかな沢をゆっくり登つて行く。地図の等高線を2倍位に伸ばした感じである。もう終りに近づいたためか冗談もさかんに出て来る。いつの間にかお花畠に出る。冷たい水によろこんでしばらく行くところは雪渓である。お昼にすることに意見がまとまりミルクを出しサイコロで平等に分ける誰もいない所でかくもおいしい昼食をとれるとは實にたのしい。少々皆食べすぎたか腹をボコボコいわせて最後の乗駒山頂を目指す。大雪渓に荷物をおき山頂にピストン。残念なことに最初に目に入つたのはゴミヒ人であった。それでも気をとりなおしてあたりを見ると雲海が広がり焼石岳、早池峰が頭を出している。天気は晴れである。T.Sの近くには水芭蕉やワタスゲ、イワカガミが美しい。

7月27日 ○ → ○ → ●

ふ(13:00) — (13:25) 松波八里(13:34) — (14:05) 新火口(14:15) — (14:40) 須川温泉ふ

今日は自由行動とする。昨日からの天気とはまるで變つて朝から濃霧。二年生は湿原をさがしに出て行く。天気予報によると台風が近づいているとのこと。T Sには風が吹きつけないがラジオの予報に聞き入る。二年生も帰つて来て山頂はかなりの風とのこと。一応大事をとつて須川温泉に降りる二にする。須川温泉も風が強くテントをつぶされる。朝4時ごろどうにもしかたがなくなり小屋に逃げ込む。

7月28日 ①→●→①

ふ(8:10) — (10:45) 一の関(11:15) — (13:00) 仙台(14:00) — (15:20) 泉ヒュッテふ

いよいよ仙台である。荷物代を氣にして三つにまとめた努力もむなしくとられなかつた。氣がゆるんだのかまたは道がひどすぎるのでか一の関までのバスはだいぶ皆まいったようである。仙台で折れたポーレや食料品の貰出しなすませ泉ヒュッテへ、まだ飯豊朝日隊しかつていないと。

(反省)

まず計画からいくと日数を十分取つたこと。これは初めての所なので十分過ぎる程とつた。最後の方になつてかなり余つたがこれは仕方ないことである。又、最上の尾根など崖調になりがちであつたが、これもコースの問題でどうすることも出来ない。ただこの尾根での水場をハッキリさせておかなかつたことは、結局は小又山から西又沢に水取りに行くことになつたのに小森から小又の間、何度も無駄に労力を費して水をさがしたという結果を招いた。又、神室—軍沢間のヤブをさけたことは、日数、水場の不安、又給水制限に自信が持てなかつた為である。鬼首からはほぼ予定通りであつた。次に隊としての反省は、今考えてみると皆良くやつていたという気がする。山にいる間はいろいろ無理なことを言つたが我々がやれることの最高のことはその時ベストを尽くすことではないだろうか。

# 八幡平隊

7月16日～30日

計画から立案まで

我々は奥羽山脈の一部で秋田と岩手の県境を縫走することになった。我々はこの中の和賀岳から八幡平までとした。和賀岳から国見峠までは未開の山であるが国見峠から八幡平までは開発途上の山であるとくに八幡平の周辺は急進である。和賀岳からモッコ岳までは資料は手に入ったがモッコ岳から国見峠まではどこに向ひ合せてもわからなかつた。道もほとんどないらしいでも我々は完全なる装備をして、ここをやることになった。標高1000m位なので相当なヤスらしい。国見峠、駒ヶ岳、から八幡平までは秋田固体の山岳コースなので道は整備されている。駒ヶ岳、岩手山を中心とした登山コースとして最近はかなりの入山者があるらしいしかし乳頭山から大深岳までは一般的のひとはあまり入っていないらしい。往生は8日間として前半に和賀岳から国見峠とし国見峠から乗石に貢出ししてここから八幡平までを後半とした。

7月16日 ◎

桐生 (20:25) — (21:37) 小山 (22:21) —

7月17日 ◎

— (2:16) 水上 (2:33) — (10:42) 陸上川尻 (12:40) — (13:35) 川舟 (13:55) — (14:15) 高下 (14:25) — (14:33) ♪

川舟でバスを降りるいよいよ東北の地を歩くのであるがあまり実感がない。盛岡への県道を進む水田では農家の人が農作業を止めてふりかかる。高下より和賀岳登山道に入る前方に和賀岳の中腹より下の部分が見えるかぶり大きが山のようである草地をT字にする。天気のほうが気にかかる梅雨前線をおいかけてきたようだ。

7月18日 ◎→❶

❶ (7:39) — (7:10) 林道終点 (7:10) — (8:04) 偵察 (8:15) — (8:20) 登高下和賀分岐 — (13:05) 和賀川 ♪

KET30を沿って林道を進む為のため沢を渡るために苦労した。水上沢の左岸の渡った所から道は沢の上り林道の直さの道を行くのでとても歩き辛いしかし沢に沿う林道も下の方に見えたが増水のためとある看板で止めていた地図では水上沢を迂回渡っているがこの山道を左岸に沿ってと、よく読めば、水上沢分岐に出られる。林道では地図通り行ったので時間を費した。水上沢分岐の尾根取付点は沢の右岸に大木がありその木を通って尾根につづく細い道がある。最初はかなり急な登りであるがすぐ高下尾根に出ることができる。この道は地図と違う。高下尾根は展望が悪い広葉樹の中を進むついに雨が降りはじめる時々よく降る。ようやく高下和賀分岐に出た。ここから急な下りですこし行くと和賀

川の水音が聞こえる。TSにはすでに2パーティがいたこのTSはあまりよくない雨は引続き強く降るとても不安だ。テントも良く張り溝も掘つたが夜半の雨はあまりに強くとうとう侵水全員ひしょりになる。

7月19日

△(7:07) — (7:50) 穂綿 (10:00) — (10:30) 和賀岳 — (11:00) TS — (11:20)  
大きな池塘 — (13:50) 高下分岐 — (14:00) △

小雨の中を出発した最初から予想通りの急である雨はときおりはげしく降る広葉樹の中をただ進む100m位の所で石側の沢に大きな雪渓が見えたかなり登ってきたことを実感した。それからすぐに稜線に出る晴れていればすばらしいだらうハイマツとシマクナゲであるシャクナゲのピンクの花が疲れをいやしてくれる。稜線に出ると雨だけでなく風が強い視界は10m位である間にあたる雨がいたい。頂上付近ではニッコウキスゲが咲き乱れている我々が歩くのを妨げるよう道をおおっているますます天気がうらめしい。頂上には寒くていられずすぐ下る。少し行くと大きな雪渓に出るこの辺は道をまちがうらしい秋田県側に大きな尾根が張出しているためこの尾根を行くとまず、雪渓を渡り北東の方向へ進みデングルマのお花畠を通り小さな沢を渡って尾根に取付けは道が続いている。また和賀岳のすぐ下にTSと水場がある。これからハイマツとニッコウキスゲの尾根を進む。高下岳分岐に出ると今日のTSまで10分位である。TSは道の右側に水場への道標がある所でまわりは岩とかん木である水場まで50m位で小さな沢がある。風雨共に止まずとくに風が強いポールの安否をきづかう。ラジウスの火でシェラフを乾燥させるでもとこもつめたい。夜半ポールがおれる。

7月20日

沈殿と決定。今日は行動を止めた。まずポールを修理しラジウスも修理し全員昼寝して疲れをいやした。1日中風が強く雨もときおりはげしくテントをたたいた。

7月21日

④ → ○ → ②

△(6:35) — (7:35) 大荒沢岳 (7:45) — (8:20) 県界分岐 (8:30) — (8:50)  
昼食 (9:25) — (9:40) 前山分岐 — (10:30) 郡界分岐 — (11:00) 牧場 — (12:10)  
大木原 (12:40) — (12:57) 見沢 (13:10) = (13:45) 篠宿入口 (14:53) = (15:55)  
栗石 — 寺谷

天気は昨日よりややよいでも小雨と風である視界もほとんどないハイマツ帯の中を進むがときおりかん木の中に入ったりする。道床にも出るそこはどこでもニッコウキスゲ、デングルマ等といっぱいである。大荒沢岳の手前の左側の下の方に大小多数の山腹がありすばらしい。この辺は比較的ヤセ尾根である。大荒沢岳の分岐もとっても美しい湿原である頂上までさくであるこの分岐から朝日岳への込み跡がある。東に張り出した尾根を下りすごし上ると県界分岐点であるモッコ岳への県界尾根などほとんどガスを見えない。ここより国見峠までの縦走コースは悪条件が重なったため断念し見沢に下ることにする。南東に張り出した郡界尾根を下る道も比較的良好なりやっとガス切れる山に入ってからはじめて他の山を見ることができるみんなやうと頑がほころんだ。かん木の中をどんどん下る前山分

岐に出る大志田との分岐をすぎ高度を下げるに従ってむし易くなる。右手に牧場が見えた郡界尾根と別れて貝沢に向う。林用軌道の跡を進むやっと大木原部落につく水田があり家がみえた東北的な散村なので東北にいる気分がわいてくる。貝沢のバス停よりトラックに便乗し鶯宿入口までその後バスで季石に着く町役場の裏の癌済寺に泊めてもらう。季石ではTSはないとのこと。寺では本堂に寝ることになった。夜半また雨が降り出す。

7月22日 ●→○→●

断続的に雨の降る中を貰出した。町はあまり大きくなかった。親切で素朴な人が多い気分を良くする。午後になっても雨は止まない。今日は国見温泉まで行くわけだが、あまり雨がひどいので半日沈没することにする。部員の装備もほとんど充ていたようだ。明日出発せねばならない天気も良くなるわけだ。

7月23日 ●→○

寺谷(6:50) — (7:20) バス停(8:10) = (8:45) 国見温泉口(8:55) — (9:15)  
国見温泉(10:25) — (11:10) 穂積(11:20) — (11:45) 勇岳分岐 — (11:55) 荷上げ地  
点(12:45) — (13:45) 国見温泉合

国見温泉に着いたが小雨である。明日からの健走を頑張るため荷上げをすることにした。ここからは道巾も広く整備されているが雨がつづいているので道はぬかるみてひどい。移動に出ると風がつよく吹かれていた。道は熔岩地である。我々は1583m高地の方に進んで1500m地点に荷を上げた。荷をおろした軽い身体は風でとほとほする。温泉につかり明日から頑張ることを決意した。

7月24日 ●→○

国見温泉合(5:10) — (6:25) 荷上げ地点(6:55) — (7:05) 穂岳三角点 — (7:50)  
湯の森山 — (9:15) 飯森山(9:25) — (10:05) 乳頭山(10:25) — (11:45) 田代小屋  
合(12:15) — (13:50) 力ニ場分岐

国見温泉から荷上げ地点まで荷が軽いので調子よいしかし天気は昨日と同様ガスと強風である。穂岳三角点を越えると道は北東の方向となり風も強くなった。尾根は広くて平らである晴れたらすばらしきだろう。湯の森山まではゆるやかな登りである。湯の森山の北東斜面に雪渓がある。この辺よりもころどころ湿原がありニッコウキスゲが咲いている途中も広く歩きよい。飯森山の手前には池塘がある。乳頭山の手前に湯の上温泉に行く分岐がある。またこの辺には大小多数の池塘がある。乳頭山の頂上から晴れていれば健走コースが全望できるはずであるまったく残念である。乳頭山より10分のところの分岐で道をまちがえて黒湯の方向に行ってしまった。このまちがいは我々をかなり疲れさせた。田代山荘は使用可能である小屋の前に大きな池塘がある。山荘からは湿原を行く。湿原と別れるところで道標がある。一方は力ニ場で一方は八幡平である我々は八幡平の方に進んだが道はすごく悪く少しうねがやっとある看板だが少し行くと広い道に出る。結局力ニ場への道は八幡平への道なのである。この広い道をどんどん下ると力ニ場分岐点に出る。ここはたいへん広くTSになる。道標もはっきり

とっている。水場は道をもどって20分位である。今日はかなり距離をかせいた。

### 7月25日 ①

△(5:45) — (6:50) 小白森 — (7:30) 大白森 (7:45) — (8:10) 大白森山荘 (8:15) — (9:45) 大沢森 — (10:20) 岩谷山荘合 — (10:45) 曲崎山 (11:00) — (12:05) 小瀬森 — (12:15) 谷地小屋合 (12:40) — (13:05) 関東森 — (14:30) △

合宿に入ってからはじめて太陽を見る。太陽がとてもまぶしい。TSより小さなピークを5つばかり越すと小白森である頂上ははっきりしない草地でTSとなる。営林署の人が県境測量をやっていた。大白森の頂上は平らかで東西150m南北300m位でニッコウキスゲ、ワタスゲ、ショウジョウバカマ、チングルマ、モウセンゴケ等の高山植物がありすばらしく遠く岩手山、八幡平も見ることができる。大白森山荘はしっかりとしていて水も豊富である。大沢森までは広葉樹の中をダラダラ上って行く。曲崎山のすぐ下に岩谷山荘があるがあまり良くない水はある。山の規模が小さいのですぐ頂上となりすぐに下る。このくりかえしなので、かなり疲れる。暑さもかなりきびしい。八瀬森を下るとわりと大きな谷地の小屋に出る小屋はしっかりとしててすぐ近くに水場もある。湿原を進むとすぐに関東森につく展望はほとんどない。1300m付近の大きな湿原に出たここのはずれを今日のTSとする。今日のコースの中には湿原がたくさんあったがこの美しさはいつまでも保存したい。

### 7月26日 ①→○

△(5:00) — (5:20) 1354m 湿原 (5:45) — (6:25) 三つ石分岐 — (6:40) 大深谷 — (6:55) 松川温泉分岐 (7:20) — (7:53) 岐阜森 — (9:32) 諸桧岳 (9:45) — (10:15) モッコ岳 (11:50) — (12:50) ガマ沼 — (13:00) 稜雲荘合

今日は縦走最終日である。TSを出てゆるやかに上り大きな湿原に出る朝もやの中なのでとくにすばらしい。大深谷までは刈りはらったクマザサの上を歩くのでとても歩きにくい。大深谷では昨日の縦走路と今日の縦走路がかすんで見えるまたここからは道巾も3m位あり尾根上は平らで広い。モッコ岳は独特なとがつた型をしておりここから八幡平が一望できる。我々はここでのんびりする。八幡平に近づくに従って軽装の登山者にすれちがう。ガマ沼畔をTSにしようとしたが国立公園なのでTSがないため八幡沼畔の稜雲荘に泊まる。八幡平の頂上は文字通り平らであるが3m位高くした人工の展望台がある。二こからの展望はすばらしい。岩手山、早ち峰山、鳥海、遠くは八甲田のほうまで見えるまた展望台のまわりはアオモリトドマツが繁っている。寝る前に頂上に行つた時は岩手山のほうに雲海が広がり鳥海のほうに夕日が沈んでいった。八幡平の開発は最近急速であるがこの自然はいつまでも保護したいものである。

### 7月27日 ○

合(8:10) — (9:20) 茶臼岳 (9:50) — (10:40) モミ山山荘 (11:20) — (11:35) 観光ホテルバス停 — (14:30) 松川温泉キャンプ場△

朝早く再び頂上で行ってくる昨日よりもすばらしい展望である。稜雲荘より八幡沼に沿って木道を

進む。谷地をすけて茶臼岳につく。ここから昨日の絶走路が眼の前である。また反対側の眼下には松尾鉱山が見える。バス道路を見下しながら松尾にもかって進む。岩手山がとても大きくなつた。バス道路に出る手前にモミジ山荘がある。ここからバス停まですぐである。予備日があつたので予定通り岩手山に行くことにする。東八幡平でバスに乗りかえ松川温泉に向う。松尾鉱山は日本一の硫化鉱の産地であるが最近石油化学からとれる硫黄におされているとのこと。松川温泉には日本で最初の地熱発電所がある。ここには町営のキャンプ場が岩手山登山口にある。

7月28日 ●→①

東八幡平 ← (5:05) — (6:20) 姥倉山 — (6:25) 犬倉分岐 (6:40) — (8:00) キャンプ場 —  
台風の影響で天気は悪いが岩手山に向けて出発する。道はよく整備されている。稲線に出ると雨混じりのすごい風である。犬倉分岐であまり風がつよいので岩かけで探すを見ることにする。結局岩手山はあきらめて下山した。下から岩手山を見るも笠雲がかかっていた。地熱発電所を見学し、東八幡平行のバスに乗る。今日のTSは東八幡平駅前の消防所の広場である。近くの鉱山の煙でのどがいたいよいよ明日は東北地方である他のパーティの事を考えながら寝る。

7月29日 ①→②→●

東八幡平 ← (5:44) → (6:05) 大更 (6:48) → (13:00) 仙台 (14:00) — (15:20)  
泉ヶ丘ヒュッテ ←

仙台に向うやつぱり下界は暑い。やになる。また山に入りたい。仙台で海岸線のパーティと北上のパーティに会う。みんな真黒に日焼けしている。ぶっかしさが胸にこみあげるとこもうれしい。集中地で全員そろうみんな元気でなりよりよかったです。夜キャンプファイヤーを行なう各パーティの報告をうける。

### (反省)

行動の反省として途中一部カットしたが悪条件が重なつたので妥当であつたと思う。後半は計画通りうまくいった。食料も計画通りでよかつた。一番反省すべき事は天気のことである。東北では梅雨が残るとわかつていながら十分検討しなかったことである。

# 飯 豊 ・ 朝 日 隊

7月16日～7月30日 育藤、須藤、根本、境野、北詰、大沼、蘿野、喜村、若林

7月16日

桐生(21:52)---(23:22)小山(23:33)---

7月17日 ○

---(3:59)米沢(5:15)---(5:45)羽前麻松(6:50)---(8:10)須郷(8:15)=

= (9:40)大日杉小屋(10:00) — 山長清水(11:05) — (11:35)滝切合御田

トラックに乗車して途中、竹村氏宅に寄り、飯豊の兔象、水場、大熊小屋手前の道が通行不可能などを伺う。大日杉小屋を出るとすぐに急傾斜のザンゲ坂を、ヒーコラ、ヒーコラ言つて10:40頃にそれを登り切る。全くもうザンゲをさせられた。山長清水はつい最近見つけられた所であり、道より左側にある。道をそのまま進むと山長清水につく。何事もなく滝切合御田に着く。天候が悪くなつたので、ここにテントを張る事にした。

7月18日 ●

あ(5:30) — (7:10)地蔵岳 — (10:55)切合小屋(11:20) — (12:55)北峰 — (14:00)飯豊神社あ

起床3:15、雨が朝よりしとしと降る。出発をあやぶんだが、予備日が少ないので結局出発と決定した。雨のため道がすべてあがない。地蔵岳通過後、初の雪渓が我々の面前に出現した。種蒔山を巻くのにトラバースせねばならない。天候悪化、雨、ガス、風の為に視界が悪く、かなりの時間を食う。

晴れいたら何でもなかつたのだが、万一滑つたら、3次元空間に存在していないだろう。しかし滑らずに渡つた。切合小屋で昼食をし、すぐに大曾渓にぶつかり、これを巻くために、恐らく旧道らしき道、道なき道を歩む。それを何とかして抜け出ると、目の前は広々とした広場になる。それを過ぎると、途中飯豊神社なるものがある。水場である。もし晴れいたら、目の前に本山のその雄大な姿を見ることが出来るだろう。しかし、それはかなわなかつた。飯豊神社には小屋が2つあり、神社の内部も泊まれる。有料かどうか知らないが、小屋の1つにもぐる。結局雪渓は4ヶ所あり、そのうち3ヶ所を渡る。

7月19日 ●→○

3:40に起床、強風と雨のために、沈黙を決定した。昨日の疲れのためか、全員良く寝た。寝あきると食つて又寝た。昼過ぎより、天気回復し始め、前線通過との争を聞いた。2時ごろより晴間が見え始める。霧が切れて飛んで行く。昨日で濡れたものを全部干す。晴間より、本山と大日岳をかい甸見る。と同時に、広大な、しかも青黒い山肌に頂付近より下の沢までべり落ちている、白い大雪渓

を眺める。もし朝より晴れていれば、素晴らしい景色だろう。昨日通った所が霧間に見える。遭難者の墓が風に吹かれている。

7月20日 ○

ふ(4:20) — (4:25) 本山 — 御西小屋(5:20) — 御手洗の池(6:45) — 亮平の池(7:05) — 鳥帽子岳(7:45) — 梅花皮岳(8:00) — (8:15) 梅花皮小屋(8:45) — (9:38) 化服岳(9:45) — (10:15) ギルダ原(10:45) — (11:20) 内内小屋(11:20) — (11:40) 扇の地紙(神) — (15:00) 飯豊温泉ふ

ガス巻く中を歩くうちに本山へ着く。山頂は何の事ではなく、何の感慨もない。山頂より御西小屋までゆるやかな立い尾根を歩く。道がわからないので、ケルンを頼りに歩いたら御西岳を巻いてしまった。

足許まで雪が白い古を伸びしているので奇妙な感じがする。御西小屋より、御西小屋はコンクリート製である。実は大日岳へピストンをする予定であったが、昨日の沈殿のためにこれを取り止めた。御西小屋を出るとすぐに雪渓が待ちかまえていた。先が何も見えない。以後昼過ぎまで雪の上を歩く事となつた。視界が悪く、雪の他に何も見えない。足許すら良く見えない。3次元より別れると思うとぞつとする。アイゼンとピッケルが欲しい所だ。雪は凍つてあり、すべりやすい。しかし、道は雪の上に茶色く着いているので、どつちへ行つたら良いかは大体わかる。何も見ずに、見えずに何とかして、池を2つ通つたが、何の事はない。ただの水たまりである。汚い。雪渓よりはずれると道は非常に悪い。梅花皮小屋より北峰への登りに着くが、道標を信じた為に道を迷つてしまい、約30分損をした。北峰へは小屋より直ぐに登れば良い。水場は小屋より、約7分位下つた所にある。風強く時々瞬時に見える。ギルダ原で昼食にする。内内小屋に着く、石造りの小屋である。内内小屋より樅川尾根を下る。というのは、昨日の沈殿のため予備日がなくなつてしまい又、大熊小屋の手前が通行不可能であるため。下る事約100mを全く、全然登る事なしに3時間で下りた。ここを登つたら一日はかかるだろう。歩いたのではなく、駆け下りたのである。全員バテる。足に豆が出来る。飯豊温泉は、今は全くの庵墟である。岩壁を流れる温泉、こわれた浴槽、これらが過ぎし日をしのばせる。とにかく今日はカレーだ。

7月21日 ①

ふ(6:08) — (6:30) 飯豊山荘 — (8:20) 長者原 — (8:50) 長者原バス停(11:00) — (12:10) 小国駅 — 蓄産センター(13:00) — 町岩公民館(15:00) ふ

温泉より山荘へと、アロアロの、川の側の道を下る。山荘を過ぎて5分位で雪渓のため道がこわれていて、引き返しつり橋を渡る。制限重量を無視して、ひやひやしながら渡る。タラタラの道を停留所まで歩く。着いたのが8:50で出発時刻が11:00なので急ぐ事はなかつたと残念がつた。停留所の前のアイスクリームが目につく。アイスだよ。雪渓の上の気持とは全然別だ。小国へ来たのは良いが全くテントを張る場所がなく困り市役所と交渉をして、蓄産センターを使わしてもらう事となつたが、生憎の日曜日なので管理人が居ないので大変に困つたが、公民館を使う事が出来るというので決めた

しかしこれは窮屈つていた。蚊が飛びかい、牛の声が大きくて夜もろくに寝れなかつた。しかも出発間際に、宿泊料を取られてしまつた。我々はここで教訓を得た。物事を良くはつきりと確かめるという事を。

7月22日 ◎

も(7:00) — (7:10) 小国駅(8:00) — (9:10) 五味沢(9:25) — 荒川砂防ダム  
(11:00) — (11:30) 鈴生平(12:00) — スズイデ沢(12:30) — 角樋小屋裏下(14:00)  
— (14:20) 角樋小屋

国鉄バスで荷物代として1人20円取られ、赤字の上の赤字で面白くないし、又墨りなのでなおさらである。五味沢でバスを降り、車道を3時間も歩くと、大変嫌になる。足の豆が痛む。鈴生平で昼食を取り、牧場を横切り、いよいよ山?には入る。道はまだ広い。スズイデ沢にはつり橋があり、これはガイドブックに出ている。これを渡るのであるが、これは非常に危険である。丸太1本の上にワイヤーロープが張ってあり、これを渡るのである。40㌢もある橋を途中まで行くと木が倒れており、駄目なので、全員川を渡る。非常に冷たい川を膝まで水につかる。その様にして川を渡り、しばらくすると、道が二叉に別れている。本当は右に行くのだが、左を入ると、ダムがある。青々とした、静かな水面は我々を引込みそうで神秘的である。右の道を行き、角樋小屋の手前も一本橋である。これも渡れないで、川を渡る。小屋は2棟あり、手鋸で作っており、屋根はトタンぶき、一見バンガロー風である。内部はエキゾチックである。でも南京虫がないかなと心配した。

7月23日 ●

も(5:40) — (7:55) 蛇引の清水(8:10) — 大玉山との分岐点(9:15) — 北大玉山  
(9:25) — 平岩山との分岐点(10:30) — (11:55) 大朝日岳 — (12:30) 大朝日神社  
3:20起床、小屋の日記に書いて出発、いよいよ山だ。朝方より雨がぱらつく。道は湿つておらず、倒木が多い。蛇引の清水は道より下の方へア分岐した所である。その水は冷たく非常に美味である。北大玉を通過ごろより風が強くなり始め、ガスが出来れる。平岩山を巻いて通過し、いよいよ大朝日の登りにつく。ガスの為何も見えず、寒い。雨漏と風が頻をなぐる。風は下より吹き上げ、ポンキョは何の役にも立たない。休む場所がない。朝日は砂粒で出来ている白い塗分けた砂だ。その所々に岩が飛び出している。木は全く生えていない。途中神戸大のパーティと行き違う。上が見えないのでどれ位登つたら良いのかわからない。傾きは全く同じである。約1名が遅れ気味、最悪の状態である。とにかく上の着いた。何も見えない、見えるのは疲れた部員だけ。飯塙からは朝日連峰が見えたのに。ここで記念写真を撮り、朝日岳を下る。朝日小屋は有材なのでそのすぐ下の神社にもぐる。コンクリート製の神社だ。吹き抜けの窓を石でふさぎ、中で燃えない、ぬれたはい松の枝を無理して燃す。これは大変煙が出る。全員外へ飛び出す。夕方の朝日は我々の煙で充満した。北大のパーティが我々の前にテントを張り、女の子の声がするので全員心配する。水場は金玉水(こんぎよくすい)である。

7月24日 ○ D

あ(6:00) — 金玉水(6:15) — 竜門山(7:50) — 南雲江山(9:05) — 北雲江山  
(9:55) — 三方境(10:00) — (10:15) 孤穴小屋

3時30分に起床し、例の如く飯、パッキングをして、例の如くキジを打ちに行く。朝日岳は人が多いのでキジはそんなに居ない。すぐに飛び立たないと危険だから。金玉水を通る。ここは雪渓の汚ない水である。ガスで何も見えずに進む。晴間はつい最近見た事がない。そんなわけである。孤穴まで進み、丁度ここで太陽がその姿を現わした。孤穴はテントを数多く張れる。しかも水はテントの側を流れしており、天気が良ければ以東岳はその全身を日の前にさらす。花畠は三方境より下る斜面にあり、三方境の方を振り返つてみれば、三方の池より流れる滝が見える。夕方になると、風はおさまり、以東岳がその姿を我々の目の前に現わした。素晴らしい。その一言である。全員テントより抜け出て、以東岳を拝む。紫色に染まつた。あの姿は忘れられないだろう。

7月25日 ①

あ(6:30) — 中先峰 — 金堀 — (8:00) 以東岳(9:00) — ウツボ山(10:20) — (12:10) 大鳥池

まるでガイドブックを地で行った。朝日は1日だと豪語しながら行く。ガスが卷いているので何も見えない。中先峰、金堀は何時通過したかわからない。5分休んだ、そして3分登つた。そしたらそこが以東岳であった。突然の以東岳は信じられなかつた。しかし霧は相変らず晴れない。時間は余る程あるので、ゆっくりと下山である。ウツボ山を過ぎてすぐに花畠がある。ウツボより下ると前方に大鳥池がその姿を黒々と前方に見せる。霧間に以東岳が見えた。下りはあの鳴川尾根を思わせる程に急である。足が笑いそうである。暑い、晴れて来たのである。池に着いた、我々は池の上の風通しの良い、小高い所に陣取つた。とにかく暑い。

7月26日 ○

快晴である。しかし以東岳は雲がかぶつている。今日は予備日が余つたので沈没を決める。素敵な休息日である。湖面まで雪渓が落ちている。泳ぐ、魚を釣る。皆は良く食つた。

7月27日 ① → ② → ●

本(5:15) — 教育ワンゲルと行き違う、(6:10) — (7:45) 道路に出る = (8:20) 大鳥高岡(9:35) = (11:30) 鶴岡駅(12:28) = (12:49) 余目(13:08) = (14:10) 新庄(14:15) = (15:28) 中山平

今までの疲れは抜けてしまつた。遡を出発してすぐに教育のVVと行き逢つた。行き違う事は承知していたが、それはうれしかつた。彼らと30分程話をして、無事を祈り別れた。道へ出るのに三二から、卅ぞいを約300m程登る。道に出ると丁度土建会社のトラックが大鳥まで行くというので、乗せてもらつた。大鳥よりバスに乗り、鶴岡へ出る。そこより仙台へ出発の予定だが、1日で仙台へ着かないで中山平へ泊する。夕方になつてより雨は降る。嫌な中山平である。

7月28日 ● → ○

8(8:00) — 中山平駅(8:30) — (10:24) 仙台(12:15) — 泉キャンプ場(14:00) 朝方になり雨は止み、部員は不平をもらしながら仙台へと向う。まる一日つぶして仙台へ行くのである。仙台駅を降りて、市内へ出、本日、明日の食料を貰出しする。全員良く食つたために食糧計画が干涸てしまつたためである。今日、明日はラーメンだけである。泊地は泉キャンプ場、我々が行った時には、他のパーティは来ておらず、残念だつたが、すぐ後に上山のパーティが到着した。

7月29日 ◎→●

朝食はラーメン、昼飯もラーメン。定着して他のパーティを待つ。昼ごろより、ぞくぞく山男が集まる。どこの班も台風4号で大変な目にあつたらしい、とにかく、誰も負傷しなかつたのは幸である。夕方は、ささやかなコンパである。キャンプファイヤーを囲み、少ししかない日本酒を飲む。

7月30日 ◎

8 — 仙台(12:21) — (20:58) 小山

ぬかるみのキャンプ場を出発し、バスに乗り、仙台へ出る。バスの発時刻は記録しなかつた。バスより降りて、駅まで急ぎ足である。約10分程かかった。市内を異様な集団が急ぐと思った事だろう。とにかく汽車には乗れた。汽車の内へは入つてしまえば例の如く、俺達のもの?だ。おおなつかしの桐生の町よ。その灯が恋しい。なお本誌の誌面を借りて、飯豊観光協会会長竹村氏及び大鳥高岡の伊藤氏に色々と御指導賜つた事を感謝致します。

### (反省)

我々の隊としては、次の如きものを、以後の山行の為に書く。1、出発前に全員集合出来なかつた。二の事は部員が、合宿というものを如何に考えているかという事である。合宿というものは、計画を立てた時より始まつていると考えて良いのではなかろうか。であるとすれば、その成行きに対して常に注意を向けておく必要がある。そうすれば集合という事になればすぐ出来るであろう。2、定着という事に対して、我々は2日を費す必要があつたのだろうか。しかも多くの資金を必要とする。その事が全員集合するというだけの価値と必敵するのだろうか。この事は以後の合宿において考える必要があるだろう。3、飯豊山系には雪渓が多量に残つており、リーダーの調査不足であつた。アイゼンが決しかつたのは確かである。4、林道方面は行けなかつたがこれは大熊小屋手前が昨年の台風のために通行不可能であるため。又それは予備日が集合のために食われてしまつた事にもよる。

## 北上隊

7月18日～7月30日

7月18～19日 ●

桐生(20:14) — (21:30) — (21:54) 石鳥谷(10:05) — (10:40) 大迫(12:20) —

(13:20) 岳歩

海岸線のパーティーと並ならずも出発日時が同じだったのでいつしよに桐生を出発。小山からは数少ない上野発青森行鉄道に乗車した。思っていたとうり列車はガラガラで各自1つづつボックスを占領して寝た。うとうとしていると明るくなつてきて列車は一の岡あたりを走っていたがこの頃から通勤通学客で混んだ。桐生を出て以来13時間もの汽車旅で気も狂わんばかりになつた時やつと花巻に着いた。ここで海岸線の人と涙ながらにわかれで我々は先へ行き石鳥谷からバスで大迫へ行った。明け方から雨が降りはじめ大迫あたりでは本降りとなつた。大迫でバスを乗り換えて曲り屋、タバコ畠等を見ながらやつと岳部落に着いた。適当な幕営地がないので近くの早池峰神社の、錢箱の横にテントをはつたが参拝の人がうるさかつた。雨はあいかわらず降り続き早くも浸水。これはビニールシートをわされた為。天気図を見たら梅雨前線は丁度我々の上にあつた。

7月20日 ●→●

木(5:45) — (10:05) 鶴頭山(10:15) — (13:30) 中岳 (13:40) — (15:30) 早池峰山(15:45) — (17:30) 小田越小屋歩

いまにも降り始めそうな空模様が出発。鶴頭山迄はかなりの急登で予想以上に時間がかかりしかも途中から雨が降り始わた。鶴頭山から中岳、早池峰迄は比較的なだらかであるが幾度か岩の割目を通るのでその度にキスリンクを背負つた我々は苦労した。雨は本降りとなり全員ビショぬれとなつた。途中どこかのパーティーが狭い道の真中にテントを張つていた。どうやら沈没している様子。濃いガスで視界は全くきかず予定の時間をすぎても早池峰に着かず少しあせる。やつとのことで山頂の小屋に着いた時は少しバテ気味であったが、小屋の人によく下の小屋の方が火があるからといわれ、少し休んで出発。山頂から小田越迄はガラ場で急降下、しかも強風と横なぐりの雨でかなり苦戦したがなんとかたどり着けた。小屋はかなり立派で雨のせいかかなり沢山の人が居た為我々の入り込む余地はなくやむなく小屋の横にテントを張つた。その時小屋の中から変な声がしたのでぞいてみたら隣の方にきたならしい三人連れが居たので良く見たら、昨日別れた海岸線の三人であつた。疲労しきつっていたので三人に夕食を作つてもらつた。おかげで助かつた。

7月21日 ○→●

木(6:35) — (8:30) 薬師岳(8:50) — (11:30) 峰歩

海岸線のパーティーはかなり早く出発した。曇つていたが降つてはいない。しかし薬師岳は完全にガスの中だった。小田越より薬師岳への道は作られたばかりではつきりしていない。途中シャフナゲがきれいだつた。かなりの急登でやつと山頂に着いたが横なぐりの雨でとても寒く早々に出発することにした。山頂から遠野口～小田越の登山道と山頂～天野山への陵線とが交わる峰へ行く道がいくら探してもみつからずやむなく東の道を引き返すこととした。雨が降り続くため小田越より遠野口への道を行き峰で今日の行動を中止してテントを張つた。

7月22日 ●

水の流れる音で目がさめた。外を見るとテントの両側が川となり激流が渦巻いていた。小高い所にテントを張って良かった。雨が降り続く為今日は沈没に決めた。文部省橋流しつくし学術的討論をして早々に寝たが昨夜よりテントが漏り始め上下から水攻めに会い大歎な一日であった。

### 7月23日 ①

ふ(6:45) — (7:30) 三角点(7:35) — (7:45) 天野山(7:46) — (10:20) 三角点(10:30) — (13:40) 三角点(14:00) — (14:40) ふ  
合宿が始まつてから初めて太陽が顔を出した。梅雨前線がやっと通過したからである。今日迄のコースは一応道がつけられ様子も十分わかつていただがこれからとのコースは全くと言って良い程不明でしかも地元から熊が出るなどとおどかされていた。一日半の休養で五人共元気に出発した。遠野～小田越を経て登山道からはずれて木に塗った赤いペンキをたよりに消えかかった道をたどると予想とは反対に草原に白樺の高原状の牧場についた。ここからチラリと薬師、早池峰が見えた。少し行くと地アケのヤフが初まつた。少し苦戦しながらも一時間半位で天野山頂に着いた。山頂といつても全くのヤフで三角点もない。ここでオ一回の昼ごしたが食べていると足から小指の爪程の虫がはい上つて来た。タニである。全員ビックリしてすぐに出発することにした。気をつけて体をしゃべるとあちらこちらにたかっているではないか。ゾーとしてはらいのけて再びヤフをこぎはじめた。天野山を下つて鞍部のちよつとした草地に飛び出すと目の前に二頭の牛がじつとこちらをにらんでいるではないか。どちらも驚いたろうがこちらもびっくりした。恐る恐るその横を通りて又少しヤフをこぐと、目標の三角点に着いた。途中で大きな猿を見たがある部隊を思い出出してなつかしかつた。ここからはるか前方に広々とした牧場が広がりのんびりと牛がたわむれていたのが見えた。そこを目指して再びヤフの中を行くと突然牧場見回りのおじさんに会つ。しばらく談笑の傍近くに生えていたキノコを今夜の夕食にと多量に取つて出発。突然視界が開け行、手は全くの草原となりあちこちで牛がたわむれていた。牧場の隅にテントを張ることにし近くの川で汗を流して先程のキノコをおかず夕食を食つて寝た。

### 7月24日 ②→○

ふ(6:15) — (7:45) 大黒森(8:15) — (9:05) ツ石山陵線(9:45) — (10:30) 927m 三角点(10:40) — (11:10) 541m ヒーク(11:20) — (11:50) ヤフ入口(12:05) — (14:00) 下りた点(14:15) — (15:15) 沢(15:25) — (16:55) ふ

昨日牧場へ出た時尾根を間違えた事に気がかず(その位ながらかな一面の草原)元気に出発。一時間半程行くと尾根がなくなつてしまい初めて気が付いた。正しい尾根は谷一つ隔ててながらに続いている。そこでそのまま谷へ下りまつすぐ隣りの尾根へ登つた。(その位ながらかなのである)。ツ石山に着いてホッとした広々とした草原を鼻歌まじりにトントボ行くと遠くで遊んでいた牛馬が我々を目指して突進して来た。ビックリして近くのヤフへ一目で走り込んだ。遠回りをして少し行くと再び牛に追つかれおかけでK氏は青くなつて近くの穴へ逃げ込む強がつた。牧場も終つて遠くのオーヴ嶺を目指して再びヤフに入る。マスリンクを背負つてのヤフコギはなかなか思うように行かない。幾度も

に登つて方向を定めたがこうとう尾根を越えてしまつた。ヤフの中で昼にしていると突然すぐ近くをイノシシらしきものが走り去つた。さすがの我々も青くなつて持参の笛を吹きながら出発した。時間も遅くなつたためオーツ君はあきらめそのまゝ沢へ下ることにした。熊岳につかりながら沢まで下り後はオーツ君をジャアジャア沢ぞいに下り目的地の立丸峠より少し下のバス道路に出た。道の下にテントを張つてこの日は終つた。

### 7月25日 ○

ふ(7:00) — (7:30) 恩徳(7:35) — (8:25) 琴畠(8:30) — (9:00) 神社前(9:30) — (11:50) 棒坂峠(12:30) — (13:40) 窓貴峰(14:00) — (15:50) 沢木道終点(16:00) — (16:25) 上長井ふ

都合で立丸峠から白見山をあきらめロードで迂回して大槌へ行く事にきめて真夏の大陽がカンカン照りつけるバス道を恩徳まで行きここで尾根を越えて琴畠へ向つた。琴畠から棒坂峠までは地図上では山道であるが実際は車の通れる車道であつた。快調に歩を進めると一面草原の棒坂峠に着いた。北側にはうつそうとした白見山がそびえていた。ここから車道を上長井に行くのはつまらないので窓貴峰を経て行くことにして昼食にしたが、もはや乾パンにうんざりし余り食欲も進まなかつた。見わたす限り草原の牧場を中心も軽く歩いて行くと程なく窓貴峰に着いたがここであるはずの道がいくら探してもみつからずやむなく尾根ぞいに上長井に下ることにした。眼下に上長井の家が点々と見えるがどうとう尾根は行きずまりやむなく沢へ下つた。途中小さな港があつたり急斜面がトゲのある植物がつたりしてかなり苦勞して下の林道に着いた。上長井に着くと道ばたにテントを張つた。道路の曲り角だったので、車が通るたびに飛び込まれないかと心配しながら寝た。

### 7月26日 ○

ふ(6:20) — (8:25) — 瀬(9:00) — (10:45) 大槌入口(11:00) — (11:50) ふ  
今日も快晴で真夏の大陽がギラギラ照りつける中を元気に出発。歩くに従つてペースが上り人間ばかりをしたK.N.U.T君はとうとう走り出す始末であつた。途中トラックに乗せてくれるという人を元気良くていねいに断りあつといつ間に大槌に着いた。途中道路工事の人がどこから来たかと聞くから早池峠から来たと言つたらぶつたまげていた。大槌は小さな町だが久し振りに見た下界はとてもなつかしく思えた。海岸線にはチリ津波以後に作つた立派な防潮堤ができていた。海はきたなかつたが、近くの松林の中にテントを張つた。すると近所の子供が遊びに来て暗くなるまで相手をして遊んだ。これも大切な現住民との対話。

### 7月27日 ○

ふ(5:45) — (6:00) 大槌駅(6:06) — (7:33) 宮古(7:45) — (8:00) 浄土ヶ沢 — (8:05) キャンプ場ふ

草場さんが学校へ帰る為にここで別れる事になつた。我々4人は宮古へ草場さんは釜石へとそれぞれ反対方向の列車に乗つた。右手に三陸海岸の美しい海岸線を見ながら蒸気機関車に引かれていくと一

時半程で宮古に着いた。駅前より淨土ヶ浜行きのバスに乗り、宮古港の様を通りて約15分で着いた。キャンプ場はかなり整備されていて感じがよかつた。ただシーズン中でもあつてかなり混んでいたが適当に割込んでテントを張った。海は豪情らしくきれいであつた。しかし寒流のせいか水はものすごく冷たく汗をたらたら流していてもなかなか入る気にはなれない程だった。海で取った貝とウニがうまかった。

### 7月28日 ○

一日休養することにし宮古へ食料の買出しに行った。この日も真夏の太陽がジリジリ照りつけてとても暑い一日だった。

### 7月29日 ◎

△(7:30) — (7:20) 宮古駅(8:06) — (10:52) 富岡(11:05) — (13:42) 仙台  
( ) — ( ) 泉にニッテ△

台風が近づいて朝のうち小雨が降っていたが出かけた頃は止んだ。宮古から気動車は山あり、谷ありの所をゴトゴト走つて約三時間。そろそろあきて来る須崎に着いた。富岡からは急行で仙台に向つた。空模様は台風の接近でどんよりと曇り、晴り筋がバラついていた。仙台へ着いてかけ足でバス停へ行くとそこにはなつかしい赤いユニフォームの姿があつた。

#### (反省)

現地からの資料があまり役に立たず、計画変更を強いられる結果となつた。それでもかなり余裕をもつた計画があつたので曲がりなりにも計画を消化できた。このことは遠隔地へのワンデリンクにおいては、現地からの資料はあくまで参考程度とし、又計画にはかなりの余裕をもたせるべきことを示していると考えられる。今回携行したトランシーバーは使用せず、又かなりの重量があるので荷物の如く思われたが、万一のことを考えればやはり携行すべきものと考えられる。もう一つの教訓は低いながらかな山における難しさであろう。それは遙いためにかなり高い木があり見通しがきかないこと、ながらかために地図との対応をうまく読みとることが難しいことの二点である。

## 海岸線隊

7月18日～7月30日 中島恒弘、小林賢司、江黒茂

### 7月18日

桐生(20:14) — (21:30) 小山(22:21) — (9:38) 花巻(9:43) — 遠野(10:56)  
我れら3人無事桐生を出発せり。車内は先上隊と一緒にねどわりとすいていた。

### 7月19日

遠野(12:05) — (12:45) 桑原(13:00) — (14:45) 大出(15:00) — (15:45) 大野平谷

北上隊のスイカをいただき、互いの健闘を祈りつつ出発。遠野よりは大出行のバスがなく途中の桑原より10Kの道をハイペースで歩き続ける。皆なの頃がしたいに不服頃になり、雨もパラつく。1時間45分かけてやつと大出のバスの終点（大出神社）までたどりつく。学校帰りのがき達と話しながら、（変なかつこうした者がいるなと思われていたのだろうが）のどかな牧場を歩き続ける。途中長いカマを持った青年があきもせず一日中草刈りをしているのに出会つた。なんとのどかなことだろう。こういうのを見ると、毎日のコセコセした生活に対して淋しくなる。足も痛み出したので草原にテントをはる、早池峰の山はいまだ見えず。夕焼がきれいだつた。

7月20日 ◎

（5:30）—（5:55）馬留（6:00）—（7:45）薬師堂—（8:40）小田越小屋—（3:50）山荘（早池峰山2回アタック、根岸と会う）

3時起き 5:30出発、山を見たがドス黒い雲につつまれぜんぜん見えず、馬留へ着いたがあまりの早さに驚く。ここで案内板を見たのがそもそものまちがい。距りも時間もてんであつていい。方向だけはまあまあ。これが最後まで続く。また相互不信のはじまり。早池峰のかりを小屋のおじさんに聞いたがどうも信用できず、また体調も考えて二度途中まで行つたが勇気ある下山を決行。討論のすえ明日未明登頂をめざすことに決定、そのためゆつくり休養をとり、衣類を乾し明日にそなえる。3時頃になり、続々女子パーティー山小屋に到着。だれもいなかつた山小屋徐々に占領され、すみの方にかたまる。山にくるのは さんばかりだと討論する。そこえ腹をすかし、ズフ濡れの北上隊到着。マキを割つてストーブをたき暖をとる。山小屋がいろいろ状態で保存されているのはありがたい。すべてはじめはこういう土地の人の温かい心づかいで山小屋は築かれたのであろう。しかし人間が多く入り込み徐々に登山者の自然に対する甘さがみうけられより軽装、娯楽化がすすみ、まちがつた自己主義によってどんどん山小屋が破壊されていった。また少しぐらいはという安易な気持が登山者の増加に従い無視できなくなってきたのではなかろうか。

7月21日 ◎

小田越小屋（4:45）—（6:45）早池峰山頂（7:30）—（9:10）分枝—（12:00）平津戸（13:20）—（14:30）宮古—買出し—蛸の済（16:30）

早朝2時45分起き「早朝なら静かだろう」ということになりいち早く出発の用意をする。小雨の中を空を見ながら出発する。霧雨ぐらいで昨日とはずいぶんちがう。体調をととのえ、道を違えないよう一歩一歩上る。徐々に風が強くなるが雨はない。一面ハイマツが生れ、霧がまいていて一瞬パット用ける時があり、実に雄大なながめである。我々の行く手にはまだ冬をそなえたり、はじごをそなえつけた急所がよこたわっている。我々はそれに一歩一步近づきそれをのりこえねばならない。またその前に、この強風にたえ、身をさらさねばならない。我々の行くては長く、きびしい。そして、頂上についたところで、保障はされない。しかし我々は行かねばならない、そして途中、早池峰薄雪草、ハイマツ、その他、色々のきびしい自然にたえそれをはねのけてきたかれんな花が俺たちをはげま

し元気づけてくれる。強風にさからい一歩一歩頂上をめざし、ついに俺たちは頂上に立つことができた。我々は安全不動にお参りしミルクティーでカンパイした。山頂で登山者名簿を書き、記念のものとする。早々に平津戸駅へ向けて下山する。下へ行くにつれて天気がよくなり雄大なながめが開けた。しかし山頂はまだ雲の上に在り、我々は運動靴の為下りにかかると足がぐくぐくしてくる。また足の裏がいたむ。しかし下に降れば汽車がまつているだけで、力をふりしぶりピッチを上げる。いけどもいけども駆へ着かず、またもや導標にまどわされる。やつと平津戸にたどりつく。宮古へ向けて出発。宮古の町へ出てあまりに開けているのでびっくりする。かなりにぎやかな漁港である。ビール等のユウワクにもまげず町をつつき、蛸ノ浜へと向う。実にすばらしい浜だ。地名のとうり岩が削られ、穴があいている。土地の人より巫がニをもらう。心地よく眠りにつく。

7月22日　○

ふ(6:30)——淨土ヶ浜(12:00)——大沢(12:45)——(15:10)潮吹岩(15:35)——(16:30)中ノ浜  
昨日もらった巫がニを食う。實にうまかった。早朝の散歩道を淨土ヶ浜へ向かう。海へ出る。海岸歩道をフラフラ歩き、ついに淨土までやつてきた。たいしたものはない。岩だけづくりとられ、白い岩はだが真青な海面にうかんでいる。海水浴場なので泳ごうとしたが足をつけるだけでジーンとくる。記念だといって、俺と小林、はりきつて飛ぶ。しかし1秒10秒15秒もうだめである。体がジーンとしびれ痛いくらいである。やはり朝は冷い。もの好きな人もいふものだ続々と泳ぎにくるではないか。帰ろ、帰ろ、これじやあ体がもたん潮吹ヶ浜して出発したがいつこうにわからぬ。親切な子浜に案内してもらって野をこえ坂を上り下り、わやわやのりを通りぬけ、松林さぬけやつと海に出る。体たして岩があつた。しかし時間がおそかつた。穴から潮がサーツと吹きぬけ、海水がくるまでにはいかなかつた。泊地中ノ浜は矢にいい岩場でキャンプ設喰がととのってドリームン、天に雲山のよい所はらしい所である。少々水が冷たい。泳がず。

7月23日　○

ふ中ノ浜(6:30)——女鹿戸——(9:45)田老——(13:00)沼ノ浜ふ

国道をどんどん進み、もうつくづくいやになつた所で江黒氏平、草にうもれた道を見つけ出した。田老は港町、堤防に囲まれた狹い町である。町の人はいい人である。海岸散歩道であり、海にそつて真崎まで続いている。海はどこまでも青く、岩にくだける波はよくかがゆき、飛くをそり立つ岩はがんとして動かす我ら三人しばし見れり。実は三日間ここに滞在することになつたのである。テント地へテントを張る。東北学院、岩手大キャンプに来る。疲れをいやすため水泳。

7月24日

久しぶりによく寝た。江黒氏豆つぶれ徒步不能、2人で真崎まで散歩、燈台のなかもよすばらしい。いかにはるばる来たとか。「宮古をば朝日と共にたちしかどはるばる来ねる三コジキ」

7月25日

アクビ。震出し。トレーニング。うで立てふせ50回 サッカー。腹筋江黒氏の足ようやくよくなつて

くる。江黒氏水泳はじめる。

7月26日

本沼の浜(6:15) — 重津部 — (7:15) 岩待(9:30) — (11:20) 茂師 — 熊の鼻展望台 — (13:00) 小本(松原) 本

一番起きで朝もやけむる中を出発。今日も国道をどんどん進む。我々も足が徐々に痛くなる。茂師を過ぎ、熊ノ鼻展望台へと来る。今日の目的地小本はもうすぐそこだ。すばらしいながめだ。遠く女かぶら男かぶらの岩々が望める。松並木を通る風は冷たく隆起海岸の海の青さとマッチして実にすがすがしい。小本は近し。だが気をつけよ。仙台からのバイク旅行の者と出会う。皆んなまつ白になつて東北のこの悪路(一級国道)に向つて健闘する。ガンバレ。小本実にいい松林がある。津波よけと防風林でありテント地にはもつてこいである。

7月27日

本(6:00) — (8:30) 畏 — 岩泉 — (13:00) 竜泉洞

朝より岩泉めがけて20Kの旅に出発する。日焼の為足がひりひり、真赤になる。もう一日だというのに足がきかない。通りすぎたバスはビュンビュン砂ぼこりを上げて走り去る。それでも我々は歩かねばならない。自分自身のために。どんなに苦しくともつらくとも、重くとも、暑くとも、どんなに豆ができようとも、我々はもくもくと歩き自己の為、どんなにつらくとも、その苦しみをこえた所に喜びがある。満足がある。新しさ出発がある。そのために我々はもくもくと歩こう。バスのゆうわくに打勝って岩泉に到着。龍泉洞、乳洞水温9°C 透明度世界一。

7月28日

本(9:18) — 浅内(10:42) — 盛岡

盛岡城に登り、岩手山を望むが山頂みえず。

7月29日

盛岡 — 松島 — 仙台 — 荒着地

日本三景松島、あまりたいした所ではない。濃のせいか日光が強く松も白っぽくなつて殺風景な所である。ついに我々三人は無事荒着地に到着して、皆んなの黒々しい顔にお目にかけられる事ができたのである。

(反省)

予備知識の不足、道標の狂いなどに困られた。大半が平地歩きなので軽装備を心かけ、食料も現地御達した。それで平地ではうまくいつたが、早池峰では困難を感じた。また平地歩きが多いのに足をいためることが多く、それが日程に影響した。

# サイクリング隊

堀江、松田、加藤

7月16日 ○→○

足利(6:40) —— 栃木(8:15) —— 宇都宮(10:00) —— 黒磯(14:00) —— 白河(16:00) —— 北白河(5:00) ふ

足利国鉄駅に加藤は桐生から、松田は太田から、堀江は足利から集合する。合宿隊中最も早い出発組のために、部員、先輩等少数に見送られて出発する。黒雲が低く、朝のうちは霧雨も降る天気であつたが、自転車に乗っているには丁度良い感じである。なんなく今日の宿泊予定地についたが2時である。宇都宮から4号線に入ったがさすがに交通量が多くなつた。白河市内で天気図を書き、食料品を買う。テントサイトを見付けながら走り、北白河の道路わきにテントを張る。木は反対側のガソリンスタンドでもらうことにする。アヨがいて困つた。自転車の故障なし。今日は159Km走る。すべて舗装された道である。8時就眠。暁が見えるし明日も見えだし明日も天気はもちそうである。車の音がうるさい。

7月17日 ○→○

北白河ふ(6:45) —— 那須(8:30) —— 福島(10:30) —— 白石(15:20) —— 岩沼町(18:00)  
今日のコースは皆大きくうねっている感じの道の連続であった。山の中に入つていろいろなのである。弁当は朝飯をたきそのままコップペルの中に入れてゆくので割合に時間がかかつてしまうのである。それに今日は朝の内にとばしすぎたようである。午後がまったくいけなくなつた。岩沼町で竹駒神社に寄る。さすが立派な神社である。テント場は小学校に求めたが駄目との返事。公民館では心良く承認してくれた。実を言えば、相手が家の中にことあってくれただのんでいるのだと感ちがいしていたので少しだけつたのである。このとぞ7時10分前であり、すぐに食事のしたくにかかつたが、公民館で飯と汁があまつているので是非食べろと言うので奮闘走になる。ワンゲルの食料のことで議論白熱、9時終る。走行距離124Km、すべて舗装道路であった。

7月18日 ○→●

岩沼町公民館ふ(7:15) —— 堀益(9:20) —— 松島(9:55) —— 石巻バイパス(12:50) —— 柳津(15:15) —— 志津川(17:30) ふ

夜中から朝の舟瀬まで雨がときどき強く降る。又夜は強い雨と風が烈々出る。矢本町で矢本町大曲川堤防協同組合長木村成田氏宅で晝食を奮闘走になる。近くでそれアサヒを出してくれたが、これが笑につまい。石巻バイパスは良い道だ。そこから本鹿まで舗装工事中。さらに成田から津山町の間も舗装工事中。慣熟はるるが砂利でぬかつていてさんざんである。テントサイトは志津川の町中を通り抜けた所で、右側東北電力の反対側の広場。先程から雨が降り出した。夜は近くの人や公民館の人々が合計5人、入れかわり立ちかわり家に来て泊まれというのを断るのに苦労する。朝になれば

ボリバケツに水が汲んである等非常に親切である。今日の走行距離 117km。土の道は上り下りがありかなし等戦することになった。

7月19日 (○→○)

志津川ふ(7:55) — 本吉(10:30) — 気仙沼(11:55) — 小泉(17:30) — 大船渡市(18:50) ふ

4時30分起床。切れだ雲から時々強い雨がおちてくる。しかし出発するころには南の空に青空を見せる程になった。一日中空をゆく雲の動きが激しく、気圧配置の移るのを暗示しているようである。本吉と気仙沼の間は一部で工事中であつた他の舗装になっている。残りは上り下りの激しいジャリ道である。その他の地図にある通り。陸前高田の有料道路は車の通りも少なく、峠から一気に自転車でころがるのは実に愉快であった。フェルメットをかぶつているので思い切つてとばせた。大船渡では一入離れてしまつて30分程ロスつてしまつた。テントサイトは淨願寺の庭すみにして荷を下ろしていると、どうしても上がりと寺主の子供がきかないで墨の上になつてしまつた。そこで風呂と夕食を二ちそうになつてぐつすり寝ることができた。ありがたや。走行距離 87km。少ないが道が道であるからしかたがないと思う。

7月20日 ①

大船渡市ふ(8:15) — (10:50) 吾浜(15:10) — 小白浜(17:40) — 平田(20:05)

朝6時起床。快晴に近い晴れである。朝からずい分日ざしがよく、暑になつたのがほつきりと感じられる。大峠への登りは途中までたいへん。舗装道路で、その先は工事中。その他の地図にある通りである。吾浜へおりた所では田の自転車が故障。一台が壊いので道が悪くなるとどうしても故障が多いようである。夏の気圧配置になつたのと道が悪くなつたのとを考えてできる限りへらすことにして、結果地である仙台に送つてしまふことに決定。送つたもの：米3升、ヤク8本、圓く持物

堀江：空気入れ

松田：かさ、かつば

加藤：下着の疊換え上下、くつ下、くつ、トウアリップ、上着、毛糸のセータ

これらのものを中島運送店から仙台に送る。今日は暗くなつてから十時向山の中の砂利道を走つたが、急くと危険である。テント場は平田の中の川の手前の左側の立場。子供の詫問は皆ここに張るそ、うである。木道もあるし、10張位は敷に張れる所である。即席ラーメンその他の買つて来て食事にしてすぐねる。9時30分。対岸は光と明けがついている。72km走る。

7月21日 (○→○)

平田ふ(8:05) — 釜石(8:45) — 大槌赤浜(11:05) — 富古(16:13) — 中の浜キャンプ場(17:15)

天気は一日中晴れ。夜になつて雨となる。鶴住居から大槌までは計画線道路が完成している。さらに波板から飯岡までは大舗装工事の真最中であつた。まがりくねつた旧道の中を新道はつらぬいている。

宮古湾に出た所からしばらく舗装が途切れている。宮古から先はくねくねした上り下がりの多いジャリの道で、まったく往来はない。周りの山々は真に緑色を呈し、海はどこまでも青い。今日は故障なし。上田伊郡大槌町赤浜の駒林商店で昼食にしたが、そこでたいへんなサービスにあづかった。テントサイトは道から歩いて降りた中の浜キャンプ場にする。車は道から少し入った処に置いた。完備されたキャンプ場で、我々の他に6~7人のパーティ1隊が居るだけである。宮古では丁度宮古まつりの最中で町には一大舞踊団が出て素晴らしい踊りを見せてくれた。郵便局に行くと別に何の連絡もないとのことで安心する。

7月22日 ○→○

中ノ浜キャンプ場(8:25)——田老町(9:20)——小本(12:30)——田野畠(14:55)——普代村(17:00)本

田老町の中にはほんの少し舗装道路があるだけであとは田野畠の近くで突然すごいのに出合うまでまったく舗装はない。しかし工事中の処もあり、そのところは巾員は広く側溝も出来ている。この宮古からの道こそ、いままでとは異なつた感じを与えてくれた。海はそれまでと同じく青く、山の緑と道の在り様が調和して何とも言い難い風情を漂わせている。ここでは自然があつてその中に人が生活しているといった感じであつた。人と自然が対立しているのではなく、一緒に在るという感じである。やとは普代村まで一部が未舗装なだけずい分良い道である。テントサイトは普代村の浜のキャンプ場。見ていろ前で矮パンの少女が焼いてくれた魚が実にうまい。2時ねる。今日の走行距離73Km。少し体がバテぎみであるようだ。

7月23日 ○→○

普代村(7:30)——野田村(9:05)——久慈市(10:00)——種市町(13:50)——八戸市(17:30)——百石町(18:20)本

いたる処に工事中の立てふだがある、終りの立てふだがあるとすぐ次に始まりの立てふだがある。一部は舗装されているが、広いジャリ道になつてゐるだけであつて、自転車にはまったくいけない。さらに道のほこりがひどい。松田パンク、次に加藤パンク、さらに堀江パンク。陸中海岸国立公園の観光開発のため、国道45号の整備が差ピッチで進められているからである。テント場は奥入瀬川沿に下つて海に出た処。今日は114Km走る。

7月24日 ○→○

百石町(8:00)——倉内(10:20)——六ヶ所村(11:30)——泊(13:20)——白糠(14:15)——小田野沢(15:30)——むつ市(17:35)

舗装は五川目あたりまである。しかし倉内までは巾員がずい分広い。車の通りも少なく、ゆるやかに起伏して居て、道の両側には主としてあやめの草花が目につく。右手はずつと海である。倉内から六ヶ所村あたりの原野的風景。小田野沢からむつにかけての山野の美しさ。あやめ、水菊の咲く中にある小田野沢分校。峠からむつ市の方を望めば恐れ山の上に夕焼の雲が終りの熱狂を現わすかのよう

に真紅に照り映える。夢の中に居るようなここちで走り続けたが途中で松田パンク。修理中に堀江のもパンク。従つてむつについた時には日はすでに暮れ、恐れ山へのバスもなかつた。祭りは今日までなのだ。テントサイトは近くの学校にし、大間崎へは行かずに仙台に向かうこと、明日はバスで恐山に行き、近くの海岸でゆつくりすることを決めてねる。計画がきつすぎるということが話題に上る。今日の走行距離102Km。

7月25日 ○→○

むつぶ(7:15) — (8:30) 恐山(9:45) — むつぶ(10:50) — 奥内(12:30) 本

朝5時起床、バスで恐山にゆく。恐山の火口原は硫黄のガスが吹き出しているために草木一本生えてない不気味な処であり、神社となつてゐる。ここは若年にして死んだ小供のための神社である。祭のあとかたづけをしていたが入神社料をとられた。ここから先台場では舗装の道ばかりとのことであるので楽であろう。奥内の海水浴場はあまりきれいではないけれども、実に波静かにして遠浅で、近くの小学校なのであろうバラニ台和で大テントを張つて泳いでいた。我々もまけじと泳ぎ、洗濯をし、今夕あみを引き上げにゆくという店に昼食をもとめたので、この船に乗せてもらつて魚取り見物にも行く。長期に続くサイクリングでは晴れた日に走らずに休むことが必要であると思う。

7月26日 ○→○

奥内ふ(7:20) — 野辺地(9:00) — 十和田市(12:30) — 福岡町(17:30)

完全舗装であるが平らな処はまつたくない。常に上つているか下つているかのどちらかである。さらに風はまつたくの逆風でこれも苦戦を強いられた。4号線は低い処で必ず道が半分になつていた。十勝沖地震のためである。日中はいやに暑くなつた。11時から40分間道ばたでねころんでねむけをさますことにする。45号線では3人のパーティに出合つただけだつたが今日この4号線はいやに多いので驚いた。サイクリング者の大部分は我々よりは軽装のようであつた。テントサイトは福岡町を抜けて橋を渡つて登り坂になる手前の左側の処。今日の走行距離127Km。

7月27日 ①→①

福岡町ふ(6:50) — 岩手町(10:00) — 鶴岡(13:15) — 花巻(15:55) — 北上(17:30) — 白山神社ふ(18:30)

今日も逆風がつよい。石川啄木ゆかりの地渋民によるとすぐわきを北上川が茶色く流れている。歌碑の曲りには極自然に花が咲き乱れ美そのものである。テントサイトは道路沿いの白山神社の庭にするポンプの水もあるし、となりは交番である。台風が来ているとのことで、先のことが心配になる。今日の走行距離127Km。荷も軽くなつていて、なれて来ているので快調に運ばれてゆく。

7月28日 ②→②

白山神社ふ(6:45) — 水沢(7:40) — の関(10:50) — 古川(15:50) — 仙台駅(18:10)

4時半起床、6時45分出発。平泉に2時間程止まる。国道のすぐわきの小高い丘である。今日は2つ

時間をロスル事件をおこした。速すぎるのである。自転車の場合交通事故の心配が多分にあるので、無事を確かめあうためにも、時間を決めて走り、その時間になつたら走るのを止めて皆縁になることが必要である。もう一つは送った荷物がどこにあるかわからないので困った。個人の名前で送るのが最もわかり易い。6時についたのに8時すぎまで貨物駅と人間の駅とをうろつく結果になつてしまつた。今夜は仙台駅にねることにする。今日の走行距離156Km。堀江のパンクを修理したのもあるからして今日は距離は長いが、道もずい分よいのであつた。

7月29日 ○→●

仙台駅(10:00) — 泉ヒュッテ(21:30) ふ

人が居過ぎて横になつてねむれない。検察に来た時はまったく居なかつたのに。中島運送店に電話で荷物のことを見き、さぐり出す。結局荷物はねていた駅の小荷物係にあつた。すぐに集中地 にむかう。今日の道のりは25Km。

7月30日 ●→○

泉ヒュッテ(9:00) — 仙台駅(11:10)(12:40)出子 — 鹿島(17:30) — 桧木商店の横  
ふ(18:05)

加藤がどうしても帰るというので、自転車の荷造りをする。列車を見送つたあと、松田と堀江の二人となる。6号線は海岸近くを走つているので昨日までの道にくらべて起伏がなくて走り易い。だが何となく見えない気分である。皆帰つてしまつたからであろう。テントのポールが本末のものになつて、今日はシャンとしたテントとなつている。走行距離72Km。

7月31日 ○→○

桧木商店の横ふ(7:30) — 波江(8:45)平(13:00) — 伊師次有料キャンプ場ふ(18:05)  
今日はおい風にのつてスイスイ。白い雲に青い空。ただし午前中はびしょぬれで走る。午後は実にさわいか。勿来の奥に寄る。テント場は伊師次キャンプ場の中、100円也の料金である。今日が最後であるから御馳走を作つて祝う。

8月1日 ○→○

伊師次有料キャンプ場(7:00) — 日立(7:30) — 原研(8:45)(10:30)出子 — 水戸  
(11:50) — 笠間(12:55) — 小山(15:45) — 足利(17:55)

原子力研究所を見学してくる。天気は良いし、思い切りペタルを踏んで帰る。

## 夏合宿の天気 7月17～7月30日

今年の夏合宿はほぼ東北の南北にわたり最南端と最北端で緯度にして5度以上、水平距離にして500K以上も離れているため地域によりそうとう差があると考えられるが一応八幡平隊を基準とした。

7月17日 ○—○

北上を過ぎると小雨が消え晴間が出てくる。綿雲、綿積雲、積雲、飛行機雲があり南に高層雲がある。南西の風もありすべて低気圧の接近を示している。午後2時高層雲、積乱雲に空は満ちる。天気図はあす午前中そして夜は雨を見る。他の隊はすべて今頃雨の中であろう。

7月18日 ○—●ツ

前夜10~11時に温帯前線通過。朝雲の切れより綿層雲をみるとこれは強い寒冷前線のためと思う。午前10時不安定前線のために雨強くふりだす後晴空が出る。1時20分雨が急に強く降りだし気温少しづつさがる。寒冷前線の通過である。あすは空気の層が不安定になり雨がふりやすいたる。

7月19日 ●ツ

時々強く雨が降る。稜線で20m以上の面よりの風、水平に近いすごい雨となる。ガスは1時10m以下となる。天気図を見れば真上に前線がかかっている。他の隊特にサイクリング隊は天気はいいだろう。その他の隊も少しはいいだろうが雨に悩まされているだろう。高気圧はだいぶ強くなつてきていてまだこの天気を変るには弱すぎる。

7月20日 ●ツ

天気図を見れば日本海中部の低気圧の温帯前線が頭上にある。低気圧の動きがだいぶ速いのは近くにジェット気流があるらしく、このぶんでは天気の回復はどうぶん望めない。サイクリング隊その他の隊はここよりはいいはずであるが、東北一体の上空が不安定なため山はやはり雨だろう。一歩まちがえば大雨にもなるだろう。

7月21日 ○—○

いぜん前線の影響で風強く時々雨となる。風は狂の風である。夜風の音を聞きこれで東北のつゆもあけたと思った。しかし上空に寒気が残っているのまだまだニワカ雨があるみごみ。

7月22日 ○—○

時々強いニワカ雨があり、風化面である。ラジオは函館が宮城に移ったと言う。多分他の隊も雨であろう。

7月23日 ○—○

北西の風に黒い雲がはやく流されている。前日と同じく層雲がきれのように飛んで行く。山は風が20m以上である。天気図を見れば前線が弱まっているらしい。

7月24日 ○

山はガスが濃く、強風である。他の隊は晴れ間が出ているだろう。ここももう雨はあまり降らないだろう。

7月25日 ○—○—○

始めて晴れる。太平洋高気圧が強力になつたためである。しかし上空寒気があるため積雲がでて日中は曇りとなる。天気図に前線があるがそうとう弱くあすは消えるだろう。他の隊ははれ。

7月26日 ○—○—○

朝ガスが出たが日が高くなると消える。寒冷前線の影響で夕時～11時くもる。夕方八幡平山頂より西方に巨大なレンズ雲を見る。なんの影響かわからず、ただ明日が明後日山は荒るだろう。

7月27日 ○

昨日雲海を東方に見たが、今朝もあり。風強し。他隊もそうとういいだろう。しかし天気図には台風がそうとう近づいているため、明日はどこの隊にも台風の影響が出るだろう。台風は四国に向かう見込み。

7月28日 ①—●

台風の影響が出て晴れたり雨がふつたり。岩手山は笠雲に終日つつまれている。笠雲の動きは遠くからも手に取るようにわかり、ものすごく速い。笠雲の中は強風雨である。台風がゆっくりしているため直接の影響は明日もないだろう。

7月29日 ①—●

晴間あり、時々小雨もあり他台に近づくにつれてくもりとなり、集中地では霧雨となり、夜雨。台風のリターンは満州の高気圧におされたため、もし台風の力が強ければ東化に未だだろう。

7月30日 ○

電車の中で気の遠くなりそうな晴れた空を見る。これは台風が弱まつたために影響が消えたためである。

## 三学部合同 ワンデルグ（赤城山）

11月9日 ●

午後7時より親睦会を行う。三学部の活発な意見が展開された。今後より三学部が親密になることが望ましいという点で一致した。合宿場所は林間学校。

11月10日 ○—①

黒桧と鈴ヶ岳に分かれてワンデルグをやる。

鈴ヶ岳 19人

林間学校(8:50) — (9:10)新坂平 — (10:10)鈴ヶ岳(10:40) — (11:45)林間学校  
鈴ヶ岳からの展望はとてもよく、遠く北アルプス、蓼科、浅間、両白山、横手山、白砂、上越国境が手にとるように見えた。山頂にて記念撮影。途中落葉のじゅうたんをサクサクふみしめて歩いたのは秋の深さをしみじみと感じた。

黒桧山 25人

林間学校(8:20) — (10:05)黒桧山(10:30) — (11:10)1680ピーク — (11:30)  
道がなくばつて川に出る(11:55)出発 — (13:00)1680ピーク — (13:40)林間学校

黒桧山への赤城神社辺からの登り道は山稟側からゆくと少し引き返すように出来ている。黒桧山頂に居る向は陽光もさし西側は遠くの山々までも見えた。鞍部から降りずに鳥居峠へ降りて帰ることに決める。1680ピークは霧のためまったく何も見えず左側へ進む。道がなくなり川へ出るが、検察の結果引き返すことにする。葉を落した広葉樹林の中から澄んだ青空と流れる白雲を見上げ、上州の晚秋を感じて歩く、皆元気である。先程の霧は嘘のように今は桐生までの山波が一望の下にある。すぐに下つて大洞より林間学校に帰る。

## 第6回 公開ワンデルング

〔実施日〕 6月15日～16日

〔準備段階〕

公開ワンデルングも数えて6回となり、今年も昨年同様三学部合同で行うこととした。場所としては今回の最大目的が利潤を得ることにあつた為に尾瀬方面とした。コースはA～E迄の5コースとし工学部2、教2、医1として担当し申込書、会員証は工学部が、そしてリボンは医が、旗及びバスの手配は教が受持つた。そしてX切り前に工学部の人数が急増した為工学部のみでバス2台を追加した為最終的にバスは9台となりその割り当ては工学部2台、医2台、教3台となつた。会員数は380名、OB10名、講員60名であつた。

〔総観〕

公ワンの実行にあたり、三年全集の協議の結果今回の目的は特に利潤を上げるという事に重点をおいた。もちろんワジダーフォーゲルの理解、3学部の交流、会員との交流等も含まれた。その為の部員の教育、歌詞の作成等を行つた。しかししながら終つてみて確かに多大の利益は上げられた。が、單に利益を得る手段としてサンメラーが大人数を尾瀬に入れる事と自然保護の問題の説明が最後まで残つてしまつた。但し我々は街の方に歓迎して貰うのではないことを記しておく。筆者が参加した結果考えるに雨天、大人数、コースの変更等にもかかわらず成功であつた（単に利潤を得た事だけでなく）と想う。ただ今後行う際にもその目的を熟考してもらいたい事を筆者は強く訴える。そうすればおのずから場所、季節、人数等が出来ると思う。ただ今回でもそうだが他の目的は各部員がそれぞれ自覚を持って行動しない限り決してある程度満たされる事はないであろう。

公ワン偵察

6月8日～9日 杞岸、南雲

6月9日

大清水(1:00) — (4:00) 長蔵小屋 — (5:10) 沼山峠 — (8:10) 小淵沢田代 — (9:50) 長蔵小屋 — (12:00) 大清水

偵察の目的は小淵沢田代への登り道を調べる事であつた。沼田駅へ着いたが早過ぎたので町をさまよつた後駅のベンチで寝た。2時間位寝てバスに乗り大清水に着くやいなや健脚を誇る我々は走るように出発した。縱つて行く手には誰一人としていなかつた。三平峠よりの下りは少し雪があつた。長蔵小屋に着いた時は未だ暗かつたが休けい所で朝食をとつた。しかし寒さがきびしいのですぐ出発した朝モヤが少しづつ晴れる中にはんやりと続く木道、そのかたわらで咲く清純な水芭蕉、まるで詩であつた。偵察に来て本当によかつたと思った。沼山峠で眼前の燧岳を見ながら寝た。かなり休養の後小淵沢田代へ出発した。ここにはかなりの残雪がありキヤラバン以上のものをはいてないと苦戦するなと思った。田代で昼メシを食つていると田代いっぱい広がつて歩いている馬鹿者がいた。頭へ来てかたわらに落ちていた「ハツハ危険」の立て札をきちんと入口に立てて出発した。長蔵小屋からは桐生の5丁目顔負けの人通りであり思わず滝をわすれた。あとはいつもどうり人の尻を見ながらソロソロ歩いて大清水へ帰つて来た。

# 社山 上山、堀江

12月10日 ○—○

桐生(6:48) — (8:40) 向藤(8:45) — (11:40) 阿世鴻峰(11:45) — (12:40) 社山(13:00) — (13:30) 阿世鴻峰 — (13:37) 中禅寺湖 — (14:37) 半月峰(14:45) — (16:30) 赤倉 — (17:00) 足尾 — 桐生

ふるえ上がるような寒さである。歩き始ければ、あがたかくなるがキルテンクはとてもぬげない。久慈沢の金牛にある家のおばさんが寒いからよっていけという。だが我々はちょうどよい感じになつたところである。ここを進む。堀江が道を知っているので楽である。まだちょっと調子づいて右側の尾根に河世湯を目の前にしてとりついだ。がれていてちょっとときつかつたがそれでも尾根に出ると雪の少しある上を、ササをふみながら行く。いいものである。ながめもよく八ヶ岳がよく見える。峰だけは、雪もありうれしくなってくる。だが左側ががしているので気をつけながら行く。右側には、男体が見える。さすがに大きい。社山に着くと(?)立てた標識がある。小さな山だけさすがに先輩諸氏の推める山だけはある。すばらしい眺めである。白根、錫、山玉帽子、太郎、男体が寒さにふるえるように立ちはだかっている。しばらく地図を出してあれこれとみくらべる。しかしそれにしても寒い。雪をたべながらの弁当もよくのどを通りらない。そろそろ帰ることにする。待っていたかのようにあたりの山々がガスつて来た。帰りは中禅寺湖におりてきた。氷があつ、張つてあはれてもかけない。

# 六林班・小法師尾根 上山、岡部

4月20日 ○

桐生(11:45) — (13:40) 原向 — (14:55) 銀山平(15:05) — (15:50) 一の鳥居(16:05) — (17:00) 実守山荘合

定時より10分遅れて元動車が出発し予定より30位遅れて原向につくいつものれきな足尾線である。駄付近では桜が満開である。快調な足どりで銀山平に向う小滝の里でサルを発見。頭対岸の木を伝つていたまた里へ出てきているのだそうだ。林道をぐんぐん進む。一の鳥居付近まで林道がのびている途中ノンストップ山荘につく。先客1人後から5人きた。そのうち3人は道具まで集つて行くこと。実に自然を愛する人々である。

4月21日 ○

山荘(6:20) — (7:50) 鋸利川峰よりの沢(8:00) — 鋸山(9:20) — (10:00) 六林班峰 — (10:35) 男山 — (10:55) 法師岳(11:20) — (12:00) 小法師尾根取付点 — (14:15) 1593mピーク(14:30) — 古尾(16:50) — (17:10) 原向(18:35) — (20:20) 桐生

山荘より六林班峰に向けて出発。雲一つなく美にすばらしい天気だ。電柱をふみながら進む。20分位行

つた所で今日下る小法師尾根と袈裟丸連峰が眼前に広がる雪がかなりあるように見えた。この道はあまりよく整備されていないし道標もなくクマササが道をおおっている。2、3ヶ所がしている沢がある沢には雪が残っている。鋸山よりの沢で道を見失い沢をつめることにした。最後岩場をのぼりヤブをこいで鋸刃峰目に出るとすばらしい展望が広がっていた。上越国境から浅間まで、日光連山、すぐ前に巨峰皇海が横たわっているそこでは雪は1ヶ月位ありそうだ。大林班に向けて急ぐ、峰につくヒ山荘からの道標があつた。この稜線歩きは実に快適で雪がまるで白いじゅうたんのようだ。樹間に上越国境を見ながら進む。小法師への道はまちがいやすいので十分注意が必要だ。またこの尾根は枝尾根がたくさんある。我々は途中から枝尾根に入り古尾尾に出てしまった。

## 粕尾峠～穴切 堀江、山田

5月3日 ②→●キ

桐生(6:48)---(8:30)足尾—(10:10)粕尾峠(10:15)—(10:45)水源涵養地—(11:05)地蔵岳(11:40)—(2:20)永室山—(3:00)十二山—(3:10)十二山(休)—(3:33)根本山(3:50)—(5:50)林道—(7:55)郵便局

粕尾峠から地蔵岳まではミツバツツジの花が美しい。粕尾峠から地蔵をまいている道しかない。稜線を行けば比較的踏跡があつて楽である。高い広葉樹林である。次の小突起から数をこいで直降すると猛烈な篠竹の林が平になつた稜線に残つてゐる。遠はこの中を走つてゐる。しっかりしている道である。進むに従つて篠竹は小さく、少なくなる。まだ高い広葉樹がつづいてゐる。次には低い一面の丘原となり、このあたりから道はずいぶんはつきりしてくる。さらに永室山からは道標も完備されて、ただ歩いて行けば梅田に出る。永室神社は道と反対側にあり、道からは全く見えない。十二山から来ると根本山は大分引き返す行程となつてゐる。根本山から県道沿いの道はミツバツツジの大木が美事であつた。沢に入つてまもなく狸と出会つた。ここら辺からずつと下つた石鴨のあたりまでやまとぎの花が印象的であつた。バスは馬鹿の最終がワ155で落合までくれば平均30分に1本位通つてゐるから便利。この季節には少し足の強い人向きの日帰りコースとして楽しめるコースであろう。足尾から栗駒町へのバス路線はどうやらから入つたとしても利用不可能である。

## 赤城南面梨木温泉 草場、松田、上山、岡部、江黒、高橋、齊藤、渡辺

9月10日 ①

林間学校(14:45)—(15:15)小沼—(15:30)茶の木畠—(17:10)梨木温泉

林間学校より小沼まで、日曜日なので車がいっぱい。茶の木畠での奥東平野の眺めはとてもすばらしい。西陽をうけた足尾の山々、広い平野に点在する町村。遠くに富士山、みんなの顔が西陽をうけて生き生きしている。ここからの尾根道も落葉と、熊笹とからまつの中を快適に進む。晩秋を感じさせる一日だつた。

## 柏尾峠

松田、池5名

5月26日 ②—①

桐生(20:22) — 足尾(22:00) — (0:30) 柏尾峠(1:05) — 地蔵岳をまく — 柏尾峠(6:05) — 通洞(10:10) — (10:55) 原向(12:10) — 桐生(14:30)

無線部歓迎ハイクをかねての山行なのだが、最初に立てた計画(柏尾峠、地蔵岳、氷室、根本山)の50%も果すことができず、非常に悔いのあつた山行である。そこで失敗となつた原因をここで考えてみる。未経験者が多いにもかかわらず足尾の駅でねずみ電車からおりてすぐに出発した。柏尾峠を目指す途中から雨が降り出し峠についたときにはどしやぶり、仕方がないのでそこで待つ意味をも含めしを食べる。しかし雨はやまない。止まっているときもないので、予定通り地蔵をまき始める。途中で道がなくなつたので磁石で方向を定めて雨と暗闇の中のやぶをこぎ始める。結局頂上がわからぬので回りの明るくなるのを、ラジウスで火をたき、それをかこみながら待つ。しかし時間の遅れ、前日の徹マンの参加者、その他の理由によつて峠にもどることに決め明方4:30に峠に向かう。

## 袈裟丸山

上山

5月19日 ③

桐生(6:43) — 汚入駅(8:00) — 林道分岐(8:55) — 林道終点(9:17) — 寝駄迦(10:10) — (11:00) 賽の河原(11:15) — 小丸付近(12:00) — 賽の河原(12:30) — 寝駄迦(13:00) — 林道(13:35) — (14:25) 汚入駅(16:15) — 桐生

朝から降りそうな天気であったが、はたして汚入につくと降りだした。どうも昨夜からカゼ気味で調子が悪い。長たらしい林道をあし早やに行く。とばしすぎたか林道の終るあたりちょっとバテ気味。この辺からガスってくる。双輪塔のあたりでは視界2m何も見えない。賽の河原でもガスがすごい。しかしこういう中でのワンデルメントもいいものだ。もう袈裟丸に行くのはあきらめてこの付近をぶらつくことにする。たばこをすいながら賽の河原をあちこち歩きまわる。つづじにはちょっと早く、しゃくなげが少しだけ咲いていた。おとは登る途中にエニレイ草やニリニ草等がある。賽の河原の下の小屋は、クラニドシートや毛布があいてあり夜露をしぬには十分である。帰りはある列車に乗ればよいと思つてかつてに下山。途中つり人にいわなややまめをみせてもらう。汚入の民衆のあるところまでくると数少い足尾線が今出ていくところ15分遅れているそうで次の列車は20分遅れて16:15分とのこと。駅で着物をかえ2時間待つ。晴れた時の賽の河原のことを知つてしまえば、つまらないものだが何も知らなければガスついていてもそれなりに十分すばらしいものである。

## 足尾一日光・県境縦走 (5月24日～5月27日) 堀江、西口、宇田川

5月24日 ②

桐生(18:10) — (20:30) 原向 — (21:20) 小滝(21:30) — (21:45) 銀山平(21:55)

—(22:50)一の鳥居(23:00)—(24:00)山荘下る

桐生駅で三人集まり、原向に着くとすぐに歩き始めた。国道122号線を少し登り銀山平へ向う。ザツクの重量は20kg位なので軽快に歩ける。星は出でていなく、ヘッドライトの光に映り出される小滝の里の跡が不気味である。一の鳥居までのいやな林道も終り、ようやく山道に入り山荘下の広場に着くとすぐに天幕を張り、少し飯を食つてすぐに眠りにつく。

5月25日 ①→②

ふ(7:00)庚申山荘(7:15)—(8:30)庚申山(8:45)—(9:30)渓雲山(9:35)  
—(10:25)薬師岳(10:50)—(11:30)鋸山(11:55)—(13:25)皇海山(13:40)  
—(14:38)国境平(15:10)—(15:55)1740の登り(16:35)—(17:50)カニキタ  
コロ ふ

5時半頃起きたがあまりねていないせいかやけに冷え込む。昨日のにぎり飯ヒラーメンで朝食とし、庚申山荘にて入山届を書き水を補給して出発する。うすピンク色に咲いたミツバツツジの間から富士が良く見える。山頂からは袈裟丸連峰等を始め、遠く北アルプスが白く見え、鋸山峰を乗越している間、ずっと、これから縦走する国境稜線を始め、社山から三叉の稜線や男体、大郎がはつきりと見えた。鋸より六林班峠へ向う道あり。皇海頂上には我がワングルの標式がある。皇海の下りには雪が少し残っていた。国境平にて水を補給するため水場に降りたが、星海をひかえているせいか水量が多く大へん良い水場である。稜線より右に松木谷が素晴らしい景観を見せてくれる。1740の登りの途中で天気図を取り、明日の天候はまず大丈夫だとする。県界尾根より松木側に出ているカニは丁度谷川岳のシンセン岩峰の様である。幕営予定地のヤジの水場まではとても行けそうにないので、カニと三又との間のカニキタコロに幕営する。ヤフをたおしてテントを張るのは大変つらい。水場は少し下ればもちろんあるのだろうが、三人である程度確保していたためべつに水を取りに下る必要はなかつた。

5月26日 ②

ふ(6:05)—(6:50)三叉山(7:10)—(8:10)ヤジの水場(8:40)—(9:15)  
ヤジの頭—(ノ:50)宿堂坊山(10:20)—(10:30)水場—(11:00)ネギト(11:05)—  
—(11:10)柳沢林道分岐(11:15)—(11:35)2040P(荷鞍尾根の頭)(11:50)—(12:  
00)三林班沢の頭—(12:25)2077P(12:35)—(12:45)柳沢水場(13:00)—(13:35)  
2140P(14:00)—(14:30)錫ヶ岳(15:30)—(16:10)錫の水場ふ

目をさまと雨がしとしと降っていたが歩き始めると、丁度やんだ。三叉まではワンピッチ、ずっとブッシュである。少し下った所に、黒塗から社山へ向う道があり、かなり良さそうである。ヤジの水場は上州側に5分位、急な沢を下るが、水が少ないため、上りの事を考えて下るのをやめ、引返えす。またワンピッチで宿堂坊につき、メシにする。ネギトを越すと柳沢林道分岐に着き、西ノ湖への下山路として更新しい道標付きの道がある。水場へ松木側を15分、林道まで40分とかいてある。2040Pは荷鞍尾根の頭であり、1793Pへ向う道がある。このあたりより石楠花が沢山現われとてもきれいで

ある。柳沢の水場は松木側へ注げりとなり。このころより純走路に雪が多くなり、時々もぐりながら歩く。錫へつき、木に登って笠の瓦を見るが、2360Pにかくれて見えない。サックを置き笠に向つたが、南西側に下つてしまう。笠ヶ岳に行くには錫より西北面に向つて40m下り20m登つて2360Pを越え、40m下リヌ2360Pを越えて西北面に向うのである。我々は時間、天気、雪、それから幕営地の配から笠ヶ岳を断念する。ところで男体の新しい地図には手前のピークが出ていないが、古い地図にはでているのである。錫を東の方へ下り、水場に向うが、雪がくさついてもぐつてしまい、靴がぐつしよとぬれる、残雪の上を、赤布を頼りに水場に着き、群馬県側にぎつしりとつまつた雪の上を慎重に下ると、雪の下で水が音を立てて流れしており、雪を割つて水を得る。白根の避難小屋までは、まだかなり時間がかかりそうなので、ここで幕営することにする。

5月27日 ⑨→●→○

（5:45）—（6:20）2300P—（6:45）2280コル—（7:10）2380P（7:30）—  
（7:50）2280コル（7:55）—（8:25）2340附近の岩上（8:40）—（9:50）日光白根山  
（11:10）—（11:25）避難小屋（12:00）—（12:20）前白根山（12:35）—（12:45）天狗  
平（13:25）白根登山口—（13:35）湯の湖畔——中禅寺温泉バス停（14:45）—（15:20）  
半月峰登り口—（15:48）半月峰（15:50）—（16:15）1511P—（17:20）向藤駅——  
（20:20）桐生

朝はかなりえ込み、宇多川氏眼れず。テントから出てみると素晴らしい雲海で、男体、至仏、白根等が見事に浮いている。2300Pより北方にのびる尾根に下りかけ、あわてて引返す。2380Pより五色沼に通じる道あり。我々は県境を忠実に進む事にし、雪の中のヤブコギに突入する。130m位下ると何かしら神祕的な凹地に出る。少し休み、2340Pへの登りにかかる。急なフッシュを登つていると、岩にぶつかり、アタックするが登れそうにないので捲きぎみにフッシュを登り2340附近の岩の上に出る。岩の上からはよく見える。白根、前白根、2380P、2410P---。北東に向つて登りながら裏道の方へ雪渓を行く。頂上には雪だけ水で出来た池が2つある。ガスついて五色沼と菖蒲しか見えなかつたが、南面にもまだ雪がべつとりついているのが分かつた。下りは滑落すると危険なので慎重に降りる。ピッケルがあればフリセードが出来るのに、残念であった。白根避難小屋は二つあり、両方共ガッチャリしている。また氷が残つている五色沼へは30分で往復し、前白根山経由で湯本へ下り、久しぶりに人の顔を見たときは少々うれしかつた。そのあと堀江、宇多川、山氏は半月峰を越えて足尾に向い、西口は日光へ出て小山経由で桐生へと帰路に着く。

## 袈裟丸山連峰 上山

8月22日 ⑨

況入（8:10）—（9:40）林道終点—（11:25）双輪塔（11:30）—（12:50）春の河原  
（13:05）—（14:05）小丸（14:15）—（14:30）小屋

合宿いらい何もせずにいた体に荷物が重い。日光白根まで出る予定なので一週間分の食糧がある。あおよそ頭にくる長い林道をノロノロと行く。林道の途中にタムを作るとの事で工事をやつている。どうもこここの山にくると体の調子がくるうらしく軽い頭痛を感じる。どうにか林道も終り、沢合いの山道に入る。あまり急な道はなく一人旅なことも手伝って休みの時間も短くなる。寝駄迦の頭の上で一服し、じつとしているヒ寒ささえ感じるのですぐに出かける。ここには便所もあり、その気になれば、静かなよいキャンプ場になるだろう。ただ沢の中であるのが残念。晝の河原下の小屋はこの前きた時とほとんど変わっていない。晝の河原では曇っていたが赤城がすぐ目の前にあり、これで晴れていれば可もいうことはない。ここで昼食にし、たばこで体をあたため、1歩1歩と小丸に向っていく。小丸までは今までのよう木の中を歩くのではなく尾根なのでなんとなく気分も明るくなつてくる。小丸であたりをながめたりしながらふと気がつくと、何の音もない、風の音すらなく耳が痛くなるような静けさだ。小屋は遠からちよつとはずれたところにあり、中はササのベットがある。夜中にネズミにかやまされる。

8月23日



小屋(5:10) — (6:25) 前袈裟(6:40) — (7:15) 後袈裟(7:25) — (8:05) 中袈裟(8:10) — (9:25) 中袈裟(9:40) — (13:05) 法師矢(13:30) — (14:45) 六林班峰(14:50) — (17:40) 小屋

ガスられる。ものの十分と歩かない内に上から下までピッショリ、おまけに寒い。休むとすぐにタバコに火をつけ、消えるとすぐ歩く。ガスられたのをおしみながら小屋から30分も行くと、急に猿のはげしい声が聞えてきた。猿を上げると30分ほど前方の不がゆれている。その内に人間に気づいたのか一斉に目の前のガレ場に飛び出してきた。約20頭くらいであろうがみなガレ場を渡つてみえなくなつたかと思つてみると、2頭ばかりソソリ出て来て、キーキー言いながらこちらをうかがつてゐる様子である。実にうす氣味悪い。俺は猿に好かれれる理由も何もあるわけはないのだが、それにしてもよく会う。これで猿の群には足尾で3度目である。

前袈裟でも後袈裟でもガスっていて何も見えない。このあたりからワイドのキスがやたらにあたりの木にぶつかる。後袈裟の下りの降りきつたあたりでマップケースを取り出して愕然とする。体で感じている以上に寒いのである。マップケースが破れて、入れておいた磁石がない。まだ23日の半分もきていないのである。残念である。自分のうかつとに賤も立つ。しかたなくわからなくなつたらもうどるつもりで進むことにする。こうなると余計にすべてやつてしまいたくなる。そんな気持とたたかいいながら歩いてゆくと中袈裟をこしてからしばらくするとどうも様子がおかしい。道をまちがえたらしいので中袈裟までもどつてみる。やはりまちがつていた。右にガレ場をみながら行けばいいと思っていて法師矢からつづいている番号29があるのを左に行かなかつたためである。そして、法師と奥袈裟の鞍部のところでも道がほとんどササのため見えなくなつたりなくなつたりしていく苦戦する。時に法師に至る鞍部では磁石をもたないつらさを身にしみて感じさせられる。法師でシリのほころびた

スボンをはきかえ庚申山荘へ下る決心をする。法師を降りてから 1869P から六林班までは春の残雪期とは天国と地獄の差、ものすごいヤフである。途中時々道もみつかるが、ほとんどの道はなくなっている。六林班よりは鋸方面も小屋への道も整備されてしまっている。山荘までは大小の沢を 15、6 越えなければならず、少々疲れた体にこたえた。わずかに山荘ちかくで鹿の親子になぐさめられ、ようやく山荘につき下Sとする。

8月24日 ②→①→②

ふ(2:20) — (2:50) 一の鳥居(3:05) — (3:50) 銀山平(4:05) — (17:10)  
原向

天気はかなり不安定であるが時々晴れ向がのぞく。朝庚申山の下を散歩してくる。ようやく先をあきらめる決心もつく。いつかこの先をやらなくてはならない。今日一日はここですごそうと思っていたがハイカーがうるさいので桐生にもどることにする。銀山平で山荘のおばさんにお茶をもらい、水戸からきたという二人と一緒に原向に着く。列車に乗ったときに疲れがどつと出た感じであつた。

反省：何よりも磁石をなくしたこと。不注意もはなはだしく、深く反省しなければいけない。

特に単独山行であつたことも考えあわせて。

尚、前袈裟と後袈裟の間のキレットは左側にちょっととした道が出来ているので思つたほどのことはなかつたが、反対側からきた場合はちょっと苦戦するであろう。

## 庚申山～松木沢 高橋

10月19日 ①

原向(12:30) — (1:50) 銀山平(2:00) — (4:15) 庚申山荘合

土曜午前一人ふらりと足尾へ出向く。大字へ入って初めて登った山がこの庚申、皇海で、中々苦労し、Eさんの陣頭指揮の声、「ザックつけて」がなつかしく思い出された。

山荘について後から来る筈のKさんを待つ間、山荘の管理人のアンチヤンの、お茶を女の子の所ばかりにマメに運ぶのにはシャクにさわる。Kさんはとうとう来なかつた。明日は庚申山のお祭りだそうで酒飲む人々で大変騒々しかつた。

10月20日 ①

庚申山荘(5:00) — (8:30) 皇海山 — (9:20) 国境平(10:20) — (10:40) ニコリ沢

— (14:15) 砂防ダム(14:40) — (15:00) 間藤 — 足利

キッカリ 5:00 発、霜柱が立ち寒い中暗い中登る。剣ヶ峰に到達する頃にはすっかり朝日も上がり、山腰の紅葉がすばらしい。鋸岳、のんぎに紅葉なんぞを楽しみながら歩いていると道の傍の熊糞の中より「ガサッ」「ガサッ」という明らかに熊の足音、かなり至近、小生ソッとして 50m ばかり今来た道をひき返し、しばし立ち止まり、ありったけの大声をバカみたいに何回も出す。そして進むべきかひき返すべきか考え、あまりの紅葉のきれしさに負け前進する。それから手にはナイフを持ち、

自分の知つているすべての歌を恥も外聞もなく大声でメドレーでやらかす。歌がこまわりもする頃やつと豊海についたものの何だかおちおち休む気にもなれずにイソイソと国境平への下降を始める。国境平にて朝メシ兼昼メシのラーメンを食う。ここからニゴリ沢までのモミジ尾根は名の通り紅葉がすばらしい。昨年苦しんだ松木沢も周囲の岩壁を染しみながら何となく間藤へ。

## 庚申山・皇海山 上山、大橋、河野

10月19日 ①

桐生(14:52) — 墓向(16:00) — 銀山平(18:15) — 一の鳥居(19:15) — 鏡岩(19:40) ふ

朝まで一人で行くつもりであつたが、昼には大橋と、駅では河野とも、結局は三人で出かける。テントをもつてるのでどこでも勝手なところにとまればいいと思って気が楽である。銀山平で最近まで山荘の番人をしていたおばさんにお茶をもらいすつかり暗くなつた車道をつめる。今日は庚申山のお祭だったそうでいつもは会うこともない車に数台行き合つ。一の鳥居に張ろうと思つたが明日のため鏡岩まで行くことにする。鏡岩で幕営、夜中の一時頃田舎の一軒に起さされる。

10月20日 い

ふ(5:20) — 小屋(5:50) — 見晴台(7:30) — オウ帽(8:30) — 鋸オウ帽(9:25)  
— 皇海山(11:35) — 国境平(12:25) — 深入口(12:45) — ニゴリ沢(13:25) — 間藤(17:40) — 桐生

シュラフの中で朝食のパンを食べ、予定より1時間ばかり遅れて出発(これで山荘で我々を待つていた高橋君に会えず、彼は5:00に小屋を出た)。庚申山への登りでザックの修理をしたりしていたので松木沢までいけるか心配だったが、無理なら庚申山で寝覚めもすることに意見がまとまって、のんびりとあたりをたのしみながら登る。よく山荘まできて何もしないで帰れる人があるがやはり庚申山くらい登つたほうが数段楽しい。この登りは、かなり風景もよいし意外に早く登れるから。鋸の尾根に出ると六林垣峠から法師の周辺の紅葉はすばらしく、また皇海は目前に表れる。庚申山での寝覚めの話はどこでやら楽勝ムードで、鹿の声を聞きながら鋸最後のオウ帽に出る。春に来た時もすばらしい眺めであったが今回もややかすんだ渋向や武尊、それに勇本、白根等よい眺めであつた。また松木沢方向の紅葉もみごとである。ゆっくりと休み、楽しんだあとで皇海へ。何も見えないのは承知であつたのでパンを食べてすぐまた出発。国境平から松木沢へのコースは正に秋の山を十分に味あわせてくれる。特にシーズンさかりなのに人が少い。松木沢はやはり長い。だが長い西側の日本ばたれした岩壁のスケールの大きさは一見の価値はある。もはや時間も急ぐ必要もないで十分松木の美しさを味あわせてもらつた。

## 細尾峠 — 粗尾峠

— 11月1日～3日

上山、渡辺、加藤

11月1日 ①

桐生(15:00) — (17:00) 足尾 — (17:30) ふ

最終のバスは16:00とのこと。そのため我々は駅の近くの信号機の下に幕喰。列車が行くたびに信号の音におどろかされる。夜はそれほど冷えなかつたが、明け方はやはり冷え込む。

11月2日 ①→②

足尾(8:05) — (8:45) 細尾峰(9:00) — (9:40) 薬師岳(9:50) — (11:25) 地蔵岳(11:35) — (11:50) 分岐 — (14:10) 行者沼(14:15) — (14:25) 古峰ヶ原(14:40) — (15:25) 天狗の庭(16:10) — (16:15) 三枚岩 — (16:35) 方巒山ふ

朝一番の日光行に乗り込む。今日の登山者は我々だけらしい。この近くの山の魅力の一つだ。細尾峰より、雪のある時に来たらよからうと思える尾根を上がったり下りたりしながら進む。雪のかわりに落葉のジュータンである。古峰ヶ原は湿原の退化したものであろう。やはり、シーズンオフなのがあるのは観光客の夢のあとのごみばかり。ここのはユッテと称する小屋は無理すればいくらでも泊まれそうである。ただ、壁板がはがされたり、ガラスがわられたりしている。ここから、前とはナヨット様子のちがつた尾根に出る。天狗の庭に行って休み、そこでラジオがなくなつてゐるのに気がつき、古峰ヶ原まで戻つたりしながら、方巒山にテントを張る。この尾根は賽の河原の様に岩がゴロゴロした所が多い。三枚岩には、小屋もあり、風扇をしのぐには不適しない。方巒山には国鉄の反射坂がある。やはり大きい。夜は冷えた。

11月3日 ②

ふ(6:30) — (6:40) 車道 — (8:40) 狂尾峰(8:50) — (9:00) 地蔵岳(9:25) — (10:30) 沢出合(10:35) — (11:50) ひざつきはし(12:00) — (14:25) 沢入(15:39) — (17:00) 桐生

朝、テントに氷が張つてゐる。空の星は板群に美しく、しばらくぶりに山の朝という気分にひだれた。下山からわずかに行くとすぐに車道に出る。車道に沿つて角石部落が続く。また足尾方面には袈裟丸連峰、皇海がみえ、実に気持ちよい。意外に早く抱尾峰につく。ここから早速、道がわからなくなり、ヤフというよりは雑木をこいでどうにか地蔵の下の足尾からくる道に出る。そしてまたヤフをこいで地蔵につく。計画では地蔵をまいている道をいくはずであつたが、結局これを登つた。ここから永室方向の尾根がすぐみつかる筈であつたが、かすかな道をたどる内にどうも永室方向の尾根をはずしたらしいので、一応地図上にある沢入への道に見当をつけて、また尾根に戻ろうとしたが、結局、時間的に無理なことと、下りた沢が沢入への道につづいていることが明らかになつたため、下山することにする。

桐生(6:38) —— (8:27) 間藤(8:30) — (9:00) 赤倉 — (9:50) 山の神 — (10:57) アセ湯崎(11:35) — (12:20) 社山頂上(12:55) — (13:35) バカラ根無人小屋 — アリ沢砂防堤(14:35) — (15:30) 間藤(16:59) — (17:00) 桐生

工学祭足尾調査にいったパートワンデルングの一環とし、晚秋の山を味わうために計画する。あれやこれやの理由によって、日帰り社山行きを決定す。3日、桐生発の足尾線一番列車に乗車したる所、こはいかに、休日とありてか、さしもの足尾線も満員である。登山姿の者、はた又、美人モデル衆を含みたる老カメラマン等々、色彩情緒たっぷりと、このローカル線足尾行きは秋だけひわの渡良瀬をさかのぼりて進み行く。終点間藤にあり立てば、のどもともめ上げるがごとき反白色のガス、これが驚けり。ヌッと突き出す黒褐色の岩山、木々は鉛筆のためにかもはや存在せぬ。アア、なげかわしきこの荒廃ぶり。我らは何んともつかぬ感を持ちて、一段道をたどる。山の神より「九戻渋谷」にてアセ湯崎へ向かいたる我らに、道路補修をしてある男等が、驚の出没ある事を告げり。この足尾にも敵の生存あるとは、我らまさに興味深く悪いけり。すでに落葉しきる豪れ林を抜け、九戻渋谷に入らす登るに、あたりは晚秋の面影深く、感無量。最後の急勾配を登りつめたれば、眼下に古々とたがりたる中禅寺、正面に雄姿をそびえ立たせたる男体等々、我らが視界一帯に広がりたるここがアセ湯崎なり。男体のふもと付近に多めよりも紅葉のなごりあり。豪盛期の紅葉の美しさを想像するにここよりの眺めがオードアラウントよ。昼食のおりに荷物に、このコースは走りや女性同伴にて走るべき所であるとの意見の一一致をみる。あたりの景色を見るに、ひたする自然に溶け込み。ゆったりとした後、尾根を社山へ向かう。しかし、何んたる対比であろうか。左、足尾側の山々の岩肌は黒々とし、崖崩れの白き爪跡を残し、木々は全く存在せず、他方右手、日光方面の山々の何んと豊かなることよ。木々は豊かに、湖面はゆったりと情緒たっぷりなり。初夏などにおいては、より一層の対比を示すであろう。社山頂上よりのパノラマに見とれてあれば何にやら多勢の登山者の一行到着せり。年若き男女なり。そは、栃木県高級山岳部合同合宿云々でもあるらうか。総勢150名ほどの勢力に何んとも居たまはず、すゞすと頂上を後にす、足尾への降り口を見つけるに、少々とまどうなれど、一路快適に下る。バサ尾根と云うだけありて、唯一一方的に下りのみである。長々と下りて、アリ沢砂防堤に降り立ちて、さすがにホッヒセリ。松木沢との出会いの川原に立ちて、ふり返りみれば、かの社山がわすか、手に取るがごとくそびえておる。全く山はよきものなり、しみじみと感ぜり。川原に居ては、今朝のカメラマンがモデル衆を囲みて、撮影会の最中である。しばし見とれけり。列車の時刻、判然とせぬので急ぎて駅へ向いたるが、1時間30分の待ち合わせなり。ガックリ

表装丸山 中島恒弥、他友十名

11月2日、11月3日 ◎→①

桐生(20:58) —— (22:00) 汚入木(6:40) — (7:30) 林道終点(7:40) — (8:55) 炙輪塔(9:05) — (9:50) 豊ノ河原(10:00) — (10:45) 小丸山(10:55) — 小屋⑩-

— (12:00) 裝裟丸 (14:00) — (14:45) 小丸 — (15:25) 賽ノ河原 — (16:00) 相輪塔 —

— (17:25) 況入 (17:25) — (18:30) 桐生

桐生駅を定刻に出発した2人は今日の泊る所も定まらず、最終列車にゆられて、今日の目的地沢入駅に到着した。今日の泊地はこの駅の待合室と決め後のほうから改札口に向い親切そうな駅長に詮しかける。この駅は待合室は3ヶ所あり、明日の始発6時までどこを使ってよいとの返事が得られる。大喜びでシユラフを持ちベンチの上に寝ころがりさっそくうとうと眠りに入る。朝、自をさますれども時こねは大安ととび起き朝食をとって出発「どうもありがとうございました」と況入の道は柿マ々の連続、林道分岐を過ぎて10分くらいで林道終点であり。それからは山道へと入っていく。1時間ほどで相輪塔へ出る。岩石の上には薄氷遊像があり。昔の信仰をしのばせる。ここからのながめはすばらしく紅葉につつまれ、少し寒々しい足尾の山々がずっと遠くまで開けている。紅葉はすばらしく岩の間を小川が流れ、それに降りそそぐ楓は朝日をあびてとても華やかである。小川を飛び飛びどんどん登っていくと、あたりはパーと開け、賽ノ河原へと出る。ここには落石がいたる所にちらばっており、まさに賽ノ河原（子供が死後に行く地獄で石を積んで塔を作る所）である。しかしながらはすばらしく、赤城はざんと腰を据え、めざす装裟丸は遠く紅葉に映え秋の日光が青き空よりふりそぎ、実にすがすがしい気持であった。また元気をふるい起こし装裟丸めざして出発、道は良く変換な尾根歩きで小丸山よりのながめはすばらしい、男体、白樺、庚申、皇海など日光、足尾が一望に見わたせてさっそうと英雄気取りで前進す。小丸より少し下りた所に小屋と水場があり、ササ林をすぎて最後の登り、装裟丸めざして奮闘する。ついに頂上に着くかかり木があり日光方面は見えず、健闘を祝してカンパニー、実に5時間の行進であった。2時間の登宿の後、大急ぎで下山、この山では天気は良く紅葉の絶好の休日なのに山に入ってから誰一人として合わなかつた。こんな良い場所がちょっと時間的にきびしいという事で登山者が少ないのは実に残念である。また一方荒れなくてさいわいである。

### 足尾二子山 岡部

11月21日 ①

桐生 (6:38) — (8:00) 況入 (8:05) <sup>トト</sup> (8:35) 林道終点 (9:00) — (9:45) 相輪塔 (10:00) — (10:35) サイの河原 (10:50) — (11:00) 境界巻根 (11:25) — (11:50) 二子山 (11:50) — (12:20) 1460m 地点 (13:30) — (14:40) 国道 — (3:00) 原向 (3:23) — (5:00) 桐生

霜で真白の沢入の駅はとっても寒い、すぐ歩き始める。柿がみごとに熟している、1000m以下の所は紅葉が朝日を浴びてさわやかだ。林道を20分ばかり行った所でトラックにのせてもらう、大変助かった。木こりの人と一緒にたき火をかこみ熊の話を聞いた。霜柱をふみながら落葉の中を進む、雲が動き出した、上層気流は不安定らしい。風も少しはあるので止ると寒い。サイの河原の手前のカラ

マツ林の中ぞ変な足跡を発見まだ新しい。熊を連想する。いささかこわい。サイの河原ぞの展望は奥にすばらしい。上越国境から秩父までよく見えた。うしろをふり返ると前日光高原である。思わずため息が出る。リンゴがとてもうまい。時々考えて袈裟丸山まで行くことにする。しかし、途中で熊の糞を見て恐しくなり、枯木を片手にもつて袈裟丸をあきらめる。ニ子山はあまり展望はよくない。道は県界尾根にかなりはっきりついている。国道まで県界尾根に行く。途中唐風呂に下る道がかなりある。いたる所でばっさいが行なわれている。足尾の山も年々変っていくようだ。

谷川岳縦走 (5月3日～5日) 西口、吉野

5月3日 ①(上部は○)

桐生——水上——ロープウェイ乗場(8:45)——(9:00)マチガ沢出合(9:13)——(10:00)  
——小さな尾根(10:05)——(10:25)——の沢(10:35)——(13:00)西黒尾根(13:20)——  
(13:35)氷河の跡(13:40)——(14:00)ザンゲ岩(14:10)——(14:40)肩の小屋  
バスを降りるとすぐに歩き始め、マチガ沢出合で水を補給し、スキー部の友人達に見送られながら、雪  
渓に足を踏み込む。スキーヤーがかなりいるが、気にせずまっすぐに沢を登る。一ノ沢の一本手前の  
沢を少し登り、すぐに尾根にはいあがる。尾根を一ノ沢の方へとトラバースぎみに登り、一ノ沢に出た直後2人一緒に滑落する。キックで登れないこともないが、念のためアイゼンをつける。少し沢を  
登ると右側の尾根にトラバースしているカッティングの跡があったので、それを利用して2の沢に入る。  
しばらく登り、またトラバースしてもう一本上の沢にはいり、まっすぐ登り西黒尾根に飛出す。  
沢の上部ではガスっていて最終的に登った沢ははっきりしないが、二ノ沢右股か三ノ沢左股であった  
と思う。雪渓を息もつがずに登ったため、ザンゲ岩を登る頃は少々バテぎみである。肩の広場では、  
強い風と深いガスのため、踏み跡を正確にたどり、肩の小屋に飛込むと、すでに2パーティーが小屋  
の中に天幕を張っていた。我々も小屋の中に天幕を張り、スキヤキを食って寝る。

5月4日 ○→○

水分の多いミヅレと強風のためチンデンする。昼頃、トマの耳からオキの耳を往復するモガスに捲かれてただ寒いだけである。17:30頃トマの耳にて上州武尊、白毛門一朝日の稜線、マチガ沢がくっきり見える瞬間があった。19:00就寝。

5月5日 ○→○

肩の小屋(5:30)——(5:45)オキの耳(5:50)——(6:25)ノゾキ(6:30)——(6:  
45)——一ノ倉岳(6:50)——(7:10)茂倉岳(7:20)——(8:05)笠平(8:35)——(9:  
15)武能岳(9:30)——(9:57)ヨモギ峠(10:40)——(11:15)白樺邊縦小屋(11:20)——  
(12:50)湯塩曾川出合(13:00)——(14:10)土合——桐生

肩の小屋を出発し笠平まではガスっていて、ただひたすらに雪の稜線を登ったり下ったりするだけであつたが、笠平付近はガス帯の下にあり、晴れていてまわりの山々も良く見えた。ヨモギ峠よりは夏道の沢ぞいをグリセードで湯塩曾川に出る。荷が重いためうまくすべれなくて残念だった。新道は雪がほとんどとけていた。

巻鉄山 草場、小沢、堀江、上山、五十嵐、大橋、宮川

5月11日 ①→○

桐生(12:23)——(16:51)六日町(17:00)——(18:00)清水本

今日の天気が明日まで続いてくれるよう願いながら出発。六日町で天気図を書く。明日は雨と断定。

しかしH氏によれば少しは晴れも期待できそう。心配したバスも4日16日より清水まで行っているというのぞ安心。雪を溶かす為の水が雪もない道路の直中から吹き出しているのをめずらしそうにながめながらバスにのられ行く。ここで参考までに。このバスは荷物代と別にスキーダミをとるから要注意。雪溶け水がゴロゴロ飛れる川端の道を行く。車窓からは目ざす巻機のまだらに雪をいただいた山並が非常に美しい。清水へ着き泉涌にことわり神社の境内に幕営する。この付近の木の大木の下にはよごれた雪がのこっている。対して田は苗代が縁で田植をまつばかりであった。夜先輩達の個人装備を飲み食いし感謝。就寝。

### 5月12日 ①

△(4:40) — (5:45) 井戸の壇(5:55) — (7:50) ニセ巻機(8:00) — (8:30)  
巻機山(聖地) — (8:52) 牛ヶ岳(9:55) — (10:30) ニセ巻機 — (12:25) 烧松(12:  
30) — (13:25) 清水(13:45) ~~走る~~ (14:35) 沢口(14:45) — (15:12) 六日町(16:00)  
— (20:08) 桐生。

2時50分起床。空には星が輝いている。テントをたたみ荷物を社内におささげ出発。O氏スキーをかぶぐ。真白なコバシの花、真赤なつばきの花が我々を祝福する。雪があまりなさそうなのでO氏藁小屋へスキーをひいて行くが1000m位のところから雪があらわれ1300m位のところでは1m以上積っていたので下りに行く。作業食、水をあいて出発。道は雪面である。見晴しがよく非常に状態。谷が急にあちている所は大きな氷が出来ている。ニセ巻近くは道があらわれる。ニセ巻と巻機聖地の間は大きなコルで2~3mも積った雪で真白である。今まで歩いていた所とは異なった雄大さがある。聖地から牛ヶ岳まで広大な一望の山頂で、太陽はあるが風強く非常に寒い。牛ヶ岳上でのしとする。展望よく大源太山、谷川連峰、苗場山、遠く黒姫、妙高が雄大である。後に八海山、鶴ヶ岳、丹後、大水上、藤原山とつづいている。割引券でも行く予定だったが風が強くガスって来たのでやめた。下りは雪の上を下るためらくである。O氏とわかれの所はO氏は腰をへらしてスキーに夢中である。ここで1時間余り遊び清水へ下り沢口へ歩いたり走ったりでバスに乗ったら雨が降り出した。全く運の良い山行であった。

### 尾瀬 原、大橋、部外1

### 5月25日 ①

桐生 — 沼田 — 富士見下(4:30) — (6:10) 富士見小屋(6:25) — (8:25) 見晴(8:  
45) — (9:05) 壱宮小屋(10:00) — (12:30) 景鶴山(12:55) — (15:25) 壱宮小屋  
(15:45) — (16:30) 山の鼻△

尾瀬もシーズンなので山行者の数も多い。見晴まで道の途中の湿原には水芭蕉が一面に咲いている美しさであった。尾瀬ヶ原にはかわいいリュウキンカが咲いていた。景鶴山へはサザで向かう。山

頂からは平ヶ岳などを望むことができた。山の鼻に着くと教育ワンゲルの金子さんなど5人がいたのでびっくり。

5月26日 ◎

木(5:00) — (7:30) 至仏山頂(7:50) — 小至仏山頂(8:15) — (8:30) オヤマ田代(8:40) — (9:40) 笠ヶ岳(9:50) — (10:05) 片巣小屋(10:40) — (15:40) 温ノ小屋 — 水上

今日の予定コースは教育ワンゲルと同じなので以後同一行動をとった。至仏山頂ではまわり中ガスが巻いていて視界がきかず残念である。オヤマ田代からは他のパーティの姿は全然見られない。笠ヶ岳からすこし下ったところにある片巣小屋は外形をとどめているにすぎず使用は不可である。この先視界がきかないため道に迷って困った。そして道が見つかったときほっとした。この道の沢を渡ることが非常に多い。

### 白毛門・朝日岳・蓬峰

5月25日 ○ 根本、吉野、浅見、

桐生 — (2:46) — (3:50) 朝食 — (4:20) 出発 — (6:30) 1460mのピーク — (7:30) 白毛門山頂 — (9:30) 出発 — (10:45) 笠ヶ岳山頂 — (11:15) 出発 — (12:30) 朝日岳頂上 — (1:10) 昼食 — (2:07) 出発 — (2:16) 清水峠巻幾分岐 — (3:50) 清水峠 — (4:55) ヒツ小屋山 — (5:30) 蓬峰避難小屋

最初道をまちがって川の右岸を行ってしまった。橋を渡って左岸を進み銀行の山の家をすぎるとすぐ森林の中を急な登りにかかった。森林限界をすぎてからは谷川達峰の岩肌の美しさにしばしほう然として立ちどまった。マチガ沢のS字、一の倉沢、幽の沢、芝倉沢の雪渓とトマの耳、オキノ耳、一の倉、武能などのスカイラインは実にきれいだった。白毛門頂上からは富士山、八ヶ岳、武尊、至仏、燧などまわりの山は全部みえた。風のない暖い日射しの中で気持よくなって三人ともねてしまった。笠ヶ岳の下りの大きな雪渓でグリセードを楽しんだ。朝日頂上の下で昼食をとった。清水峠の避難小屋は泊れないから注意してほしい。その後はかなりのハイペースでとばして明るいうちに蓬峰の避難小屋についた。

5月26日 ◎

(9:45) 出発 — (11:40) 芝倉沢出合い — (11:50) 幽の沢 — (12:00) 一の倉沢出合い — (2:10) 土合 — (3:20) 土合発 ~~桐生~~

ガスがかかり雨も降ってきたので土合へ下ることにした。一の倉沢には沢登りで死亡した人たちの墓がたちならび墓場のようだった。挿げられたばかりの花が山への感傷をさそい又同時に恐怖心をも起させた。

谷川健峰

6月7日～9日

高橋、吉野、根本、滝野、

6月7日

桐生(17:59)——越後中里(20:45)——粗原分夜(22:10)

授業を終えあわてて列車にとびのる。まったくいそがしかった。越後中里で下り夜道を歩き旭風館落へ向う。湯沢の町のひかりがきれいであつた。分校では宿をおねがいするといやすく我々をとめてくれた。むしあつくてなかなかねむれず苦戦。

6月8日 ①

出発(5:45)——大源太山頂(9:15)——ヒッ小屋山(11:00)(12:05)——達峠(12:45)  
——武能岳(13:20)——茂倉岳(15:15)——避難小屋(15:25)

前夜ほどねむれず。校庭にとびだすと大源太が堂々とそびえていた。分校の先生にあいさつしうがすがしい気分で歩き出す。川を横ぎり急な尾根にとりつく。汗をたっぷりしほられた。やつとのことでヤスケ尾根に。気分よく尾根を歩き太源太山頂へ着く。残雪の多い巻機が雄大であった。大源太の下りでは苦戦する。ヒッ小屋まで行くのに1人だけが遅れる。体調がよくないらしい。山頂でしばらく休む。非常にあついためシャツ一枚となる。達峠からはぞろぞろ人に会合う。武能岳にはシヤクケゲが美しかった。茂倉の上りで2名バテル。また雲めきがおかしくなってきたため、あわてて茂倉避難小屋へむげこむ。雲がはげしくピッケルハ完が音をたてたそだ。小屋は雪にうずまけていて屋根だけが出ていた。雲の中であるためまったく寒かった。

6月9日 ①

出発(5:20)——八倉岳(5:45)——のぞき(5:55)——トマク耳(6:40)——大源太山  
頂(8:30)——万太郎(9:30)——エビス大黒の頭(12:05)——仙の窓山(13:20)——千葉  
山(14:30)——土樽(15:54)——桐生(21:40)

今日はハイペースで進む。八倉岳、オキの耳、トマク耳と休みもそこそこ遅らざるに走る。山頂へはぞくぞくと人が登ってゆく。西の小倉村近の雪けいで水をくわ。残雪が幾處かたる所は雪を心配なし。石がだんだん強くなりはじめた。大きな万太郎の登りでと名またまたたく間に。ついで仙の倉を見るとかなり下って来た登しなければならずげっきりする。吾等御飯を下る。おれの力が吉野、高橋両先生許してくれた。まだしごかれながらついていく。エビス大黒の頭は体力が限られ3時間くらいあった。ようやく仙の倉上。やれやれとござり。まだいかない草原ばかりがち。手がさず。平標の下りで仙の倉谷の大きさに感ぜられる。以後非常に気分の悪、身体の重みでつぶつぶかりばてしまふ。やっと次に下して試し伸びい。しかし解大山をすぎるとより元気がなく来る。あいそうになくなる。いささかあつてて足りずさすり娘からノンストップで走る。ここでは相手におくれおいてきぼりにばつてしまつた。たゞか主人のこゝでいるべきだった。リレーイングでも、体力の個人差を非常に感じた山行であった。

白毛門、朝日岳 宮川、大橋

6月8日 ①

桐生(22:25) —— (23:24) 高崎

6月9日 ① → ○ → ②

高崎(1:15) —— (3:20) 土合(3:45) —— (4:35) 1300地蔵(4:50) —— (5:30)  
1457P(5:40) —— (6:10) 白毛門(6:25) —— (7:05) 篠ヶ岳(7:50) —— (8:  
45) 朝日岳(9:20) —— (10:00) 清水峠(11:30) —— (12:05) ピッ小屋山(12:10) ——  
(12:50) 蓬峠(13:00) —— (15:00) 湯桧曽川の橋(14:00) —— 土合(16:53) —— (18:19)  
新前橋(18:21) —— (19:13) 桐生

高崎駅はすごい混み方である。半分が尾瀬、半分が谷川方面で一般の人は数えるくらいである。高崎で新前橋～高崎への往復 60円取られる。9時20分頃、急行と普通列車に乗るための2列が改札口より駅の外まで遠く繞く。この時、前に並ばないと乗れない場合がある。急行でさえ駅員が凶死に押し込む始末だ。ホームは歩けないほど混み方である。2両前に連結するのをかろうじて席が取れたが列車が25分も遅れる。混んだためか、事故のためかわからない。混んでいることと列車が来ないことだれもがいらだって前の方でケンカまで始まつたほどひどいものだった。土合着が35分も遅れ、出発が予定より50分も遅れてしまった。しかし白毛門への登りに入ると登山者は谷川方面に向うため静かになる。夜黒沢の橋を渡る時の足が痛いと言ひだす。本来なら安全を期しこの山行を中止すべきだったかもしれないが天気も良いので行くことにする。この時もう少し良く考へるべきであった。白毛門の登りは木の根など出て足場悪し。空気は湿気を含み一・倉等の沢がよく見えない。足の痛みは大したことないらしく笠、朝日まで足をのばす。笠はテヨが多い。朝日は幾つかのピークをこえていくとすぐ着く。山頂に雪田があり冷たい水がジャージャー。清水からは鉄砲尾根に抜けるつもりだったが雪渓をダメだと言われ蓬峠に向う。右手に大源太を見る。北東及び谷川後方より雰囲気が密達し始める。蓬峠より湯桧曽川ぞいを行く。15時頃幽ノ沢手前でサイレンを上方に聞く。この少し前カタズミ岩より幽ノ沢へ2人転落即死したことである。

尾瀬 8月27日～8月30日 松田、他1名

8月27日～28日 ●

太田(22:11) —— 沼田(4:00) —— 大清水(5:30) —— 三平峠(8:00) (8:30) —— 篠ヶ岳(12:00) —— 崇安峠(12:30) —— 見晴(14:50) 本

出発のときから台風10号の影響でかなりの雨、迷ったのだがこれ以上遅らせる事はできないので出発した。シーズンオフなのでひょっとしたら我々だけかと思っていたのだが、さすがに尾瀬の人気は高したものだ。20人位はいたようだ。大清水では我々が一番に出発、キスのせいか途中でぬかされ

たりしたが三平峠下からは我々のみとなり、燧ヶ岳に登る人はさすがにいなかった。頂上に行つても、苦労のかいなく何の見通しもきがず残念である。予定としては温泉小屋をTSとしたかつたのだが、キャンプ場がないので変更して見晴とする。このTS代は一人20円と安く、台風10号を心配してから「本日のところは休憩所で寝ても良い」ということなので、屋根つきの立派な所に寝ることができ風雨の心配はなくなった。

8月29日 ①→○→●

見晴(6:40) —— 三条の滝(8:30) —— 平滑の滝(9:05) — 見晴(10:05) —— 山の鼻(13:00) — 小

昨日とはうって変り非常に良い天気である。ゆっくりと下田代、赤田代を見物しながら三条の滝に向かう。(三条の滝と平滑の滝との間にTSとなるべき所がある)途中7-8人の人に合う。山の鼻に着く時間によつては、今日のうちに至仏山にピストンすることにして、山の鼻に向う。途中オゼコウホネ、ヒツジグサ、モクセンゴケ、コバキホウシ等の花を見る。ゆっくりと秋ののびのびとした原を楽しむ。山の鼻に着いた時には、だんだんと雲が出て来、至仏山に行っても、また昨日の燧と同じことになるのではないかと、至仏に行くのはとりやめ。山の鼻見本園をゆっくりと見物、見本園には説明看板つきで尾鈴の植物の実体がわかり尾鈴に産する、ほとんどの植物を集めてある。風雨を予想してテントをかかげりと張る、1張200円。

8月30日 ①→○

山の鼻(6:35) —— 至仏山(8:05) —— 山の鼻(9:50) —— (13:55) 富士見小屋(14:25)  
— 富士見下(15:55)(16:40) — 沼田—太田(16:00)

ラジオを聞けば台風も去り今日は秋晴れの良い天気とか。パッキングをしてから至仏山にピストンする、至仏中腹にあるというジョウシュウアズマギクは見つけことができなかつたが燧のときよりはながめがすばらしかつたのが何よりであった。下るころから雲があやしくなり出し、早いうちに登つてよがつたとつくづく思う。山の鼻から鳩待山荘へ、地図にある予定時刻よりもだいぶ早く着けたのでだめかと思っていたアヤメ平経由で帰ることにする。鳩待山荘と中の原の通り通称ハトマチ通りは道がめがけて大変である。ハトマチ通りなどと良さそうに書いてあるところにかぎってこんな悪い道なのがと認識を新たにする。富士見小屋に着いた時刻からすると3時のバスにはのれないで、最終バスに間にあえばとゆっくり富士見下に向う。バスが来ていたので乗ろうとすると「もう少し待ってくれ」と運転手が言いつたの16:30になつてもバスは出ない。何となれば最終バスだから乗り遅れないようになると10分位は待つのだそうです。

苗場山—和山—野反湖

10月10日～10月15日 小沢達樹、荒藤謙

10月10日(木) ②→●→○→●

新前橋(07:12) → (08:55) 湯沢(09:20) → (10:06) 被川(10:08) → (11:10) 和田小屋(11:15)  
— (12:45) 下の芝(12:45) — (13:35) 中の芝(13:45) → (13:50) 小松原分岐(14:05) — (14:  
20) 神楽が峰(14:20) — (14:35) 雪清水(14:35) → (15:15) 台上(15:15) — (15:30) 遊仙閣  
前日の雨も上がって、これからだんだん晴れてくるだろうと、急いで渋谷を出発。水上  
に近くに従って列車の上に雲が多くなり、国境の長いトネルを抜けると、ひどい雨であった。汽  
車の窓も割れようと吹きつける雨の中を意気消沈して湯沢駅に下り立つのみじめさ。しかし幸か不  
幸か被川にバスが着くころには雨もあがり再び気を取りなして歩み始める。このあたりまではや  
紅葉には遙くここへんから下の芝のちょっと下あたりまでが紅葉が見ごろ。和田小屋で少く休んで  
いるとまた雨がほつりほつり。ここで降られたら動こうなんていう気がしなくなるからと大降りにな  
らない中に出発。和田小屋を出て10分ほどかかり雨となった。12:00に飯、傘をさして食う飯もまたあ  
つかなものだ。下の芝をすき、じろんこ道の中の芝、上の芝を過ぎると小松原分岐だ。ここでほっと一  
息いれる。上の芝ではかなり強い西風で歩行がや、困難であった。雪清水を過ぎるとさらに風は強ま  
り、一部では吹きとばされそなところもあった。15:15にやっと山頂につく。遊仙閣は避難小屋にな  
っており。ホ、フトン、プロパン、ナベ、ヤカン等も置いてある。私達はその先ののとひう小屋が  
開いていたのでそこへ泊めてもらった。この小屋はもうしまっていたのであったが今日だけ特別に開  
けたとのこと。別に私達のために開けたのではなく、国鉄山岳部で明日から登山するので、その山頂本  
部のために開けたとのことだった。

10月11日(金) ○(降雪あり)

午前3時頃から寒くて眠れない。小屋の中でスポンチのマットレスを敷き毛布を着てシュラフに入り  
さらに毛布を3枚かけていてこの寒さである。テントの中であつたら一体どうなったことだろう。今  
朝は小屋の中でも-3°C(未補正)であったという。足元のバケツの中の氷はかなり厚かった。11時  
頃からそろそろとものすごい人間の数となり、昨夜4~5cm程積もった雪は低い気温のため全然とけ  
ていながら道だけはとろんとろんになった。午後遊仙閣へ移る。14時半頃登山者が2人来た。今夜泊  
まるのかと思ったら今日中に小赤沢へ下ることであった。ココアを入れてやったら帰りにバター  
ココナツソーツとハイニッカのポケットビンを一本おいてくれた。今夜は教育大のワングルが  
3人、単独行の人が1人そして私達の計5人であった。教育大の人達は野反湖から白砂まで行ったが  
ブッシュかひどいので引き返し和山へ出て来たという。それで我々も予定(明日、白砂八何かう)を  
変更し、天気が回復して景色が見られるまで忍んですることにした。終日キリ。

10月12日(土) ①

小屋(11:10) — (11:35) 赤倉分岐(11:35) — (12:00) 和山分岐(12:40) — (14:10) 平太郎尾根  
上部(14:10) — (15:10) 平太郎尾根下部(15:20) — (15:40) 和山・上の原分岐(15:40) — (17:  
00) 和山温泉

朝まだ曇っていたが眺望はよく、横手山、岩管山、谷川連峰、魚沼三山、日光連山とかなり遠くまで見えた。8時頃から陽が出てまるで3月を思わせるような雪どけとなった。11時までほんの少しだと日光を見えた。あいにくながら景色を楽しんだ後和山へ向かって出発。台上は一面に水びたしでどこにもテントを張れるような所は見られない。のんびり台上を楽しみ、西のはすれで昼食。ここからは日本海側の海岸線らしきものも見られた。和山分岐からは細い踏み跡に従って沢に入る。かなりゆるい沢を1時間と20分程下ると針金その他のもので通行止めの標識があり、平太郎尾根へ行くように矢印がある。そこから10分程でかなり急な平太郎尾根の上部に出る。ここからヒザをガクガクさせながら1時間も下ると沢に出る。この沢を渡るとハゲ山の道となる。そこを20分程行と和山、上の原分岐に出る。ここを左に行くと約1分程で和山温泉へ着く。和山、仁成館は満員だったのと元へ戻って民宿とした。一泊二食700円。

10月13日(日) ○

和山(06:10) — (07:05) 切明発電所入口 (07:15) — (08:10) 第1横坑(08:15) — (09:30) 渋沢ダム(09:40) — (13:40) 地蔵峠(13:40) — (14:30) 野反湖(花数温泉付近) — 長の原  
——新前橋)

途中で買った週刊誌で13時30分に野反湖発の国鉄バスがあるという記事を見たのでそれに乗るべく宿を出た。切明発電所の少し先に吊り橋があり、それを渡るとかなりきつい登りとなる。20~30分登ると道は平らになり、渋沢ダムまでほとんど高低差のない人工のハイウェイとなる。ここで少々スピードを出しすぎ、ダムを過ぎてからの登りで斎藤はエンジンが焼けついて度々ダウンした。和山の宿でおやじがここでの登りがきついとさかんにいっていたが、まさかこれほどとは思わなかった。ダムからは全部登りで下りが全然ないと、ダムの手前で飛ばしすぎるためにアコを出す人も多いのではないかと思う。野反湖へは14時半頃着き、当然のこととしてバスには乗れなかった。このコースはダムからの上り以外は所々に水がある。野反湖で斎藤は小沢と別れて小型トラックで花数温泉へ向かった。花数へはバスが出た直後に着いたので、次の発車までバス停の前の旅館で温泉につかって後コタツにあたらせてもらった。料金20円也。

10月14日 ○→①

木(7:00) — (7:30) 地蔵峠(7:35) — (8:30) 堂岩山 — (9:10) 白砂山(9:45) — (10:25)  
木 — 堂岩山 — (11:25) 地蔵峠(12:00) — (12:30) 木

シーズンオフの野反湖は人影は全くなく時折発電所の車が来るだけであった。管理人の厚意によってバンガローに泊めてもらおう。夜外へ出て見ると満天の星空であった。朝方はかなり冷えてラジウスに火をつけた。地蔵峠までは昨日の道をモドる。昨日写真を撮りたいと思っていた所で写真を撮る。あまり良くない道を朝靄にぬれながら堂岩山へ登る。野反湖が眼下に、紅葉に燃えるようとても美しい。堂岩山から高山的気分のするやせ尾根を快適に登る。空は青く、新雪は白く、木々は紅く、白砂山はその山頂を青空に突き上げていた。白砂から苗場への道は尾根上にある程度の所までは踏み跡が

見える。国境稜線上にも稻荷山の方へ踏み跡が続いていた。天候かくアレでうなぎで急いで山頂を後にする。

10月15日 (火) ☀→①

→(8:15) —>(12:25) 花敷温泉口 (13:36) — 長野原

朝日を覚ますと雪が降っている。志賀高原への縦走はあきらめる。野反湖からすこし下るとガスがきて青空がのぞく。花敷温泉への道から見た野反湖の稜線から流れ出る白い雲がまさに滝のようにになって向かってくる。青、紅、白の原色のコントラストはこの世のものにも思われない。

尾瀬 滝野、根本

11月1日 ○

桐生 (12:42) — 水上 (15:00) — 湯ノ小屋温泉 (16:45) — 分校 (17:00)

ダムを左手に見ながら、バスにゆられて湯ノ小屋に着いた。途中紅葉がとてもきれいだった。橋を渡りしばらく歩く。分校前の川原をテント場とする。

11月2日 ○

→(6:25) — 咲倉沢登山口 (6:45) — 尾根 (6:15) — 口ボット尾根分岐 — ホタル池 (13:00) — 片藤沼 (13:20)

20分程で咲倉沢登山口にある。しばらく沢にそって歩く。尾根に出ると前方に笠岳が三角形にそびえている。しがしすぐに尾根を巻きはじめ、先のあたりでいよいよ悪いコースを歩く。道が霜で白くなっていた。予定よりもたぶん遅れみてくされぬじめに、やむなくホタル池に着く。いくつか湿地をすぎると片藤沼である。日没までには山の鼻には着きそら牛がいる。今日はここで泊まることに決意が見える。時間があるので目の前のゴッポリした生垣をヒストンする。向こうは雪がすごい。片藤小屋はすっかりおれでいて、かいわの矢印が、小屋の中にテントを立てる。

11月3日 ○

本 (6:30) — 小笠 (6:35) — ライナ入門 (6:45) — 小笠湖 (7:20) — (7:50)

全峰 (8:20) — 山・森 (8:45) — (10:15) — 魁宮小屋 (11:30) — 富士見小屋 (13:40)

— (内:35) 富士見下 (14:15) — 越沼 (14:45) — 桐生 (15:50)

3時半起床。昨日の遅れ気味のリマインダーに正直。並地はチキンカチンに乗っていた。小笠にかかるころ目めめ。オレマ次田代より山全体が笠岳と思ひヒッチを上げて止る。右に原や燧、左に上越の山を見ながら至仮山頂。翌一ヶ月で3回の展望。まさに絶景かな絶景かなてある。はるかに、真白の富士と北アルプスも見える。残念だが30分ほどして下る。下り始めたころ徐々に人が登ってきた。

道は凍りついでいて非常に苦戦する。すべることむきりむき。山の鼻よりほとんど人のいない原を養元小屋へ向う。時間を気にしながらハイペースを歩く。富士見はまだにはすっかりバテる。おかげでバスには間に合ったが、非常にいまがしい行程であった。

谷川岳、ヒツゴウ沢 西口

桐生(21:32) → (7:05) 水上(7:30) → (7:45) 谷川温泉(7:45) — (8:30) 牛首(8:40)  
— (9:05) 二俣(9:20) — (9:50) F5あたり(10:05) — (11:20) F17の滝下  
(11:30) — (14:55) 国境稜線(トマと中ゴー尾根頭のコル)(15:00) — (15:10)  
肩の小屋(15:10) — (15:15) トマの耳(15:40) — (16:10) ガンゴウ新道分岐(16:10)  
— (17:08) 警備センター(18:00) → 水上(19:03) → (20:32) 桐生

西上州(県境紙芝)碓氷峠 — 内山峠まで

堀江

2月9日

桐生(13:00) — (16:18) 軽井沢(16:30) — (16:50) 碓氷峠

3~4時間の授業に出席して午後から出発した。高崎での待ち時間長く、今日の行程が気にかかる。高崎発 15:04 の柏崎行各駅停車に乗って軽井沢に 16:18 着く。この列車は当駅で 35 分待つ。身じたくをし、文献を買って駅を 16:30 に出発。左に折れて舗装された国道を進む。車の通りは、あまり頻繁でない。斜め後には夕日を受けた雪の浅間山が、うす赤く輝いていた。碓氷峠には 16:50 に着く。すぐに右の山に入る。道は狭いが、所々に石柱が埋めてあって瞭然としている。

積雪は少ないと、氷りついた雪の上に枯葉がかぶさっていて一見何でもない様な道に見えるが、すべり易いので注意を要した。約 20 分程歩いてテントサイドを見つけた。山は背の高い落葉樹の林である。氷りついていて金バグがささらないので、4 人用のテントでもあることだし、周りの木に縛りつけて張る。枯葉があるので火事のことを心配する。8 時に眠る。

2月 10 日 ①

碓氷峠(7:20) — 矢ヶ崎山(8:00) — (9:30) 入山峠(9:40) — (14:50) 馬越 — (16:40) 島境

朝 4:00 に起きて 7:20 出発。晴れ、朝焼が美しい。矢ヶ崎山に近くなるにつれて雪が多くなる。

最後の急登の所は膝の下位まで入ってしまい、道も細く、72 cm のキスリングでは、かき分けて行かなければならなかった。8:00 に着き、二本から先の道を地図を見て考える。群馬県側は急に落ちているので、どこが県境かは、すぐにわかった。ここからは囲りが良く見えた。後に浅間山、丸い形の赤城、榛名、妙義、入ヶ岳。風は浅間の方から吹いていた。矢ヶ崎山の南はかなり急で、道は踏跡らしきものも全くない。少しゆくと、踏跡らしきものがあり、新しく切り開かれた所もあったが、これは少な、距離であった。入山峠までは、こんな風にして繞いているが、県境からはそれるようなことはない。雪は平らな所と北面にあるだけ、それも、くるぶし位まであった。入山峠には 9:30 に着き、9:40 に出発した。権員は二倍位あるだろう。砂と砂利の新しい道であった。入山峠から最初のピークまでは、細いがはっきりした道が認められた。か、それから和美峠の手前の峠までは、踏跡が全く認められぬ所も多かった。この峠が曲者で、はじめは和美峠と思い込んでしまった。最近出来たらししい様子ではあったが、軽井沢を見下す大きな駐車場らしきものがあり、権員も、入山峠や和美峠の二倍位はあつたからである。此辺には 12:20 に着いたが、予定としては、ここまであつたので、大分速いものだと感じていたら、どうも変だし、明日の予定は本日の二倍はあるので、もう少しかせごうと思い立ち、12:50 に降りて反対側の雪の斜面を直登する。ここ左右に曲り、少し行くと全く道は見えなくなり、から松の林で囲りが全く見えないので、木に登って眺める。後を向くと 通って来た所が良く見える。すると、地図の通りに、ここを南に下ればよいことがわかった。下りた所からは、はっきりとした踏跡があり、高木がしだいに減って、草原になって和美峠に

下っていた。此処から和美峠からの道が、真正面に見えるのであるが、全くの北面となり、約165mの雪の直登路を登る気がしなくなり、（何故かと書えば、今日の内にどうしても次の峠まで行くことをしていたからである）平地をまわって行くことにした。14:20に出発して車道を押立山を左手に見て進む、さすがに平らな道を歩くのは早いもので、馬越が14:50、押立山の西をまわって県境へ出ようとしたが、和美峠から押立山の角を通る大きな車道が出来ていたので、これで行こうと歩き出したら、道が地球の中に入っているのであった。戻るのも嫌だったので、そのまま直進んでしまった。道などは全くない。すると、草原に出たので、上を見るとなだらかな様子なので、この様子なら県境を歩いてもたいして苦しくはないだろうと考へて、山を登り始める。山の形はどこまでも、まるく、まるく、まるくて、コロコロしているのである。時間は遅くなるし、天気の様子も悪くなり、地図を見ると、行って戻って来る様子なので、右手に見える舗装道路へ直進に降りてしまった。そこを200m歩いた所が県境であった、道の両側には、粗末な囲りを石でかこった家が多くあった。時に16:40。グリーンタウン計画地という看板から左手に入って下ってTSとした。月の明かりと水銀灯の明かりが輝いていた。車は時々うるさい音を立てて通り過ぎ、何處かで、ラジオスピーカーが音楽を流しているのが聞こえるのであった。

2月11日

(7:20) — (10:00) 八風 — (10:35) 矢川峠 — (11:00) 志賀牧場 — (13:25) 物見山 — (14:40) 物見山見晴岩 — (16:30) 内山峠 — (18:30) 下ニ田南牧野深山 = (19:00)  
富岡

7:20 出発。八風までは全く県境に沿って行くと、赤や青のベンキがあり、広い道があり、何も見えなくても誤るようなことはない。八風には10:00に着く。最後の急登は雪が一歩ごとに膝まで入り、非常に苦戦した。細い道なので、両側に立つ細い高い木に、キズがつかれるし、うつかりすると滑るので、10m位登るともう休んでしまうのであった。するとたちまち、あたりは暗くなり、雪がはげしく北西から吹きつけて来た。さっきまでは、とてもいい天気だったのに、八風から物見山の方へ下る道は、県境のそばを通っているが、その通りではないので、たいへん楽な道なのである。これを境通りに通った日にはその苦労は、はかり知れないと感じたものである。それで矢川峠には10:35 すでに雪は止んでいた。志賀牧場には11:00に着き、昼食をとる。なだらかな南西を向いた斜面なので雪はなく、群馬県側で急に落ちていた。ここから物見山まではずっと雪の道であるが、はっきりしているし、物見山の最後の登りに、雪が深くある他は、くつの辺までしかなかった。物見山には、やはり反射板があり、囲りは良く見て、その名の通りであった。ここには13:25に着き、物見山見晴岩に14:40。境となっているあたりの小道を降りる。あたりは番坂峠からずっと牧場になっていて、草地のなだらかな様子をしている。熊倉峠に、こちらからの道は、はっきりしているが、内山峠の側は、はっきりしていないので、誤り易いようだ。傾斜も急である。最後になって国道に出る所で、ガレているから回り道をする。内山峠には16:30に着き、送電線に沿って

ある道を降りる。18:30 下ニ田角牧野深山あたりで車に乗せてもらう。富岡に19:00に着きそこから上信電鉄の最終で帰る。全般的に南面には、雪がなく、1300m級の北の面には、膝位までは軽くうまる様であった。木は細いが、4-5m位のが密生している。所々にはげている感じの草地があった。

戸隠連峰（西岳、高妻山、乙妻山） 小林、高橋

（5月3日～5月5日）

5月3日 ①→②

足利（6:48）➡（10:41）長野（11:13）➡（12:30）奥社——（15:00）—不動避難小屋企連休も後半、戸隠牧場付近は人、車が多い。路傍の湿地には水芭蕉がきれいな花を咲かせている。2泊3日の計画にしては、少々荷が重い。高度が上るにつれ、雪の量が増し、最後の急斜もすべりながらも、どうにか避難小屋にたどりつく。小屋は連休のためか定員（15人）に達している。黒姫山が眼前にかすむ。

5月4日 ●→②

—不動避難小屋（9:30）—（11:00）入方睨み—（12:40）西岳—（14:15）入方睨み—（15:15）—不動避難小屋企

3日の晩から降り始めた雨が、風を伴いものすごい。予定時刻に起床してはみたものの、高妻山、乙妻山方面は断念。天候の回復を待ち夕時30分、明日の予定となっていた八方睨み、西岳方面へ向けて発つ。残雪はかなり豊富。雨はどうにか止んだものの風強し。濃霧もひどい。しかし10時頃になってサッとガスが切れ、戸隠高原が見降ろせる。太陽も頬をキラリとのぞかせる。長野方面、東方には飯縄、黒姫山がドッカリと腰をすえている。南方、西方には北アルプス、日本海まで遠く見渡せる。西岳を折りかえし、帰路につく頃、今降りてきたばかりの西岳側面に、小ナダレ。我々はしばし見られる。そのうちいつの間にか発生した雷が鳴ります。我々はあわてる。飯縄上空にはものすごい雷雲、かなりのハイペースで避難小屋へ危うくセーフ。我々はさすがにトレーニング不足のせいかバテる。日頃のトレーニングの重要さを痛感する。

5月5日 ①→①

避難小屋（6:15）—（6:45）五地蔵岳—（8:00）高妻山—（8:50）乙妻山—（9:35）吾妻山—（11:10）五地蔵岳—（11:35）避難小屋—（13:30）戸隠牧場—奥社（15:00）➡長野（16:45）➡（21:10）足利

朝5時起床。小屋の窓から顔を出すと快晴、吾妻山の雪が朝日で光ってみえる。我々はこのすばらしい天気に胸おどらせ。6時15分発、道は前日のコースよりもはるかに雪量が多く、展望がきく。地氷が出ているのは、小屋から五地蔵までで、あとは雪の上の登攀である。高妻山への登り斜面は30度から40度はあるかと思われる。一步一步登る。このからガスが発生、我々の期待を裏切る。頂

上へ立ってはみたものの、時々ガスの切れ間から、西岳そのうしろの北アルプス、また上右にやはり  
ガスのかかった黒姫山が姿をチラリチラリと見せるだけだ、どうにもしようがない。

## 武尊山

6月8日～9日 上山、渡辺、鳥居

### 6月8日 ①

桐生(12:23) → (14:45) 水上(15:00) → (15:45) 久保(15:55) → (16:45) 上の原  
山の家(17:00) → (5:20) ←

スキー合宿のときには雪に手こずりながら、フウフウいって登った山の家への道をかくも雪がないと  
楽なのかと思いながら行く。途中はり紙があるのでみると、登山料を取ること、近くにいた人に  
たずねた所、武尊に行く人からは、お金をもらうのだが、雨が降りそうなのでいいということだった。  
まるで闇所を通るみたいだ。山の家では、部員の合宿のときの忘れ物をもらい、ちょっと上にいつた  
所をT.Sとする。夕食後、上の原高原を散歩。月が実に美しかった。

### 6月9日 ①

木(5:30) → 避難小屋(7:30) → (9:20) 武尊下(3:50) → (9:20) 武尊山(9:  
30) → (11:10) 前武尊山(12:00) → (13:45) オリンピアスキーランド(14:00) → (14:45)  
バス停(16:30) → 沼田

林道が終り、登山道に入るとようやく残雪が時々みられるようになる。避難小屋あたりの尾根にある  
雪はとてもたべる気はないほどよごれているが、藤原武尊の下あたりの雪はとてもうまい、ここで  
粉末のミルクとミックスしてたべ、簡単な昼食をとる。藤原武尊からは、至仏、笠、燧、また谷川方  
向の雪渓がすばらしい。ここからは、雪の上をすべったり、鎖につかまつたりしながら前武尊に着く。  
ここまで来るのは時々尾根上に出る。その時の展望もまた抜群である。前武尊は時間もあるのでミルク  
を沸し、ぬっくりとパンをたべる。前武尊からは旭下屋に下りるつもりであったが、かなり危険らしい  
ので、スキーランドに下りることにする。ここ下りは急であり、これを登るのをあつたら、十分に充実  
出来るであろう。スキーランドからかなり奥まで道路を作っているが、夏場はバスではなく、しかたなく、  
自家用車の行きかほこりの道を フテクサ・氣味でバス停に向う。しかし、それにしても武尊の展  
望はよく、また何より水がうまかった。

## 浅間山

7月10日 ① 根本、遠野、浅見

桐生(22:25) → (3:25) 中軽井沢 → (4:25) 観音橋 → (5:50) 峰の茶屋(6:35)  
→ (3:45) 頂上のかけ → (10:00) 浅間山頂(11:15) → (12:25) つまごい →  
(1:00) 仙人岳 → (1:20) 蛇骨岳 → (2:00) 黒斑山頂(2:25) → (2:30) トマの頭

— (3:35) 車坂峠 (4:16) — 小沢 \*\*\* 撮生

軽井沢は本当に奇妙な形の別荘ばかりで、車窓で見ても人目離しないよ。立りの峰半前に浅間が後で接觸壁しが見え、ややく縦取りも見えた。火口が吹ききたしている煙のあとから時々見える。火口の茶色っぽい色が不気味だ。浅間山は登っていると高く感じないが下ろにしたがって付近の山との高さを感する。火口の分歧を左に登るのをまかがって右に降りてしまい途中から裏庭の屋根にとらついた。高さが変わるたびに変る浅野の山容もすばらしかった。

### 北海道旅行

（7月30日～8月19日） 小沢達村、青森県議

7月30日（火） ◎

上野 (16:00) \*\*\*

臨時列車第一列車に乗車、臨時列車のためか、比較的車内はすいていた。水戸から青森までは私憲2人で1ボックスを占めることができ、座席指定券の買えなかったことをありがたく思った。

7月31日（水） ◎

— (05:35) 青森 (05:50) 乗船 → (06:50) 出航 → (07:30) (10:36) 函館 (11:25) — (16:42) 札幌 (20:50) — \*\*\*

接客室もあまり混まず快適な船旅だった。函館で陸空へは出ずて列車に乗る。船で下りる時早目に並んだので案内席をとれた。札幌市内見学、時計塔、大通り公園、北洋などを見た。

8月1日（木） ◎

— (06:35) 種内 (08:00) — (08:50) 納寒布岬 (09:10) — (10:40) 種内公園 — 種内駅 (11:50) — (12:33) 拔海 (13:20) リバーフロント (15:15) 篠泊 — 社場町 (16:

日本最北端の宗谷岬まで行きたかったが、そこへ行くには時間的に観光バスに乗るより他に方法がなかった。それで宗谷岬を止めて納寒布岬へ行った。海岸沿いの舗装道路を歩いて行くと、10分足らずで岬へ着く。この付近の家は低い塀を待ち、外見も見る所らしく最高での町といふ感じが強い。低く地に伏したような家と家の間に小石をしさついた広場があり漁網を乾したり、屋根を干したりしている。ここでは漁業組合の建物から出て来た黒い方の人に身を包んだ一面の婦人達の姿が印象的だった。種内公園を散歩、公園からはけハリソンが置かれるとのことであったが、ついにハガスってしまって見ることはできなかった。バスで抜海まで行き抜海から利尻まで船で渡る。抜海 — 篠泊は1、5時間で行けるところであるが抜海港は小さいためちょっと前方が淀くなってしまって使えなくなり種内港の方へ廻ることである。

8月2日（金） ◎ → ○ → ○

Y・H (1日 23:25) — (23:44) 1合目 (02:30) 7合目 (02:55) — (03:30) 利尻山頂 — (07:05) 7合目 (07:10) — (08:50) 2合目 (09:15) — (02:05) 1合目

登泊港(10:55)→~~○~~→(11:55)香深港

夜行2晩の後の夜間登山は非常にきびしい。トランニン不足もあり荷物は途中でdownし小沢より1時間近く遅れて山頂に到着。7合目には小屋がありここからでも御来迎が挂める。9合目まではハイマツがあり、そこから山頂にかけての左斜面にはイワキキョウ、キンバイ等の高山植物が見られる。10:55分の船で礼文島へ渡った。桃岩荘Y・Hのトラックに荷物を運んでもらい、桃岩を見学して、ユースホステルへ向った。桃岩は2000m未満の高さしかないが、300m程以上の高山植物が自生しているという。夏の一一番暑いときでも12~13℃位しか気温が上がりがないというから寒くてしかたなかった。レブンウスユキソウ、レデンソウ、ヤマニンドケ、その他2,3の花を監視員の方に教えていただいた。ユースホステル桃岩荘は桃岩のすぐ下にあり前は海岸になっていて、水と草と岩の混和が非常にすばらしい。又、付近の海辺は石からなり水がよく澄んでいる。朝になると多くの小舟が浮か伏長いヤスを用いてウニやアワビを取っている。

3月3日(土) ○→●→○

Y・H(08:10) — 元地(08:45) → (09:00) 香深(09:10) → (09:40) 内路(09:50)  
— (11:15) 礼文岳山麓(11:30) — (12:40) 内路(13:42) → (14:10) 香深港(14:30)

礼文岳山麓(14:15) 桃内 — 登山 Y・H

礼文岳は日本最北の山である。高さは473mごくさな、小疊がない山である。登り始めるところから雨が降り出した。礼文岳は山頂付近でもハイマツがある。内路からのコースではお花畠はない。キトウスからのコースをとればお花畠の近くを通るのではないかと思う。もう少し下り終ると雨が強く降り出した。登山口付近にある内路校で内宿りをさせていただいた。先生がストーブを点いて下さってぬれたズボンを乾かすことことができた。なお内路からの登山口は校庭の片すみにあり、傘を付けないと行き過ぎてしまうから注意を要する。

3月4日(日) ①

石川(05:15) — 桃内駅(06:25) → (11:03) 赤川駅(13:51) → (15:01) 富良野(16:14) → (16:29) 山部(16:29) — (17:10) 山部芦別荘 Y・H

山部ユースは芦別駅から3km程行った芦別岳の登山口にある。このユースは小室に引く水を溢める温泉池のほとりにある。この池が冷房装置の役をして大変涼しいユースホステルとなっている。ホステラーは私達以外は高校生が1人だけであった。この少し奥には苗穂キャンプ場がある。

3月5日(月) ①

Y・H(05:03) — (06:13) 見晴台 — (06:33) 猿谷(06:45) — (07:45) 半面山を朝食 (07:30) — (08:00) 雲峰山(08:45) — (08:30) 芦別岳(09:30) — (09:53) 雲峰山(10:05) — (10:30) 半面山(10:33) — (10:52) 猿谷(11:00) — (11:15) 見晴台(11:30) — (12:10) Y・H(12:45) — (13:15) 山部(13:45) → (14:10) 富良野(15:20) → 芦別(?) → (?) 白金温泉

新道は少し急なところとほぼ平らなところが交互に並んでいてそれから半面山まで行く。本当にいい道だ。半面山に近くなるとハイマツが現れて来る。半面山を下るもち下ったところに熊の沼がある。沼の水は飲んで飲めないことないだろうか見るからにさたなそうな水でとうてい飲むなという気はおこらない。ここからは座席の中を通じて、一眼が通るといいだのはなんどこりではないかと思ひながら歓喜と足を速める。足元にはウサギ、クマ、マメ、ト草が花を競っている。半面山からちょうど30分登ると雲峰山に着く。雲峰山からは芦別山頂の岩がすぐ近くに見える。ここで一休みした後で25分位登ると山頂だ。頂上付近にも高山植物の群落がいくつもある。山頂からは美瑛岳、十勝岳、富良野盆地が見られる。特徴的のヤラバシユーズは非常に花が長くマメの上にまたマメが咲きてしまつて、下山に一苦労した。今日中に白金温泉へ行こうと、山部からバスで富良野まで出て汽車に乗った。美瑛から国鉄バスで未舗装の道路を約1時間行くと白金温泉に着く。

8月6日(火) ①

Y.H (05:00) — (05:50) 望岳台 (06:00) — (06:40) 美瑛・十勝岳分歧 (07:00) — (07:55) ボンビ川 (08:25) — (09:30) 美瑛岳 (10:25) — (12:05) 十勝岳 (12:30) — (14:20) 望岳台 (14:50) — (15:10) 白金温泉 (15:20) — (16:10) 美瑛駅 (16:12) ~~— (16:55) 旭川駅、駅泊~~

望岳台まではバス道を抜いてゆく。最初からハイビートをつけてと音の疲れとか少しマヌケな意味、十勝・美瑛分歧を過ぎた辺りからイワカクロ等の花が咲く。ボンビ川の水は硫黄分を含み、ややすっぱいが飲むことができる。谷から美瑛岳はかなりさびしき登りが続く。山頂付近には高山植物もありシマリスもいる。美瑛岳を下って銀岳の登り口にかかると噴出岩のさらざらの道に変る。この溶岩の砂り道で純正中の女子パーティー2つを抜いた。銀岳、十勝岳はただ溶岩があるのみで面白味がない。やはりそこそこ高山植物が咲き、リスのナヨナヨ口にする出の方が火山よりも美しい。十勝岳から見た富良野岳は美しい。それに反し美瑛岳は十勝岳から見たのでは全然の大きな感じがない。

8月7日(水) ② → ③ → ④ → ①

旭川 (08:40) — (10:20) 駒別 (11:00) ~~— (11:30) 天女ヶ原 (11:20)~~ — (12:05) 姿見の池 (12:35) — (13:35) 旭岳 (14:20) — (15:00) 間宮島 (15:15) — (16:30) 黒岳石室 本

駒別一天女が原間をロープウェイを使用したが、歩いて登っても大して時間的に違わなかったようだ。その中に姿見の池まで今工事中のロープウェイが通るがどうなると旭岳登山には時間的にずっと楽にならんだろう。しかし大自然が売り物の大雪山もまたその自然を大きく破壊は防止できないだろう。そして将来、尾瀬の木に破壊されてしまうのではないかと思われてならない。姿見の池は成程上がの眺めらと手鏡のよしな形をしており、上に沈って霧が出て来て旭岳の山頂に着く

ころは 10m先も見えなくなっていた。道は両端に石が並べてあって迷う心配はないが、何とも味のない道だ。旭岳の急な道を下ると雪ヶ原に出る、この下は平らになっており、幕営できる。既に十、五張りのテントが見られた。間宮岳、北鎮岳と霧の中を黙々と歩いて黒岳の石室まで行く。石室のキャンプサイトのちょっと下ったところからは下の灯が見える。石室のまわりもまた高山植物が多い。

### 8月8日(木) ◎—●

T.S (09:30) — (09:40) 黒岳 (09:40) — (11:00) ロープウェイ駅 — (11:15) ~~西~~  
(11:20) } 層雲峠 (17:00) — (?) 上川  
(11:45) }

朝食後8時半ごろまで付近を散歩。雨が降り出しそうな天気(札幌では既に降っていた。)ので早目に出発することにし、テントをたたんでパッキングする。パッキングが終ると同時に降雨。風向は南西でやや強い風が吹いている。黒岳を越すと風は無くなつた。黒岳の層雲峠側は黒土そ草も1m近く伸びている。ここは土は濡れると非常にすべりやすく登山靴でも気を付けないとシリモチ立つ。ロープウェイは5合目まで来ており 15分間隔で運転、所要時間は約5分。足で下っても 45分ぐらいで下れる。ロープウェイの駅で昼食。午後は大畠までバスで行き、帰りは歩いて帰ってくる。ここには1時間 130円也の貸し自転車があつて、自転車に乗ってくる女性が多いので歩いていて楽しいバスで上川へ出て、01時10分の夜行に乗つた。

### 8月9日(金) ●→◎

上川 (01:10) — (06:40) 網走 (08:10) — (08:32) 那須内 (10:01) — (10:33) 網走  
(12:10) — (14:12) 北見相生 (15:15) — (15:45) 阿寒湖  
雨のために天都山には行かず、能取湖へ行ってみた。能取湖から帰つて網走刑務所を見に行く。駅から左へ歩いて約30分程かかる。タクシーの相乗りで乗る人が多い。北見相生はごく小さい町で阿寒湖行きのバスは駅前まで入ってくれない。

### 8月10日(土) ◎

斎藤は足のマメを治すためにテントキーパーとして残つた。9時ごろから湖畔を散歩したが、途中でマムシらしき虫ににらまれて散歩を中止する。帰途 シャボン、カミソリ等を貰い求めで、のんびり風呂につかつゝ後 ブラブラみやげもの屋を全部のぞいてまわつた。小沢は霧の中を一人で旭岳に登つた。

### 8月11日(日) ◎

阿寒 (09:25) — (10:45) 弟子屈 (12:15) — (12:40) 川湯 (13:16) — (13:45) 摩周湖 (14:25) — (15:55) 川湯 (16:44) — (17:55) 斜里 (18:00) — (19:15) ウトロ  
テントその他余分なものをチッキで送るために弟子屈を下り、大分時間を換した。川湯からバスで摩周湖まで往復。川湯で1時間以上時間があったので、硫黄山まで散歩。  
ウトロでは Y.H は満員でバス停の近くの大安寺に泊つた。夕食十弁当2食分で 800円也。

5月12日(月) ◎—●—◎

ウトロ(06:45) — (07:10) 岩尾別(07:10) — (07:50) 岩尾別温泉(08:00) — (09:45) 銀冷水(10:00) — (10:30) ラウス平(10:35) — (11:55) ラウス山頂(11:45) — (12:05) ラウス平(13:00) — (16:00) ラウス温泉

岩尾別でバスを下りて、ここにごく最近ユースホステルができるとも知った。寝台席に登らうとするホステラーはここに泊まると便利と思う。岩尾別からの登山者は私達を入れて計5人で岩尾別温泉までは一緒にいく。岩尾別から温泉まではバス道を約40分歩かねばならない。温泉には、本館が一軒あり前には広い駐車場まである。旅館の裏手にTentも2つもある。一番裏に登山口があつて、そこの小屋に入林者名簿がおいてある。こちら側の道は非常に上手につけてあってほとんど疲れを感じない。ラウス平の少し下まで行ける。ラウス平までは2ヶ所水場があり、どちらも2張りぐらいならテントをはれる。ラウス平の直下は約10分ぐらいさつと登りになっている。平はハイマツにおわれており、ラウス温泉側に少し行くと雪ケイが残っていて水は得られる。平から見上げたラウス岳山頂はガタガタと岩を積み重ねたという感じがする。平から約30分を山頂に着く。山頂からは斜黒、大雪などが展望できるが、残念なことに雲海のために海岸線は全く見ることができなかつた。晴れていたらどんなにすばらしい眺望が得られるであろうか。ここでもシマリスを見かけた。ラウス平で昼食。平から約5分 ラウス温泉の方へ行くとお花畠がありエゾコザクラ、ウメバチソウなど、5、6種類の花が咲いていた。道はお花畠へ入りながら豊かな緑を下して、それがこの況け物が流れた時だけ流れ普段は伏流とがっている川の音が静かである。でもうが水は見られない。途中に浴り湯と書いた立て札があったがそこは硫黄の臭いが強くて浴れないのではないかと思われる。この道はウトロ側に対してだらだらと続く長い道だ。ラウス温泉までは「カム」という展望台より国後島が見えた。これぞ私の目に映った初めての外國である。

8月13日(火) ◎

羅臼温泉(07:35) — (07:40) 羅臼バスターミナル(08:00) — (09:30) 稲津(10:20) — (10:45) 尾袋沼(12:00) — (13:00) 西別(13:45) — (14:20) 厚床(15:00) — (20:20) 帯広駅

尾袋沼は土堆の跡跡によるキカク半島の結構美しいそらな、舟で一周するだけらしいといふにとどつたが、私たちは経済的、その他の色々な都合により舟には乗らずに出発した。尾袋沼からは因縁バスでオーバイロットファームを通って西別へ出た。オーバイロットファームは雪谷山で刈穂したとかいうがなる程、改革の朝代が、やがてなるほど残っている。尾袋沼から西別まで「羅臼温泉」の路の中をずっと走っているということを輝松手さんに聞き改めて北海道をこれまで、アスリさんと並んで走りました。帯広駅は A.m 0:10 から 03:30 まで待合室を開放するかの注意を要する。

8月14日(水) ◎

幕広(11:12) —— (13:02) 幌尾(13:15) —— (14:35) エリモ岬(15:05) —— (15:45)  
幌泉

10時過ぎまで幕広市内を散歩した後、幌尾へ向った。エリモ岬は余り霧が無くかなり先まで見えた。  
は20分足らずで出発した。

8月15日(木) ①

幌泉(06:30) —— (07:05) アポイヌアリ登山口(07:15) —— (07:20) アポイ山荘(07:25)  
— (08:20) オカ休憩所(08:30) —— (08:35) 監視舎(08:40) —— (08:40) お花畠最上部  
(09:20) —— (09:40) アポイ岳山頂(09:05) —— (10:05) お花畠(10:10) —— (11:15) ア  
ポイ山荘(11:45) —— (11:50) バス停(12:20) —— (12:30) 様似(13:35) —— (16:37)  
苦小牧(18:21) —— (20:41) 長万部(泊)

アポイ登山口までバスで行く。バス停からほんのちょっと入ったところにアポイ山荘があり、入林許可証を発行している。ここでは許可証と同時に腕章を貸与している。山荘から1kmほどは車が入るそこから奥は林の中の登りになっている。ここには電柱があり、その下に道がついているのでアポイ岳登山道と間違わないように注意する必要がある。監視小屋のすぐ下まで森林になっている。小屋までは廻煙所と称する休憩所が5ヶ所あり、いずれも水場になっている。小屋から上は岩とハイマツと草木とになっており、マツムシ草などが咲いている。小屋から20分ぐらいでお花畠の一番上に出る。アポイ岳山頂はダケカンバに少しわれていて眺めはよくない、下りに監視員2人にあった。この辺の監視はかなり大変らしい。苦小牧で列車を下りスポーツセンターなどへ行ってみた、スポーツセンターには王子製紙のアイスホッケーなど数多くのトロフィーが飾ってあった。今夜は長万部で駅泊り。

8月16日(金) ①—◎

長万部(05:01) —— (06:45) 比良夫(07:20) —— (08:10) 1合目 — (08:25) 1合目 —  
(11:25) 2合目(11:30) —— (11:45) 羊蹄山頂の小屋(13:00) —— (13:30) 2合目(13:  
30) —— (15:13) 駐車場(15:03) —— (15:51) 比良夫(16:10) —— (16:20) 倶知安(16:  
59) ニセコエースホステル

比良夫駅に荷物を預け、スイカとホリタケとをかついで出発。駅から登山口までの約4kmのバス道を歩かねばならない。自動車路をまっすぐ登って行くと駐車場があり、そこから登山道となっている。  
1合目を少し先までは、平たんな道が続き、その後はずっと登りだけの道になっている。3合目で朝食。山頂に一泊して御来迎を見る人が多いらしくこのあたりまで7、8人の下山者に会った。5合目には非常に音が大きい。やはり真中ということと休む人も多いのだろう。夕合目から上はお花畠になつていて、そこには花が大変多い。今まで一番花が咲きそろっていたようだ。花の種類はともかく、その種が多い。山頂で食べたスイカはこの世のものとは思えない程うきがつた。下りはかなりとばすことができた。

8月17日(土) ●

俱知安(11:00) → (16:00) 大沼 — 景雲荘ユース

ラジオで台風の接近を聞く。そりゃあ昨日は霧の流れてくる方向と上空で太陽をおおう雲の来る方向が違っていたようだ。今日の行程は大沼公園までとすることにして11時過ぎの汽車に乗った。大沼で下り、大沼公園の方へ向って歩き出してまもなくはげしい雨となった。こりゃこまつたと思って歩いていているとブルーバードが止って乗せてくれ、そこから一番近いユースホステル、景雲荘の前まで連れて行って下さった。景雲荘ユースは私設で設備はよくないがペアルントは気持ちのいいおじいさんであった。

8月18日(日) ○

大沼公園(11:11) → (11:54) 函館(13:00) → (13:20) 函館山(14:00) → (14:20)

函館駅(17:20) → (17:43) 大沼公園(18:08) → (18:35) 函館(18:53) → (22:35)

青森(23:55) → (19日 12:20) 小山

大沼公園ではボートに乗ったりして10時ごろまで時をつぶす。10時ごろ少しにわかあめがあった。台風はもうずっと北へ行っている頃なのに、まだ天気ははっきりしない。夏台風はこれだから困る。函館で1時間程みやげものを見た後バスで函館山まで往復。函館へ帰り連絡船乗り場まで行ったが、満員で夜中の船まで乗れないという。それで大沼公園まで戻り連絡船に接続する列車に乗って未ようということになりもう一度大沼公園まで行った。この作戦はみごとに成功し 13:53分の臨時大雪丸に乗ることができた、青森から八甲田で帰った。

北アルプス西部縦走 8月4日～12日 吉野、柳沢

8月3日 ①

高崎から夜行黒部号で富山へ向け出発。

8月4日 ①

富山 → 美女平 → 千尋ヶ原 → 室堂(12:10)

黒部号の混むのに驚いていたら美女平のケーブルに乗る時はとうとう3時間も待たされてしまった。千尋ヶ原のバスに乗る時になってザックの重さを測ったら 43kgもあった。どうりで腰にひびくと思った。テント場は室堂では雷鳥沢だけである。

8月5日 ● → ①

雷鳥沢(6:45) — 剣御前(7:45) — 別山(9:00) — 真砂岳(10:30) — 富士の折立(11:30) — 雄山(12:45) — 1ノ越(12:35) — 雷鳥沢(13:15)

雷鳥沢じりの霧その後時々霧が晴れる。剣へ登る予定だったが剣御前まで登って霧が晴れそうもないのが立山に変えた。立山はたいして難路はない。さすがに立山はふもとまで自動車、バスが来ているだけあって登る人が連日列をなしている。今年は残雪が例年の2～3倍あるそうで多くのスキーヤー

が歓声をあげていた。高山植物のじゅうたものすざくされいに

8月6日 ①→●\*

雷鳥沢(8:05) —— 剣御前(8:55) —— 一ノ越(10:15) —— 前剣(10:45) —— 剣岳(12:15)  
—— 一眼剣(13:50) —— 剑御前(15:12) —— 雷鳥沢(16:00)

剣御前で休んでいた時に昨日剣岳から滑落女性の捜索を見た。山を甘く見るなと言われているように思えた。私は剣御前を越えて行くこととした。剣は近くに見えて意外に遠い。富山平野に浮ぶ雲海がだんだんこっちへ向かって来るようだったので足を早める。剣沢、平蔵谷、三ノ窓の雪渓の合間をぬって下ってゆく人がうらやましい。途中の岩壁にはクサリとはしごがつけられてありほとんど危険はないが落石には注意したい。これ目に咲くリンドウの花が可憐だった。

8月7日 ①→●\*

雷鳥沢(7:40) —— 一ノ越(9:15) —— 土山(9:53) —— 獅子岳(12:00) —— ザテ峰(13:06) —— 五色ヶ原(13:50)

例によって起きるのが遅い。一ノ越をすぎるのは9:15分になってしまった。昨日までの定着行動とちがつてザックの重みが体にこたえる。竜のガレ場の下りでいいかけんいやになつたうえに獅子岳からの下りで本当にひざが笑ってしまった。ザテ峰まで下つてしまえば五色ヶ原までもうすぐである。五色ヶ原のテント場は小屋の前の道を1位そのまますんだ所になります。

8月8日 ●\*

五色ヶ原(6:17) —— 鳥山(7:18) —— 越中沢山(9:00) —— スゴ小屋(12:04) —— 間山直下(13:40)

五色ヶ原で悲願の黒百合を見た高さ15cm位。外側は黒。中心には黄色いはんてんがあった。しばらくザックを放り投げて見とれていた。俺はじめて山百合を見た時と同じような驚き方であった。鳥山の登りの長かったこと、越中沢の下り16日のザテ峰の下りと同じように本当にいやになつた。ただ目前に聳える薬師の姿だけがなくさめた。スゴ小屋をすぎた所間山のテント場に泊る。

8月9日 ①→●

間山(6:30) —— 北薬師(8:51) —— 鳥岳(9:14) —— 休憩所(10:35) —— テント場(11:30) —— 太郎山(12:05) —— 北ノ俣岳(13:33) —— 仲俣乗越(14:47)

今日は朝から薬師を登る札幌から来たといつての人といっしょになりこの山行中唯一の写真をとってもらう。薬師岳は山全体が大きいためか登り思つたよりながらかであり楽であった。薬師の頂上を越えてからは快適な高原漫歩となる。北ノ俣あたりから遠くに雷鳴が聞こえていたが仲俣乗越ではついに雷とともにぶつかってしまった。山笛はものすごい。ザックを急いで降ろすと荷物の上にフライシートをかけ自分達は雪渓の上の凹地にビニールシートをかぶって地べたにふす。明日はなるべく早く出発してテント地へ着くつもりだ。テント指定地でないのでテントを張るのがちょっと気がひけるがこの場合はしかたがないと思う。

8月10日 ○

出発(6:20) — 黒部五郎(8:40) — 黒部五郎小屋 — 三俣蓮華岳(14:00) — 双六岳(15:27)

テントから顔を出すとオリオン座が東の空から登って来る所だった。日も西に傾き空は雲一つない良い天気であった。出足は調子いい簡単だと思えた黒部五郎の登りが意外に長く2時間余りかかりてしまった。しかしその展望はものすごかつた、昨日まで赤牛だと思っていた山が実は薬師だと気がついてびっくりした。どうも赤牛が大きすぎると思った。薬師はいい山だ見れば見る程好きになるような山だ。剣、立山……と自分達の歩いて来た稜線が見える。眼下には雲の平が早く広がりその周りを黒部の源流が谷を堀っている。黒部五郎からの道は稜線の道とカール底を通る道があるが稜線の道は非常に荒れていて歩きにくい。三俣蓮華からの展望もすばらしい。鶯羽、黒岳がすぐ目の前にあり槍ヶ岳は天をつきあけ槍穂の稜線は空を切りさいている。今日はここを下った双六池のほとりにテントを張る。

8月11日 ① → ● → ①

出発(7:45) — 硫黄乗越(8:40) — 宮田新道(10:40) — 槍ヶ岳(11:40) — 頂上(11:58) — 城沢小屋(14:45) — ノ俣(15:55) — 横尾(16:44) — 徳沢(18:02) — 上高地(18:44)

13日に帰らなければならぬこと。野菜不足、精神的に疲れたのか重なって、またその上に台風が近づいているということなどで双六から槍を回つて下山に決定。槍のガレ場の急な登りはガスで何も見えなかつたためかまったくまいった。槍の肩から頂上まではクサリとはしごの連続だ。槍の頂上はせまい。ここで霧が晴れれば言うことなしだったのだが台風が近づいているといつ山の天気はそうはいかなかつた。頂上を踏めただけでも喜ぶべきだろう、槍からの雪渓の下りはおもしろかった。槍沢の下部から上高地までの林道歩きではまったくまいまいってしまった。上高地へ着いてからは夕飯も食う気にもならなかつた。こんな事はじめてだ、本当に疲れていたらしい。

\*日近くの山行を無事終えたことに対してささやかなコンパを開きすぐにねむってしまった。

上高地は頂始林を残し車の入ることを禁じているため荷物もなくかわい子ちゃんといっしょならきっと楽しかった。

飯盛山 海苔 草場

8月9日、10日 ①

足利(10:13) — 伊佐領(10:20) — (16:30) 東滙

4両程の陸蒸気からはせられた伊佐領は、エーモンなど相手にしていないような駄々気持よい、故にバスも1日一本で連絡がないので歩く。途中10km程度、車に便乗させてもらう。しかしそれでも歩程10数kmを東滙へつくつこぎ、夜行のつかれも出てねむくこと。

8月11日 ○→●

下ら(6:00) — 下ら(16:30)

越

朝もうれつなアラにこそわれう。体調は良ければんぶんたかって歩くのも何かない。鍋~~越~~山への道がみつからずこれをとむる尾根をマラコギする。麓處に出ても道がないので、地図を見ると道のあるはずの尾根より上り西側の小丸森。大丸森への尾根を登っていることがわかつた。降りるのもめんどうなのでまあいいだろかということになり、全く人跡のない所を歩んで行く。途中いくつか人跡らしきところがあつたがすぐなくなる。疊ごろより雨降り出しピッチのびず。小丸森に着くにつれて雑木多く苦戦す。引き返そうという意見と強行の意見にわれてケンケンガクガク。結局強行となり、ずぶぬれて小丸森を過ぎた所で下ら。ナタで木こ切りねば2人用のテントさえれば程の林相なり。雨強し。

8月12日 ●→○→①

TS(6:15) — (9:15) 大丸森山(9:30) — (18:15) 地蔵山頂

1晩中雨。かさをひっくり返して30分もおくと、2枚のポリタンがいっぱいになる程水がとれる。おかげでポリタンはマンタン。しかし外においておいたシャツやズボンは100%水をすってしまった。どうやってくぐりぬけようか。こんな所はくぐりぬけられるんだろうか。思ひよるな宿林とかなり登りが急なので大丸森まで意外とかかる。しかし大丸森でオホカヒヤに聖木山や御嶽の尾根がガスのあい間に見えかくれする。慎重にかつ強引に疊根をかじりて歩くをやめ。10時すぎになって3つめのピークを過ぎるとかほそい切開きが現れ歩きよくなる。しかし時々消えたり、道が細いのでキスリングが引っかかったりとさほど速くはならぬ。地蔵下に池がありTS可ならず地蔵まで行くことにする。

切開きは地蔵真下でかかっている様子なので真下から一気にマラコギ。頂上付近をよじりて道に出る。実にうれしい。日が出てきた中で三角点の下の所にテント

8月13日 ○

TS(6:25) — (9:20) 種蒔山(9:30) — (13:00) 飯置本山(13:10) — (14:20)

御西岳 大日岳(14:10) — 御西(15:25) — (17:30) みたらし池

りっぱな道なり。むこうの尾根上に見える種蒔小屋までは急げどなかなかつかず。小屋の直前で雪渓の水さがぶのみ。種蒔のピークはちょっとはなれているのでピストンする。マツムシ草がやたらと多い中を本山へ。しかし本山につく寸前に空襲のためダケン。気がつくと12時を過ぎていた。インスタントやきそばとやかで出発。本山の神社はサイセン箱がいくつもいくつもかづ小さな社の前にまでもいてある。1円も上げず。あとはのんびりした所をヒヨロヒヨロ歩く。かなり大きな雪渓が足下にデーンとひかれている。御西の小屋は立派なり。ここに荷を置き大日までガスの中をとばす。大日の上ではうまくおいに晴れたが、すぐガスってしまった。大日からの生育等雄大なり。小屋にもとると大パワサフサ心に才に達のキスリングを邪魔物にしている。すぐに背負って出発。天狗の池にテントを張ろうと思ったが、あまりパワサフ心がないといふより、氣うかず(内心もっと立派だらうと思

っていたのぞ)通過でみたらし池へ。池の水はきたながすぐとなりに大きな雪丈、  
している。テントサイトとしても好適。

8月14日 ◎→○

TS(6:30) — 2018P(エボシ岳)(7:45) — ラギ岳(8:05) — (9:00) 北駿岳(9:15)  
— 門内岳(10:00) — (10:30) 扇の地神(11:30) — (12:15) 1708P(13:20) — (14:15)  
— (15:00) — (16:45) TS

エボシ岳で晴れる、大日、本山、北駿が大きくせまり構造。足もとにはエッコウキスゲ、マツ  
ムシ草、等等の花が咲ききそう。これがまた大群落でいる。この辺では人もかなり多く、15分  
に1人位の割合。四太郎池では大きなテントが二つ並んでお泊りしと遙かにパッキングの真さ  
い中、カイラギ岳をすぎるとカイラギ小屋まである。小屋はこれ又立派ですぐ下にずっと雪渓  
がつづいている。北駿頂上は少しでもカメラを引けば出でなくなる所なり。この辺よりなだらかに  
なり、門内等はすぐに着く。扇の地神(ぬめ地紙)でのんびり昼食。1708Pに林差登山路は44年7  
月20日迄不適予定のベニヤあり、もしかしたら直ってかともという希望的観測はバーとなり荷をさ  
へてピストンする。林差の小屋はドーム型のきれいな。ここで大熊小屋から登ってきた人に合々  
途中パークして1日半かかったそうな。もうヤラコにくさんだという顛であった。1703F  
にもどり雪渓のすぐそばにTS。一面の草原なり。落葉と海を真赤に染め双眼鏡でのぞくと船が  
いくつか見えた。こんな景色を目前にして食の進まぬがま。たらふく食ってたらふく景色を  
のうする。正に大自然のなすアザ。夜町の灯がいく見えた。

8月15日 ●→○

TS(6:40) — (10:30) 長者原

下り一方の道なり。左に林差右に本山みてぐんぐん。最後の急降下は注意しないと危険。ツメ  
やひざをやられまうである。河原へ降りた所は全くのない所で登る時はどうするのだと危惧  
になる。飯豊巡へ。客を運んだトラックが来てのせもといったが、時間があるので辞退する。長  
者原(11:00)のバスにのる。海が忘れられず坂町から見てすこし北よりの間島といふ駅で下車。  
約3時間泳ぐ。山と海と実に充実した。間島発19時5分各駅を帰る、新前橋着(3:30)。

小牧川遊行荒川岳=甲斐駒ヶ岳 高橋

8月8日、9日

足利(22:00) — 伊那大島(11:51) — 湯折沢(15) — (16:00)

今回全くの単独行。不安な感じで足利駅を発つ。7月2日飯田線伊那大島駅着11:51。釜沢行バ  
スを待つ。積乱雲がものすごく雷雨のけはい大きい。小牧湯小屋着直後ものすごい夕立。泊り客  
登山者3名。ランプの下夕食をすませ、夜行の疲れをねばと湯につかり就寝 20:00

8月10日 ◎→○→◎→●

小淡湯金(5:20) — 高山滝(8:40) — 広河原谷(9:40) — (10:30) — 大聖寺平(10:15) — 荒川(10:35)

3時半起床、壊電故障のため修理で4:00に出発とさす 5:30発、40km余りのキスであるが思ったより中々快調に距離をかせぐ。小淡湯を出るとすぐに吊橋(かなり長い)をあっかなびっくり渡り小淡川に沿って道がづづく。道は何度も上ったり下ったりかなりの舗修がなされてある。一度川の中をジャラつただけで広河原金着。これからが本日の分つ本山行の難関点。ものすごい覚りと聞く、事実すごい急登2200m付近までは森林の中、ジブサケ急登、道もハイマツ帯に変る頃、雲が出てガスがたちこめ、ぐっと気温も下る。10分歩いて35分休みが精一杯、どうやら背中の皮が一枚ビラッともけたらしい。非常にヒリヒリ、非常にいたい、それともどうやら本日の最高点大聖寺平着。広河原谷に下る人に「台風の接近で山は荒れる」との注意を聞く。さようも荒川小屋に着いた直後雨になつた。夕方になるにつれ風も激しさを増した。

8月11日

予想通り沈殿、外は依然雨、一人だけの沈殿、まさに退屈。それにしても昨晩は風が雨がすごかつた。いつになつたら静まるのか、3.4日はダメなのかも知れぬ。そくなつたら途中で下山してしまおうと早くも決意。とうとう丸一日無事であった、もの心ついてからはじめて24時間無口を経験する。

8月12日 ○→①→◎→●

荒川小屋(5:30) — 中岳(6:25) — 悪沢岳(7:00) — (7:45) — 中岳(8:45) — (9:05) — 高山裏露營地(10:50) — (11:15) — 板屋岳(12:35) — 小河内岳(13:15) — 三伏谷(17:45)

— 忽ち3時半起床、外に出てみるとどうした訳かすばらしい天気。眼前富士が空に真黒に見え5合目付近に一ヶ所のあかりが見えた。やがて、すばらしい御来光、天気快晴、荒川金を出るとすぐさま急登にかかる。道のわきには黒百合の花がひじらしく、中岳へ立ちすぐさまキスをおき向いの悪沢岳へ行って来る事とする。空身のなんと楽な事か、飛びようにして登りきり、帰りひよっこり親子の雷鳥に会う。子供は三人なり。中岳をすぎるとバカみたいな急激下りいがげん足がガクつく。高山裏露營地を過ぎ板屋岳にかけて紫や黄色の花の咲くきれいなお花畠が点在する。本日最後のピークである小河内岳を越える頃はかなり疲労、ダウン才前で三伏峠沢小屋へたどり着いた。いつしか雨になっていた。

8月13日 ◎→○→①→○

三伏峠沢合(5:30) — 本谷山(6:20) — 横右衛門岳(7:30) — 塩見岳(9:40) — (10:10) 熊の平合 — (15:45) 本

さほど濃くはないガスの中三伏峠沢小屋を発つ。木日の最大のピークは塩見岳3046.2m。調子はあまりよくはなかつたが、どこかの大学の尻につき次第はりきり休んでいる間にぬき去る。塩見まで本谷山頂と12のピークをのぞいてすべて樹林帶。塩見山頂直前の傾斜角はものすごい。塩見をすぎれば熊の平までは下りもしくは平坦だし見ていたが大きなまなかい。こゝ上りに登つたりおりにいがげん

あさる。各所に点在するすばらしき花崗岩のそれがいなこと。はるか対岸の農鳥岳の側面にかかる滝のながめがすばらしかった。天気もよさそんひので燕の平にてツェルトを張る。料場代150円也ガッカリ。

### 8月14日 ○→①

熊の平名(5:50) —— 三峰岳(7:30) —— 間の岳(9:35) —— (9:45) 農鳥岳(9:35) —— 西農鳥岳(10:00) —— 農鳥岳(10:25) —— (10:50) —— 西農鳥岳(11:10) —— 農鳥岳(11:35) —— 間の岳(12:45) —— (13:10) —— 中日峰(14:05) —— (14:15) —— (14:30) 北岳金

隣りのテントのざわめきよりあわてて起床4:10。本日はまったく楽勝。いきなり熊の平より急登。明後日到達するであろう仙丈岳が遠くに雄大なり。道ははい松原より岩礫場へとうつり巨大な山。間の岳3156mに立つ、ここにキスをおき農鳥岳へピストンに出かける。ノンストップですばらしく農鳥岳へ。1ヶ所はずかしそうに雪けいがポツンと残っていた。間の岳からの展望は実にすばらしく、本山行も最高頃である。のんびりと北岳稜線小屋へついた。

### 8月15日 ◎

北岳金(5:15) —— 北岳(6:20) —— 中日根沢の頭(8:50) —— 左俣沢の滝(9:20) —— 両俣小屋(10:55)

きょうの登りは北岳山頂までは下りするのみ。山に入つて早ア日目、朝あきて立ち上がる際、よろけるには間口した。しかし北岳3192.4mへの登りはがぜん状調。頂上に立つと濃霧が立ちこめ展望はまったくダメ。サッサと下つて両俣へ急ぎ10:55着、あすみ馬鹿尾根をのり切るため十分休む。両俣小屋はなかなか素朴なり遙が一番のりであった。

### 8月16日 ●→◎→①

両俣金(4:30) —— 野呂川越(5:30) —— 横川岳(6:05) —— 瀬谷地(7:27) —— 大仙丈岳(10:10) —— 仙丈岳(11:05) —— 小仙丈岳(13:30) —— 北沢峰金(15:00)

小屋2時半起床、雨が本ぶりのため予定の4時に出発できず小ぶりになつた4時半発。音一つ聞こえてこないまっ暗の原生林の中一人登つてゆくのは非常にさびしい。野呂川越に出る頃には明るくなつた。これより仙丈岳へ馬鹿尾根をつめる今日この方向に歩く者は少く一人、苦しかろうとみ。いたこの尾根も難なく、入の一杯いた仙丈岳へ。なぜか赤や青や黄色の人々を見てガッカリ。

### 8月17日 ①→◎→●

北沢峰金(5:00) —— 双児山(6:35) —— 駒津岳(7:10) —— 駒ヶ岳(8:30) —— 七合目金(10:00) —— 五合目金(10:45) —— 刀利天狗(11:35) 畦の平(12:30) 竹宇駒ヶ岳(13:55)

今日、無事に行けば星に下れる。あいにく天気は悪変してゆく。風が出、駒津岳では岩の上にドッカリ置いたキスが風でころげ落ちたところであつた。駒ヶ岳への登りで濃霧が出て来て非常に寒い。晴れていればここからの眺望はすばらしかろう。確かに、限前に入ヶ岳が見える程であるのに。頂上で五合目小屋のおやじが二時頃から雨が降り出すのではないかなど言つてゐたが、まずは信じ

てころがるように下る、上って来る人はかけおりる小生を見て嘲笑する。どうしてどうしてその通り  
1時半頃より夕立になつた、雨の中駒ヶ岳神社の境内の中一人感無量えたちつくす。

8月18日

神社脇の荘園一緒になつた神戸の人とバスに乗り芦崎駅へ向う。小梅線から八ヶ岳が来る時よりも何  
と小さく見えた事が、汽車が足利に入り、延期になつて花火大会がきようになつたことを知る。  
その列車の中一人喜ぶ。やっと無事事故もなく帰れた事を。

那須 小島、横尾、草場

9月22日 ①

黒磯(10:15) — (11:00) ロープ駅(11:15) — (12:00) 峰の茶屋(12:35) — (13:00)  
茶臼岳(13:10) — (13:25) 峰の茶屋(13:30) — (14:20) 朝日岳(14:35) — (15:  
05) 清水平

黒磯で増発のバスに乗る。ケーブルの駅の所を下ると三斗小屋のハンテンを着たヤツラがきてどこに  
いくか問う。ここで登山カードを記しハイキングの列に入って茶店へ。峰の茶屋でキスをおき那須岳  
ピストン。所々からものすごい勢いで蒸気をはさ出している。頂上は人のウズ。トランシーバーをあ  
やつるもの数人、峠にもどり、行き交う女の子をながめながらヒルメシ、ここからは人も多くなりゆ  
っくり歩いて行く。朝日からの那須岳は良く写真に撮られているがやはりどっしりして雄大、このあ  
たり紅葉が良い。清水平でTS。水を取りに沢に下るが得られず、そばのあまりきれいではない小さな  
流れ(これがすぐ下で伏流となりずっと下まで出てこない)を使う。なんとなくノンビリムード

9月23日 ②

△(7:05) — (7:35) 三本槍(8:00) — (8:30) 沼の峰 — (9:30) 坊主沼(9:45)  
(10:05) — (11:05) 甲子山 — (11:25) 猿の鼻 — (12:10) 甲子温泉(13:45) — (14:30) 新  
甲子(15:00) = 白河

三本槍からは多少ガスっていたがその間から日光の辺がチラリ。これより道はズッと人気もなく静か  
である。途中30分も休んだりしていたらガスが濃くなり出して沼の峰の下りでは道をふみはずしガレ  
を下る。ここでは人の声がしたので助かったが、軽薄であったと反省。ガスの時、要注意。坊主沼の  
小屋はしっかりしていたので中で休む。以後一気に下り甲子温泉で金50円也を払って風呂に入る。  
小さいながらプールもあって半露天。半混浴。このあと約1時間車道を歩けばバスの出る新甲子につ  
く。

白峰三山縦走

8月19日～8月24日 高村氏、原

8月19日～20日 ①

向生(19:45) — (20:17) 高崎駅 (20:22) — (0:40) 甲府 (4:00) — (6:00) 広河原(6:45) — (7:00) 小太郎尾根、大権沢分岐 (7:05) — (10:00) 御池・八本歯分岐 (11:30) — (11:30) お花畠 (13:20) — (14:00) 白根御池小屋

夜明けの色合い、少し振りに見た山行での朝の情景、今では有無を言わずとも思い出の記の中へ入つてまう。うっすらと明けてきた東の空、葉陰の中で咲く淡い紫を身につけたミヤマハナシノヅに似通じ、それは昨晩の出発時の事故を後かたもなく残しこれからの山旅をやさしく見守っている様である。両毛線の列車事故での不通、それ故高崎をタクシーで行く、途中スピード違反を取調べ、思わず顔をくい本山旅が危ぶまれたが、1~2分の差で最後列車に乗ることができ今は広河原に向うバスの丁度夜叉神トンネルを通り抜けたところである。うす暗い遙か眼下の野呂川の曲りくねった渓谷左に眺めながら広河原の国民宿舎に着いた。夏の寒気に身を引きそぞり大権沢に行く、台風のかか大分大きな岩が所々にころがっている、明かるい沢なので両岸の緑がまばゆく映える。沢の右側に邊があり少し行くと右側より小さな沢の流れがあり小太郎尾根と大権沢の分岐点である。天気がいいので今日沢を行くことにする。沢の正面より右側上方に途中ちらりと北岳の山頂が見え一層沢歩きのおもしろさを増す。やがて北岳のバットレスが大きく我々の前面を覆いかぶさる様にして現われてきた。クライマーがあこがれると云うこのバットレスの岩場の魅力、豪張しい景観である。ここは小屋、八本歯、肩の小屋の分岐になっているそしてT.S.にも向く。先程から輝いているのは雪渓であつた大権沢にニヶ所大きく残っている。この残雪の為かまわりは至る所お花畠である。シシウドの白い花の群落の上には北岳そしてコバルト色で洗つたような青空がある。ヤナギラン、タカネナデシコ、ブンナイフーロ、ハクサンフーロ、トリカブトなどがいまや満開に咲きほこっている。ここから本日の泊りである御池小屋に行く、途中白い小さなカニコウモリの白い花がずっと咲いていて、小屋の道程を我々を快く向えてくれた。

3月21日 ① → ● → ●

小屋 (5:50) — (9:30) 北岳肩の小屋 (10:00) — (11:15) 北岳 (12:00) — (13:00)  
稜線小屋

予定が速く西から東へ動いている、いやな前兆その話を小屋の番人から聞き、赤茶色に濁っている白根御池を後にして急登のお花畠に行く。真白いものの代表作みたいなセンジュガソリ、そしてミヤマハナシノヅを見ているといつしか心も落着く程の高山植物、今回の山旅はこの二種の花で満足したと云っても過言ではなかろう。ダケカンバの見事な樹林に行く、時々黄色に赤い小さな点のまじった様なオトギリワウを踏みつけそうになり童話の中のかわいい花を想い出す。北岳を左上方に眺め昨日の大権沢の雪渓そえ本歯のキレットがよく見える。やがて「草すべり」と呼ばれているお花畠の山腹を稜線めざして直登すると、シナノキンバイやキンポウゲの黄、ハフサンイチゲやウメバチソウの白、トリカブトの青紫、四葉シオガマの赤紫、フレマユリの橙、イワオオギのクリーム色が、見事な絵巻模様をあらわし、この調和が何ともいえない山へきた痛切のうれしさとなって満透するのである。いつしか

急登の草すべるを終る頃にはダケカンバもハイマツに変わりやっと小太郎尾根の稜線に出る。稜線の眺めは正面に仙丈岳が見え、鳳凰三山の白さと甲斐駒の雄姿、遙か彼方に八ヶ岳連峰の赤岳が見える。対面の吊尾根の彼方には富士山が顔を出している。北岳肩の小屋を目の前にして風が幾分強くなってきた。ハイマツに混じて小さなウラシマツツジやトウヤクリンドウ、そしてタカネシオガマが道端に風に吹かれてもうなだれている。天気が悪くなりガスが出て来たので小屋で充分休息を取り、すぐ前にある頂上を目指す。霧に濡れたオダマキ、シコタンソウ、連れの御人が北岳ソウと間違えたチヨウノスケソウの群落をスライドに収めながら霧まく日本ヤニ位の最高峰北岳に着く。昨日の小屋から一晩の京都の娘さん達と花の勉強をしながら、頂上で掃除をしていた稜線小屋の御主人と共に小屋に向かうながら唯一の開花をのがした北岳ソウの葉を教えてもらい、そして北岳キンポウゲの夜店で売っているドライフラワーのごとき小さなかわいい花が強風に吹かれていた。簇つくようなはげしい雨と突風がやってきた。キスの重さもこんな突風では宙に浮いてしまふ、もう小屋は目前である。

8月22日 ①

小屋(5:30) — 中白峰(6:15) — (7:25) 間の岳(7:55) — (8:55) 濃島小屋(10:15) — (11:00) 西濃島岳(11:25) — (12:25) 農鳥岳(13:15) — 大門沢分岐(13:55) — (17:20) 大門沢小屋

昨日からの強い雨と風も上り早くから止み、朝靄を吹き落して小屋の外へ出る。七月に登頂した富士山が薄ぼんやりと号次甲府の町あたりであらうかで、鏡も見える。初めて見る南アルプスの絶景のシーン、富士山が刹々と色彩を変える雄大な自然現象である。つかの間の御来光を拝み小屋を後にして門ヶ岳にいどむ。なだらかな稜線を風に吹かれながら行く。右側には北アルプスの連峰や中アルプスの山々が雲をたずされて雲海の上にあつた。グラダラとした岩の道を登るのは以外と疲れる。中白根を過ぎると岩陰に時々、チングルマボニー、ミの花をつけていた。アオノツガサクラやツガサクシがありクリーム色と赤色の対称を示してくれている。間もなく間の岳に立つことができた。昨日霧にまかれて突風に力元わられて空虚もよく解らなかつたがここから見る北岳は青みがかった急げきに岩場が落ちてゐる。この頂上は以外と広く下らも張れる。ここより塙見岳方面がよく見える。又より一層富士山が迫る様に感じられる。このぐらのルートである農鳥岳が全盛を現わしむれば下りの方を濃島小屋に向う。途中銀ヶ原にねたつてケンメイやチヨウノスケソウの群落が風になびいている。風のあさまるのを待つて小屋に歸り一休みする。西濃島の登りは長く感じられるが今度は木の小屋や対面の隣の山をながめながら登るところが多く頂上に着く。ガクンと切れ落てる荒川の本谷をのぞみながら注目すると西濃島のハイマツの中にいる他のパーティからわれたが遙に見ることができなかつた。西濃島から本岳への道はハイマツと岩の登り下りである。塙見岳や荒川岳が目前に迫っている。農鳥岳の頂上から最後の富士山を望みこれから大門沢の下に移る。ふりかえれば隣の舟と北岳が壮大な山容で寂事であれと書いたそつが感じがする。岩とハイマツの中をしばらく行くと大門沢への分岐に着く。最早今は峰三山とも別れてゐる。ハイマツ等のケンメイ、おおぬ、奥森上原のカラマツの群落にて休憩して

本日の泊りである大門沢小屋に向う。

8月23日 ①

小屋(7:15) — (12:00) 奈良田(13:00) — (14:00) 西山温泉

小屋のそばクリクリ橋を渡って河合の道を行く。矮うかる吊橋を渡って樹林帯の中の道はもん高山植物ではなくて山でも見られる花が咲いていた。原色めいたフジグロ丘ノウが一段とあざやかに我々の目を惹いていた。玉アゲサイの葉と花が道端に行列になって我々と共に歩いているようでもあった。河原で拾った珍しい石、重さが四斤位あるのが、各々の山頂で拾って来た石と共に一段と重みを加えた。河原に咲く秋のキリン草、ドライフラワーに似たいкусユキ草、奇妙な形をしたキツリヅネなどがある。眼前に更道が見える頃やっと本山行も終りに近づいたことを感じた。秋風がそっとすきをなびかせるうちに、発電所からは鹿鳴の番人が親切にも奈良田送車を送ってくれた。ここぞ今日迄の三日間行動を共にした京都の人達と東京の老らく山岳会の貴婦人達と別れを告げ西山温泉に向った。

8月24日 ①

西山(7:13) — (10:43) 阿舟(12:30) — (13:34) 桐生

旅の疲れを治めし帰路に着く、想えば楽しい日々の連続であった。北岳、門の岳、濃島岳の白峰三山一步一歩遙のくにつれて色とりどり咲いていたあの山の花が脳裡をかすめる。本山旅は今迄になかなか多くの高山植物を見ることができ非常に参考となつた。上昇気流に乗ってふわりと出来る雲のふわふわ和やかに溶ける高山植物、又いかほどのかかる日を願つて、最後に連の御人の高村氏によき花の先生であり又よきアドバイス者であつたことを感謝いたします。

比良山系口ノ深谷 内田(0.8) 他2名

7月23日(1967年) ①

神戸(5:10) — 京都(7:30) — 坂村(9:00) — (10:10) 口ノ深谷出合(11:00) —  
F<sub>o</sub> 20m (12:00) — F<sub>o</sub> 10m (12:45) — F<sub>o</sub> 20m (13:55) — (14:15) ツサギ原の道  
と合流する点 (15:10) — (15:40) 武奈谷底 (16:00) — 北比良峰 (16:40) — 方モシカ台  
— (17:40) 口ノ谷口 (18:00) — 江鉄比良駅 (18:40) — 神戸

比良山系は琵琶湖に面した坂村に化されているが反対側のとくに、谷は静けさを保ちつづけていて、これはすぐれた手頃な沢があるにも拘らず、交通の不便さにより、口ノ深谷は他の数ヶ所より大変美しいものがあり、シャワーキライムなど楽しめたが、フランスの感触を味わうのもよい。標高は低いがどこか非常に山深い感じのする谷である。

大峰山系冲童子谷 内田(0.8)

7月15日(1967年) ② → ●

近鉄あべの橋(8:00) — 下市口(10:00) — 川合(12:00) — 大川口(14:50) 本

9月16日 ○

大川口本(6:15) — 沢又(8:20) — 釜滝(10:00) — ジョーレンの滝(12:00) — (12:25) 山上辻(13:30) — 山上ヶ岳(14:25) — (16:00) 小普賢岳(16:15) — 七曜岳(17:30) — (18:15) 行者還小屋(18:55) — (20:00) 大川口本

ビバークのできる準備をしてワラジで谷に入る。昨日入谷したパーティを次次においこし赤ナベの滝以後は完全に先行。この滝は左岸を高捲く。難所といわれるヘツツイサンは簡単に水中を通過。釜滝は左を巻く。出合から滝で始まるノウナシ谷をすぎると 3m、10m、20mと滝が現われさらに20分程でジョーレンの2段の滝に出る。この滝は地図上の 1300m と 1400mとの間にある様子、山上辻からの進路は決めていなかったが、谷を下るのは危険なので主稜を縦走してテントへ戻るより手がない。北山越で一日はとっぷり暮れてしまった。身边に赤く、あるいは青く光る目玉はキッネかトラかライオンかで、突然ピューという叫び声と同時に足下にドサッと飛び出したものがある。鹿にちがいない。大峰はさすがにケモノの天国だと感じたのは後の話。その時は恐怖と不安で、右手にナイフを握ったままテントにつくまで全身コチコチ。

9月17日 ○

大川口本(10:15) — 川合(12:30) — 下市口(14:12) — あべの橋 — (17:30) 神戸

#### 四国剣山～三嶺

(1967年 10月8日～10日) 内田(0.B)

10月8日 ○

(4:00) 小松島(4:30) — (6:10) 貞光(6:30) — 剣橋(7:50) — (10:15) 夫婦池(10:30) — 九箇山 — (12:00) 見越(12:50) — (14:00) 剣山(15:10) — の森(15:40) — (16:10) 剣山企

前夜の船便は帰省客などのため混雑しほとんど眠れず。バス一台分の登山者が貞光より入山。九箇山から剣山～三嶺の稜線が一望できる。紅葉はまだ早い。思ったより高度感のある山なみである。

10月9日 ○

剣山企(7:00) — 次郎笈(7:50) — (8:25) 九石(8:40) — (9:25) イロノ岩屋(9:40) — (11:30) 白髪山分岐(13:10) — (14:30) 三嶺企

朝のうち北方から流れ込んでいたガスが晴れ 素晴しい縦走日和となった。剣山よりむしろ 次郎笈の方がすぐれた山容である。三嶺もさほどなくマザサとススキの畠るい尾根で上越を思い出させる。ススキの群生は 1600m 以上にありこの山域の特徴となっている。三嶺は剣山周辺では一聳立派な山でさらに西に続く西熊、天狗塚にかけて素晴しく高山ムードが感じられる。

10月10 ● → ○

三日出(6:04) — 林道終点(7:25) — (8:10) 名須(9:40) — (10:15) 関戸(12:00)  
福井 — 宇野 — 関戸

旅行のため朝から激しい雨、林道終点に出たとたんに止んだ。名須からのバスは数多くの  
姫川や木の瀬川(イヤガワ)の断崖をはしあり走る、そのスリルと絶景で岩入なる地床が変化  
する美しさを味わいながら4時間近くバス旅行を楽しめる。同宿者は近畿大VV、合宿とのこと。

### 加賀白山(別山へ本山)

(1967年11月3日～5日) 内田(0.8)

11月3日 ①

福井(6:04) — 越前大野(7:35) — 鳩ヶ湯(8:40) — (11:00) 上小池(12:00) —  
五本桧(13:00) — 剣ヶ岩(14:00) — (15:00) 三ノ峰金

上小池まで思ったより時間がかかった。五本桧からの稜線で天候は一層悪化しミヅレとなる。ひどく  
寒い。三の峰の小屋の所在を確認していなかったのでもしわからぬかうたら引き返そうと思つて  
いたので小屋に着いたときはほっとした。

11月4日 ①

三ノ峰金(7:10) — 別山平(8:00) — (8:50) 別山(9:30) — 大扇風(10:40) —  
油坂の頭(10:55) — 赤谷(11:15) — (11:40) 弥陀ヶ原(12:00) — (13:40) 堂堂金  
昨日の雨は2000m以上で雪しながら、八千草の池には雪が残って凍る。この美しさは昨日の苦  
しさを通りこし来てよがったという満足感を与えてくれた。これから向かう白山はさらに白く輝き、  
誇らしげだった。乗鞍、御岳が美しい。白山弥陀ヶ原へは一たん下り下ってから道が登るので後半が  
なり疲れる。御前峰、剣ヶ峰、大汝峰などはすでに真白、それから美しいスロープで弥陀ヶ原が広が  
る。いつかスキーをかづぎあけようと思った。

11月5日 ② — ③

弥陀ヶ原はガスで視界がさがす。大扇尾根道の下り口を慎重に探す。大カングラ雪渓の主筋はむちろ  
ん見られながらも、昨日の好天は自分のために、演出されたような気がした。台山は非常にいい山だ  
という印象を、山の美しさ、人の少なさ、山の大きさ、山の深さ、などありの画面を感じた。

### 氷ノ山(スキー山行)

(1968年3月3日) 内田(0.8)他2名

丹戸(6:00) — 須賀ノ山(11:00) — 高丸(14:00) — (15:00) 丹戸 注意。山崩れして  
いるらしい連中がいたが混っていたので足がそろわず少人数パーティの場合より1.5倍位時間を必要とした。  
八千草スキー場の民宿御落丹戸、福定、大久保などを拠点として須賀の山(スガノサン)に登り  
布滝の頭、高丸、に至り八千高原に滑り込みもともどろいわれる今更と称するコースがある。

須賀ノ山(普通氷ノ山といふ山はこれを指す)まで 1000m の登りで、ハチ高原スキー場の最上部の高丸までは滑降と登りを何回も繰り返し、苦労してかせいた高度は最後のスキー場で大部分消費されるので、登りばかりであったような錯覚に陥る。雪質が良く、スキーがもぐることもなく、タンもゲレンデ同様の感覚ができるので体力さえあればむずかしいコースではない。

### 鉢伏山～鶴川山(スキー山行)

(1968年3月17日) ② 内田 (O.B.) 他9名

丹戸(6:00) — ハチ高原口(7:00) — 高丸東ヨル(7:40) — (8:40) 鉢伏山(9:00) — Aのヨル(9:40) — 平間峠(10:10) — 鶴川山(10:50) — (11:00) 着めし(11:30) — 児和野峠(13:30) — (14:20) 横田部落(14:20) — 村岡(15:00) — 八鹿 \*\*\* (20:00) 神戸

社内山岳部のさそいで特別参加。前日、鉢伏山、氷の山などのふもとの部落の1つである丹戸まで入っておく。天候は良くない。晴れていればさぞ素晴らしいのにと省残念がる。コースは変化に富んでいて楽しいが目標物を一つ一つ確認していくがないと、とんでもない万角へ入ってしまうので馳れた人の同行が必要。このコースは矢張国体の時わざわざ開拓したツアーコースで、この周辺では最も長く最も快適なものである。ただし道標などはない。

### 加賀白山(スキー山行)

(1968年5月1日～5日) 内田 (O.B.)

5月1日 ①

大阪(9:45) \*\*\* (12:30) 福井 — 勝山(14:30) — 谷(15:10) — 五所ヶ原(15:50) = = 堂・森(16:20) — (17:00) 白峰(18:00) = (18:40) 市ノ瀬全

5月の連休に白山のふもと市ノ瀬に入るには福井・金沢いずれからか、白峰に入り歩くか車をチャーターする。福井からは加越国境の谷峠を越える車道があり、連休にはバスが入るとの情報であったが実際に峠のだいぶ手前で STOP。金沢から入れば白峰まではすんなり入れる。策を誤った奴が他にもう1人いてそいつとテフテクと峠越えをするハメになった。幸か不幸か峠を登ぼり切った所でトラックにひろわれたが途中ですてられた。白峰に着いたのがもはや午後の5時。今夜中に市ノ瀬まで入らないと予定が狂うので2人で車をチャーターした。

5月2日 ①

金(7:20) — (9:20) 別当谷出合(10:00) — (11:00) 甚ノ助ヒュッテ付近(12:00) — (15:00) 室堂 — 御前峰 — 室堂全

市ノ瀬から別当谷出合までの林道は路幅の半分位に雪があり途中でスキーにシールをつけて歩いたがかえって疲労した。別当谷出合から尾根に取り付く所が雪の状況が中途半端でわずか 20m 登るのに手

こかった。アイゼンがあれば問題はなかつたのだが、白山のテッパンからこの地点まで標高差約1400mの滑降コースとなる。4月初旬ならさらに市ノ瀬までとばせる。甚助ヒュッテは雪に埋没しているのが見当たらなかつた。標高2000m～3000mが急登なので、重装に加えてスキーを余分にもつた身にはだいぶ答える。弥陀ヶ原に出るとそこには白一色の大ゲレンデが待つてゐる。予定どは明日、白山を下つて加越国境にはい上り長い長い尾根をツアーワーすることにしていたが、荷の負担、日程に余裕がないなどの理由から山頂をねじろに軽装で付近をうろつくことに決めた。室堂に荷をおき御前峰まで足ならしに行つた。

### 5月3日 ①

金 — 御前峰 — 剣ヶ峰 — 大汝峰 — ヒカラ山 — 四塚山 → 大汝峰 — 室堂金

ゴールデンウィークといえども白山に入る者は非常に少ない。ましてスキーをかっさ上げるとよほどの変わり者と思われる。しかし白山の素晴らしさは1日や2日の滞在では吸收しきれない程のスケールを持っている。四塚山から清淨ヶ原めがけての滑降など一人で行なうのが実にもつたくなり残念な気持になる。ぶ厚い綿被トントンをかけたような山肌はさわると崩れそうな感じであるが雪は実によくしまつてゐる。調子にのつてつい下りすぎてしまふので戻るのに苦労した。

### 5月4日 ● → ○

金(8:20) — 尾根下降点(8:50) — (9:20) 別当谷出合(10:00) — (11:40) 市ノ瀬(12:10) — 白峰(14:00) = 白山下 = 金沢 = 神戸

頬の日焼がひどく苦痛を感じるに至つた。夜半から降り出した雨は朝になつても止まない。天候は下り坂と見て山を下ることにする。視界が効かないのと小降りになるのを待つがいつこゝにその気配がない。ついに激しい風雨の中を出発したが、弥陀ヶ原に数mおきに立てられた赤旗を見つけるのに時隔をとられる。尾根下降点からは風をまともにうけないので雨の中を快適にとまではゆかぬが予想通りの大滑降ができた。別当谷出合では登る時よりさらに雪の状態が悪く苦労した。今回はスキー登山というもののつらさ、楽しさなど色々、得るものが多くつた。ただ友人の事情で単独行となつてしまつたのが残念である。

## 北アルプス西穂高岳～奥穂高岳

(1968年9月22日～24日) 内田(O.B.)他2名

### 9月22日 ①

松本(4:00) = 新島口(8:00) = (11:30) 田代橋(12:10) — (14:25) 西穂高荘会  
連休の人出のため上高地に着くまでが一苦労。さらに西穂高荘の混雑と対遇の悪さは天下一品、実にお見事。\*

### 9月23日 ①

金(4:50) — ゼラベッド(5:30) — (6:20) 西穂高岳(6:50) — (7:40) 間の岳(

8:00) — (8:45) 天狗のコル (9:00) — ジャンダルム — (11:10) 奥穂高岳 (12:00)  
— (12:45) 前穂高岳 (13:35) — 奥穂 (14:40) — (15:00) 穂高山荘会  
コースは要所にクサリがあるものかなりきわどい。一木一草もない岩屑と岩壁の縦走コースで遠方から見るとあんな所を通過できるのだろうかと不安になるが実にうまくルートがつけられているので注意さえすれば歩ける。ただし重荷では無理と思う。初めて見る北アルプスの景観も写真を見なれているせいか別に感激なし。時期も悪かったと思うが山としての魅力に乏しい。

### 11月24日 ①

金(5:50) — (7:05) 北穂高岳 (7:30) — (8:45) 穂高山荘 (9:30) — 白出沢下 (11:30) — (12:30) 新穂高温泉 (13:30) — 高山 — 神戸

奥穂、北穂間もゴツゴツした岩尾根で何ヶ所かクサリがあるが西穂、奥穂間よりはるかに平凡。滝沢の雪峯も小さい時期なので見ばえがしない。

### 木曽御岳

(1968年11月23日～24日) 内田 (OB) 他2名

### 11月23日 〇

木曽福島 (7:50) = (8:20) 松尾滝 (8:40) — (10:10) 千本松小屋 (10:20) — (10:55) 中ノ小屋 (11:15) — (12:05) ノス小屋 (12:45) — (13:40) 8合目小屋 金

午前4時頃福島駅についたがすぐには車がつかまらず8時頃まで仮眠。今頃は信州側の登山口でバスの入るのは田ノ原コースのみであるがこれも王滝口止まり。我我の裏沢口からのコースはバスがない。しかし 田ノ原コースでは標高 2200m 黒沢コースは 1650m まで車道が伸びている。我我は予算、晴れた空、それに山に登るという自尊心を考えて 1100m の地点で車を降りた。4本松小屋までは葉の落ちた道を続く歩きながらあるいはカヤトの原から御岳の外輪壁が現われる。ここが8合目で頂上まであと 500m ほどである。幸い小屋は解放されていたのでツェルトで寒い夜を送らずに済んだ。

### 11月24日 ①→②

金(6:20) — (7:40) 劍ヶ峰 — 摩利支天山 — 三ノ池 — (11:40) 8合目小屋 (12:10)  
— 千本松小屋 — 松尾滝 — (16:05) 黒沢 (16:10) = 木曽福島 (16:50) — 神戸

中央アルプスの後に重なった南アルプス甲斐駒の肩から御来迎。積雪量は多い所で 500m 位。乗鞍岳と穂高連峰が非常に美しい。飛騨側の湯河温泉へ下る道も今頃なら何ら心配はなさそうだ。ただしアイゼンは必要。我我は往路を戻ったが松尾滝から黒沢バス停までの車道はやはり飽きる。御岳はスキーツアーの山としてよいだろう。

：野沢温泉スキー場 深沢、草場兄弟、横尾、江黒、小沢、上山、堀江、高橋、斎藤、須

1月2日～1月7日 田

1月2日 ①

恐ろしくバカでかい荷物をもって野沢温泉へ、人通りの一一番激しい所にテントを張る。先輩諸氏の経験豊かなためきわめて速かに営業完結。早くも夕食の心配を始め、夕食後は深沢、草場両氏はナイターに出かけ、我々下部は早速温泉としやれる。この温泉はある類のヒフの病気にきくそうである、さいわい実験用にその気のある人物がいるのでためすには都合がよい。

1月3日 ②

午前中雪降の特訓を受ける。どこかのメッシュエンがカッコウよく行く後を我々がバタンバタンと穴を開ける、午後は自由行動、後からくる横尾さんと小沢さんをむかえに行く。先生様はリフトでどこへか行った様子。夜はフロのはしごをやりたとのこと。

1月4日 ③

初めて上の平に登ってみる。ヘボスキーの我々にも曲れそうが画面がづづく、ここにくるまでは、第3リフトを4～50分も待たなければならないが、やはりこのゲレンデの方が気持よい。結果はさしたる成果もなく、先生諸氏にたぶらかされてシュナイダー・コースを走り歩いておりる。

1月5日 ①

上の平から妙高がみえ、朝食のとき屋の分まで食いためして出てきたので一日中もう食べずにいても平気なはずであるが、深沢さんのごときスーパーマンのほかはもう昼前にもシラフアラであった。どうにかこうにかスキーにのってテントにたどりつきまずは夕食とする。

1月6日 ④

江里、上山、須田の三名は帰り、深沢さんは床屋に出かけ、みなちょっとあきてきたもよう、午前は皆上の平にゆく。第3リフト待て雨に降られる。上にゆくに従い雷雨になり上についたら雨となる。皆元気に滑り修めをする。

1月7日

朝から出発の準備をする。テントの背中の凧がずい分深く凹んでいる。ゴミをきれいに片付けて、草場さんが土地借用の札を言いにゆき、スキー場を後にする。

：平標山スキー 深沢、草場

3月20日 ○→○

後閣＝火打峠(9:15) — 稜線(11:30) — 松手山(12:30) — (14:05) 平標山(14:35)  
— 松手山(15:00) — (16:20) 火打峠(16:40) — (17:05) 草場スキー場バス停

2月にやろうとして天候にやられタケノコ山まで歩いて登った事があり、今度はぜひ登りたかった。前夜、桐生のK君の所に泊り、火打峠でバスを降りたのが9:15であった。ここは草場スキー場バス

停から歩いてもたいしてかからない。雪はかなりしまっているがすぐ踏みぬいてズズズス入ってしまう、木の間をシールをつけて登るのが良さそうだった。学年末の雑務に追われたFと卒業式が前日だったKの2人共グロッキー気味で、稜線に出たのが11:30となってしまった。ここからは雪も少くないスキーをかついで行くのが早い。仙の倉よりは石がゴロゴロしていた。天気にあわれてここからはスキーで、やりくりしながら下る。途中から稜線をはずれた(下ってきて左)の小尾根に入り木の間をなんとか回って下る。雪がしまっていたのでかなり回りよい。尾根を下り切って火打峠までスケーティングしてそこから、~~草場~~スキー場まで歩く。(17:00)発のバスが2台あって後のバスに丁度とび乗れた。

蓬峰スキー 深沢、草場、部員外1名

1月10日 ①

土合(3:05) — (7:00)白樺小屋(7:30) — (9:00)蓬峰(12:45) — 旧道(13:20)  
— (18:00)土合

今シーズンの初滑りをしようという事を蓬峰まで行く。(この時天神平はまだ不可能に近かった)。湯檜曽川をはなれ急坂になる頃明るくなり、送電塔の下で朝食にする。この辺より雪が現れ白樺小屋では約40cm程あった。ここからスキーにシールをつけはいて行くことにする。部員外の学芸先輩氏はシールなき為ナフで間に合わせていたがだいぶ苦戦したようだった。かえってスキーをかついで歩く方が早いかも知れぬ。峠の辺はササが少し頭を出す程度の積雪でササの多い所は充分スキーができる。無人小屋でラーメンを作りながら新雪というよりクラストした雪と遊ぶ。ここではさすが先輩氏体育専攻、体育の先生だけあってバッテン。下りもスキーで小さい木を押しのけながら下ってしまったが、旧道は途中くずれてしまつた所がありスキーをぬいでよじ登りよじ下る。かなり荒れていて、時間を食ってしまい、マチガ沢の辺で暗くなつた、意地を張り無理して懐電もつけずに土合まで歩いたが、駅のストーブが疲れた体になによりのごちそうであった。

尾瀬スキー・ワンデルング 江黒、横山、小沢、斎藤、高橋

3月21日～3月25日

3月20日 ②

沼田(9:30) — (12:10)戸倉スキー場(12:30) — (16:20)本

スキー場で昼食後出発。今年は昨年よりも残雪が多く歩くのに苦労する。バス停より全て雪が深くつもっている。スキーをそりにしようという珍案を試してみたが坂道ではすぐ曲ってしまい使いものにならない。平地では使えそうである。アカンを5人中2人しか持参しなかつたので差が生じ進みにくい。本日は津奈木沢行きはあきらめ途中に幕営。

3月21日 ② → ① → ②

木(8:00) — (10:35) 津奈木沢橋木

雪は相変わらず柔かく、歩くのは本日も骨が折れる。やっとのことで予定地に着く、津奈木小屋には誰もいない。山の鼻にパトロールの人がいるとのこと。午後はここでスキーを楽しむ。幸い少しばかり青空もでき笠ヶ岳も望まれる。ここもかなりの人々が雪の中を通りので一日中静かなことはない。冷えは大したことはない。

3月22日 ◎

木(7:00) — (8:30) 鳩待峠(8:50) — (9:20) 山の鼻(10:00) — (13:10) 木

鳩待峠まではすぐ、だが上は見晴しがきかず至仏登山は断念し山の鼻に行く、パトロールの人がここに居り、ニ三の大学のパーティーも居る。横山さんはアヤメ平に行こうとしたが途中熊の群の真新しい足跡に驚き我々の後を追い山の鼻へやって来た。この頃この辺は各種動物の動きが活発で良くわかる。津奈木にもどりすぐさま小沢さん下山。

3月23日 ① → ◎

木(7:00) — (8:30) 鳩待峠(8:50) — (10:30) 小至仏(12:30) — 鳩待峠(15:45) — (15:00) 木

Eさんの疾患悪化のため10時頃下山とのこと。残る3名至仏をめざす。早朝のため雪は固いのでスキーはかついで登れる。鳩待を過ぎしばしの青空、至仏の大斜面は全面まっ白、心はおどる、四五人のグレーブ<sup>7</sup>が思い思いの滑りっぴりでおりて來た。なおもタンネの間を登り小至仏中腹で休憩し、荷物を置いて小至仏の山腹を上ったり下りたりした後、小至仏に登りこれより滑降開始。滑降といつてもバカみたいに遠々の斜滑降、我々は途中よっ白な花咲ケ原を見下ろし、満足の至り也。

3月24日 ◎

どうした訳か、天気のせいか、熊のせいか、疲れが見えたのか、本日は外出はやめ丁度付近の散策とシャレ、あっちへ行ったりこっちへ行ったり、二人減ったため食料がよくぞ余ったり！朝食とも昼食ともオヤツともつかぬまま食うに食う。山に来て肥って帰ろうという趣向。

相変わらず天気の回復の兆はないようである。食うや寝食つらや寝して今日も暮れる。

3月25日 ◎

モソモソと起床すると、どうやら外は雪のようである。里はもう春というのに妙なものである。

Yさんは明日まで居しごまと主張したものの、Xさんと小生の「居てもどうしようもないの帰ろう」と同調、荷造りにかかる。昨日食いに食ったものゝまだ残っている、持ち帰るには重すぎるのを涙をのんでおいてきぼりにしてゆく事にした。重み拂りしきる中テントをたたみ、スキーを付けて戸倉まで滑りおりる。道のわきが深い沢であるのと、重いザックのため中々うまくいかぬ。新雪約十センチでスキーに雪がへばりつき非常に苦労。来る時「帰りは楽だ」と楽しみにしていたのが大きなまらがい。無事三名戸倉にたどり着く。

尾瀬 平ヶ岳 大浦、深沢、草場

3月29日 ①

桐生 — 沼田 — 戸倉 — 津奈木沢

今年はまだ戸倉スキー場までバスが入っていた。鳩待峠入口で下車。下の橋の所で昼食。荷物（連絡不足で多すぎたもの）を橋の下にかくす。すぐ雪が出てきたので大浦先生とFとはスキーに荷をつけ引っぱる。Kは荷にスキーをつけてかついだまま。かなり固まっていてふみぬかなければそんなに入らない。30分も行くと小さなナダレのあとがあってK先行。2名は苦戦す。以後K先行のままで残り2名は後続。津奈木にはじこかの山岳部のテント2張。KよりFが45分。大浦先生はFより1時間以上も遅れてきた。

3月30日 ①→②

木(6:35) — (8:05) 鳩待峠(8:25) — (9:40) 山の鼻(10:30) — (12:45) 外田代からの沢より580m先木

一気に鳩待まど上る。スキーをつけて下るうち3人共バラバラになってしまい山の鼻まで各自思い思いのコースをすべる。またO先生遅れる。山の鼻にはテント多數。小屋ご合宿中のパーティもあり昼食ののち猫川にそって柳平の方へ入る。外田代からの沢をすぎて約580m進み沢分岐をT.S. 猫川の水をくむ。天候悪化のきざし。

3月31日 ●→①

木(8:45) — (9:35) 外田代(11:40) — 景鶴山(12:10) — (12:25) デポ地点(12:35) — (13:30) 上毛 — (13:45) テント着

朝の内小雨。疲労もあつたので平ヶ岳は見送り。少しすると天気も良くなってきたので外田代へ行く。さらに景鶴まで足を伸ばす。大白沢の岩壁が雪もつけずにそびえている。このあたりRWVの赤旗多數あり。ゲイツルは岩の出る下のスキー場。ここまでシールが良く効いた。あとはよじ登る格好で頂上へ。平ヶ岳への稜線が招く様に見える。至仏や燧も見てて尾瀬ヶ原に1、2条とぎれとぎれの水流が見える。下りは我々の下手なスキーでもやはり早い。T.S.より明日のコースを見に行く。ここでFはメガネを破損。Kはヒザを痛める。

4月1日 ①

木(6:10) — (7:50) スズケ峰(8:05) — (9:45) 白沢山(9:50) — (11:10) 平ヶ岳(11:25) — (11:50) 白沢山(11:55) — (14:20) 大白沢山(14:35) — (15:15) 外田代出口(15:30) — (15:45) テント着

エイアリルフルがれど冗談のヒマもなく平ヶ岳へ向けて出発。コースはスズケと日崎のコルより南東へ伸びる小尾根にとりつく。スズケまではスキーをかつく。スズケからは奥利根の山が望める。ここで大浦先生は大白沢の分岐をまいてトラバース。FとKは稜線を行く。大浦先生の地図を読む目にあどろく。1918と1888のユルで大休止の後一気に白沢をこえる。夏には一面のヤラも今はすべて雪の

下である。稜線はそんなにせまくもなく又雪ピも多くなかった。平の下で昼食。が入がかかってきたので急いで山頂へ。遠望はきかなかつたが卵型の岩等はみえた。あまり天気も良くないのですぐ下る寒いヒテカテ力に凜りそうな斜面だつたが登るのに素足でちゅうどよかった固さなのでスキーでもあまりスピードが出ず手ごろであった。1時間以上もかけて登った所を5分たらずで下る。帰りは大台沢へ登る。北東の面はずっと急なり。岩壁に気をつけて大きく回りうつ下るうち尾根をまちがえて猫川に入ってしまった。ピヨロピヨロの滝とおぼしき所をやつと下り小尾根をこえて外田代へ下る。

4月2日  $\odot \rightarrow \odot$

木沢(10:05) — (11:20) 山の鼻(11:55) — (14:10) 鳩待峠(14:30) — (15:05) 津奈  
木沢(15:10) — (15:30) 赤沢出合(15:35) — (16:15) 橋(16:40) — (17:10) 戸倉  
(18:00) = 沼田 — 桐生

雪のため出発遅れる。重い腰を上げて山の鼻へ。スキーに雪がコビリついてすべらぬ事はないらしい。さらに猫川にかかる雪の橋が心もとない。吹雪の様相を呈する中、強行して鳩待へ。みなフラフラになる。ここで一息入れてスキーをはく。寒くて雪がカチカチの上荷がまた重いので思うにまかせぬ赤沢をすぎるころより天気もよくなる。傾斜がなくなり体力をふりしぼって笠置川の橋の所までスキーで下る。

## 水元・水郷サイクリング

5月3·4·5日

加藤、河野

卷之四

桐生(8:30) — 足利(9:30) — 小山(11:20) — 笠間福荷(15:00) — 水戸(16:15)  
桐生を出て 小山で昼食を取るまで 1 時間、 5 分休みのマースで順調に行き、 そのあと、 笠間まで  
約 3 時間で行き、 笠間福荷に着て、 さらに水戸まで行き、 水戸では音楽園へ入ったが、 梅の時期で  
なし、 時間も遅かったので、 何も見るものはなかった。 水戸駅でシラフに入りて寝る。

5月4日

水渠(8:30) — 大洗(8:30) — 潮来(11:50) — 土浦(19:00)

朝、水戸駅前の食事で朝食を食べ、すぐに大洗に向けて出発する。途中、水戸市内で道をまちがえり、うぐいすを置いて大洗へ行く。大洗まで半時間程雨に降られるが大した事はなかったので、大助かりである。大洗では漁港に出てみるが昨夜からの雨のためか、波が大きかった。大洗から鹿島灘に沿って西行が、40分程走ったら、茨城県道諸に出たため、ペースがかなり遅くればじめる。道路から離れて海岸にはほとんど見えないのでがっかりした。途中のガソリンスタンドで泥を落とし、さらに、自転車屋で油をモラってナエー上につける。潮未で昼食を取り、潮来大橋を見て、千葉県に10km位入る。更に油をモラってナエー上につける。潮未で昼食を取り、潮来大橋を見て、千葉県に10km位入る。その後、やはり旧道引号に戻り、一路土浦に向けて走る。しかし、それまで晴れていた空のかなたに鳴雲が出来はじめ、とうとう、どしど降りの雨になつて、土浦と竜ヶ崎との分岐点で蓮子やに飛び込んでしまつた。

ぞれやどりをする。結局、2時間半も足どめを食う。直径1cm位の氷が降り、さらにはすぐ近くにナリまど落ちる始末。5時半に菓子屋を出、土浦には7時に着いたのだが途中、日本一調のサイクリストと出合って、土浦まで一緒に走る。静岡の人だそうである。やはり駅に泊る。

5月5日

土浦(7:30) — 筑波(8:15) — 筑波(11:00) — 古河(12:00) — 館林(14:35)(16:00) — 太田(17:00) — (17:20) 事故(18:00) — 桐生(19:00)

土浦駅で駅弁を買い出発する。予定では今日は早くつくので、筑波山に登ることにする。しかし、途中まで登った所で、河野君の自転車のディレイラーの調子が悪くなつたため、修理をしている間に時間を食いすぎ、駅弁を食べて下る。古河で昼食を取り、道を聞いて館林に向けて出発する。古河—館林の道は無舗装のため走りづらい。白駆日だったため、市内はたいへんな混み様。我々もつ、じ在公園へ行くが、残念な事につつじの時期も過ぎていてほとんどつ、じの花は咲いていなかつた。その後太田を過ぎ、桐生市へ入る。2.3キロ手前で追突事故を起こしてしまひ。フォークが曲がってハンドルがきかなくなつてしまひ。しかたがないのでドロだけをはずし、すこしフォークを伸ばしてようやくハンドルがきくようにして、そのあとゆっくり走って帰る。サイクリングに限らず、山行等に於ても、気のゆるみからか、帰りになってがらあもわぬ事故を起こしがちである。以後注意したい。

西上州佐々サイクリング 堀江、松田

6月29日 ⑥ → ●

太田(7:00) — 一本庄(8:40) — 下仁田(12:30) — 田口峠(16:00) — 佐久市(18:00)

本

このサイクリングの目的は、夏合宿の心身の養成にあつた。まさか夏合宿予定の東北まで行くことはできないのぞ。この2日間で行って来られる所、また国道山道、峠を通るコースとして、この西上州佐々を選ぶ。2年生も行く予定だったが急用のため、我々3年のみとなり夏合宿の養成という気持ちからは少し遠ざかつた感がある。しかしふりかえって見れば、十分その意義はあつたと思われる。田口峠の登りを1時間位見込んだのだが実際は3時間もかかつたりして我々の計画の立て方に疑問をいたりした。このコースは心身の鍛錬には最適と思われる。T.S.は佐久市の龍藏神社の境内。サイクリングに於てテントでは重いということをツェルトを持って行ったのだが、例によつて足がはみ出しあまけに雨が降り出したりしたためぐっすりと眠ることができず、苦しい一晩をあつた。……重いものを取るべきか、熟睡か。

6月30日 ⑥ → ● → ①

佐久(6:00) — 小諸(8:00) — 雄冰峠(10:00) — 松井田(12:00) — 桐生(15:00)  
朝、千曲川をながめ、今日の天候を心配する。走り出すと割と順調なので小諸の駅迄足をのばし時間調節を行う。御代田あたりから雄冰峠まではかなりのこう配なので疲れは倍。輕井沢駅に着いた頃に

降られたが小雨なのでカッパを着ずに通過。碓氷峠では上りの車は多かったが下りは少なかつたので何の苦労もなく横川迄っぽしる。この日の行程は勾配はあったが全線アスファルトなので昨日よりは疲れず、桐生には予定より早く、午後3時に着いた。

## 編集後記

ここに皇海第5号をお届けします。本年の我部の活動の主眼は「ワンゲル活動を広める」ということでした。具体的には今までの如く山へ行くのみならず、平地歩き、サイクリング、川下り（これは予算の都合から実現しなかった）等にも、我部の活動範囲を広めることを意図したわけです。このことは夏合宿に顕著に現われていると思います。即ち、今まで夏合宿とは見られなかった「海岸隊」と「サイクリング隊」の二隊を新しく加えたのです。空間的な意味での「ワンゲル活動を広める」ということのために、目的地を東北地方としたわけです。とにかくこの一年間は何んでもやってみようという基本方針でやつた結果、手を広げすぎてしまって何か一つ、充実したものはこれである。といい得るようなものはなかったかも知れません。しかし私達はこれらの活動の中から多くの教訓を得たと思います。その点においては得るところが多くあつた一年間ではないかとも思われます。賢明なる後輩諸君はこの一年間から得た知識等を生かし、ワンゲル部が次により実り多き一年間を迎えるように努力してもらいたいと思います。そのためにはこの部誌が少しでも役に立てばと思いますが、私達編集係の至らなさから、提出されたレポートを充分生かしきる様な編集のできなかつたことが残念に思われます。

発行者 群馬大学工学部・ワンダーフォーゲル部（桐生市天神町1～221）

# 部員住所録

(現住所)

(帰省先) 1968年12月現在

4 W	小沢達樹	群馬郡群馬町棟高1928の99 ク
4 G	横山崇雄	桐生市相生町1の126 ク
4 S	斎藤譲	新田郡新田町上田中180 ク
4 K	原文雄	桐生市本町3丁目299 堀江邦三方 埼玉県本庄市北堀1479
4 M	江黒茂	桐生市菱町黒川2丁目1437 小堀貞一方 埼玉県熊谷市石原1907
3 W	加藤芳彦	桐生市宮本町1505 坂口方 静岡県賀茂郡下田町1丁目4の18
3 W	広田雅司	高崎市日高町1124 ク
3 S	岡部宣男	足利市板倉町800 ク
3 S	中島好司	勢多郡柏川村月田1146の1 ク
3 K	上山悟	桐生市東2丁目4の42 埼玉県児玉郡美里村北十条84
3 K	小林賢司	足利市五十部町1131 ク
3 K	新沢健一	桐生市梅田1丁目202の1 峯岸邦武方 新潟県柏崎市西本町1丁目10-39
3 M	埋橋文人	桐生市宮本町 坂口方 長野県伊那市富岡6084
3 M	小堀正裕	新田郡新田町花香塚836 ク
3 M	斎藤勝男	桐生市宮本町 千葉県東金市菱沼111

3 M	南 雲 利 夫	桐生市本町3丁目299 堀江方 新潟県南魚沼郡六日町八幡15の2
3 M	根 崎 秀 幸	桐生市天神町1の639 啓真寮 東京都国立市北3丁目4番地2の2
3 M	山 田 定 男	足利市通り3丁目3513 ク
3 E	須 神 誠	桐生市天神町1の639 啓真寮 安中市嶺623
3 E	中 島 恒 弥	桐生市天神町1の639 啓真寮 京都府京都市右京区嵯峨二尊院門前往生院町6
3 L	堀 江 英 雄	足利市月谷町392 ク
3 L	松 田 衡 次	太田市内ヶ島 1574 ク
短3 C	伊 藤 苜	桐生市宮本町1460 杉戸方 新潟県加茂市加茂1221
2 W	西 口 一 伸	桐生市東堤町2352 小平利平方 大阪市旭区新森小路中2-37
2 W	五十嵐 和 男	埼玉県本庄市文字山王堂212-2 ク
2 W	宮 川 英 夫	桐生市宮本町1464 板口信一郎方 茨城県下館市金井町甲373
2 W	大 橋 進	桐生市本町3丁目299 堀江方 埼玉県浦和市別所2の14の9
2 W	若 林 実	足利市錦町29 ク
2 P	高 橋 敏 夫	足利市助戸新山町1559 ク
2 P	吉 野 栄 二	桐生市天神町1の639 啓真寮 埼玉県熊谷市久下530
2 P	河 野 政 美	桐生市宮本町1445 斎藤方 徳島県麻植郡鷲島町知恵島境815

2 P	鳥居寿一	桐生市宮本町1445 斎藤方 横浜市戸塚区阿久和町3662
2 P	大沼善行	足利市助戸大橋町1686-5 "
2 P	滝野哲司	桐生市天神町1の639啓真寮 群馬郡箕輪町生原1745-1
2 C	根本隆一	桐生市天神町1の639啓真寮 北海道函館市柏木町97
2 L	荻野良一	桐生市天神町1の639啓真寮 埼玉県深谷市上敷免965
2 L	浅見武義	桐生市天神町1の639啓真寮 羨岡市上戸塚497
2 E	須田好明	桐生市相生町5丁目111 吉田方 千葉県館山市竹原715
2 K	川野行由	桐生市天神町1の639啓真寮 兵庫県尼崎市常光寺西×町1の34
2 K	加藤健一郎	桐生市西久方町1の759 夏子利一方 三重県三重郡菰野町1452
2 M	渡辺等	桐生市菱町黒川2141 米山方 姫路市玄畠区京見社宅14号
2 M	闇田卓夫	桐生市本町2丁目150 "
2 M	斎藤功	桐生市天神町1丁目639 埼玉県藤岡市
2 M	北詰茂広	足利市旭町788 "
院1 C	木村隆男	桐生市宮本町1505 払口方 神奈県平塚市南原243
院1 E	草場彰	足利市今福町1 "
顧問	大浦勝	桐生市西久方町1の759 夏子利一方 島根県松江市朝酌町1098

## OB住所録

石坂 長己	三菱化成 福岡県北九州市八幡区南王子町南王子寮
久保田 異昇	新日本製鐵KK 熊本県水俣市陣内塙向山寮内
宇多川 紘	高崎市東町110
長谷川 章	興國化学山辺工場研究開発部 太田市由良883
河野 通利	三菱油化 三重県四日市市小古曽町1700追分寮
西原 功	群栄化学工業 安中市下秋間甲1524
岩下 佳司	日清紡績富山工場 富山県富山市堀15
新井 靖衛	東洋パルプ 佐賀県鳥栖市広町北吉前田100海陽寮
大島 隆天	山羊パルプ 島根県江津市御田南寮
渡海 康二	昭和化学工業 太田市鳥山1523
鳥居 審治郎	千野製作所王室皮貨課 藤沢市
見併 送忠	三菱油化 三重県四日市市小古曽町1000内部寮
関口 缶男	群馬大学工学部機械工学科松居研究室 埼玉県小玉郡上里村勅使河原1159
篠谷 好司	三菱重機 玄島県福山市野上町2-20-2野上寮
鳴原 聰二	東芝電気器具加茂工場 新潟県加茂市上条352新町寮
秋草 洋二	平岡染織草加工場 埼玉県草加市松江町703同工場内
藤村 季道	モーリン化学 栃木県足利市駒場町

内 田 邦 夫	神戸精錬 神戸市灘区篠原字牛小家山101-4六甲台神鋼寮
朝 倉 正 博	日本電気玉川事業所整流器事業部技術部 川崎市野川3139日電野川寮
大 深 光 守	東芝電気器具前橋工場中央技術部 前橋市吉市町130
鹿 山 公	精工化学 東京都北区昭和町3の8の4武蔵織繩方
小 村 弘 一	明成商会東京営業所 東京都大田区田園調布3の46の3明成寮
高 橋 告	群馬日産総合サービスセンター 前橋市文京町1-53-10
川 田 英 一	堀田産業 足利市元学町823
小 柳 健 次	(不 明)
黒 田 宏	埼玉化学工業 埼玉県浦和市
木 村 隆 明	群馬大学工学部大学院 桐生市宮本町1505坂口市太郎方
小 島 昭	群馬工業高等専門学校 桐生市本町4丁目333
横 尾 圭 夫	三豊製作所宇都宮工場 栃木県宇都宮市下栗町2200
草 場 彰	群馬大学工学部大学院 埼玉県足利市今福町1
佐 子 岩 男	日東製粉 埼玉県草加市栄町秋原4地番46-7
五 十 廉 信 之	東洋インキ製造KK 埼玉県浦和市南浦和公園住戸42-501
久 保 田 耕 司	東芝精錬 埼玉県浦和市
藤 井 幸 吉	東京工業大学大学院 東京都品川区豊町6-26-2

## 訂正表

- P.13 下より12行目 期間の後にメンバー「上山、広田、河野、鳥居」を挿入。
- P.15 上より4~6行目 コースタイム下の如く訂正。  
〔~~（4:30）-(6:22)西又沢(6:48)-(8:58)舟(10:15)-~~  
- (11:20)天狗森 (11:30)-(13:50)神室山頂 (14:00)-  
- (14:00)小又山舟〕
- P.18 上より2行目 期間の後にメンバー「田部、加藤、浅見、大橋、宮川」を挿入。
- P.27 下より3行目 期間の後に「根岸、南雲、埋橋、高橋、草場」を挿入。
- P.37 最下行 「夕焼の雲が(祭の)終りの熱狂」  
上の如く( )を挿入。
- P.42 下より2行目 「杞」→「根」の如く訂正。
- P.78 下より5行目 「8月9、10日」の「O」の所が不明瞭。
- 下より6行目 「深沢、蓮沢」の「深沢」の部分が不明瞭。
- P.80 下より9行目 「坂町から見て少し」の如くに訂正。
- 下より7行目 「高橋 徹」→「高橋徹先」の如く訂正。
- P.92 下より3行目 「草」→「苗」の如く訂正。
- P.93 上より7行目 " "
- 上より10行目 「2月」→「12月」の如く訂正。
- P.102 O.B.住所録 宇多川氏の住所 「桐生市仲町2丁目3の37」  
大島氏の勤務先 「山洋→「山陽」

4月4日 訂正。